【文化としての住まいを考える】

住宅建築

6
2020 NO.481
第481号／2020年6月1日発行
隔月刊年6回(偶数月)1日発行

田中敏溥の仕事

コミュニティを育む家づくり

6 2020 NO.481

住宅建築

2020年6月1日発行
振替00130-1-135056
https://jyuken.site/

特集

上写真／「北国分の家」
下写真／「村上の家」 写真＝垂見孔士

特別記事

ランドスケープの夢
Dream of Landscape

高野文彰
TAKANO Fumiaki

高野ランドスケーププランニング:編
TAKANO LANDSCAPE PLANNING Co.,Ltd

文明の発展だけを目指すのではなく、
より幸せな生き方を求めて、
多くの人たちがランドスケープに
命の灯を輝かせてきた。
ランドスケープデザインは
人々の「夢」を実現するためにある。
土地の歴史を、生き物主体の環境を尊び、
心安らぐ美しい風景と文化をつなぐ
多様で生命的な世界である。
この本は、多くの人たちとの夢を実現する
ダイナミックなプロセスと
感動をまとめたものである。

夢を形にして育むために
100年後、1000年後、
人類の未来を視野に入れ、
生命の歩みを持続させよう。

千年という単位で流れる森の時間で捉え、
森との共生を目指して自然環境と向き合う。
無秩序に様々なものを加えるのではなく
引き算のデザインで森の本質を導きだす。
忘れかけていた自然に寄り添う心に
安らぎと生命の記憶がよみがえる。

好評発売中

A4判・256ページ（オールカラー）
英文併記
定価：本体 **3,800**円＋税
ISBN978-4-86358-653-6

発行：株式会社建築資料研究社

〒171-0014
東京都豊島区池袋 2-10-7 ビルディング K 6F
TEL:03-3986-3239　FAX:03-3987-3256
https://www.kskpub.com/

特別記事

「House in Los Vilos」 写真＝西沢立衛建築設計事務所

シリーズ

「紀寺の家」 写真＝藤岡建築研究室

連載

講演会レポート

発行所
建築資料研究社 発行人：馬場栄一
［出版部］〒171-0014 東京都豊島区池袋2-10-7 ビルディングK 6F
URL https://www.kskpub.com
E-mail publicat@to.ksknet.co.jp

販売担当（バックナンバーの購入、定期購読に関する問合せ）
松本智典＋船越寛＋毒島雅代＋豊島陽平＋平野裕美
TEL (03) 3986-3239 FAX (03) 3987-3256

広告担当（広告、資料請求に関する問合せ）
北原孝一＋吉田裕香＋坂梨達哉
TEL (03) 3986-3230 FAX (03) 5992-5259

編集所
建築思潮研究所 代表：小泉淳子
〒130-0026 東京都墨田区両国 4-32-16 両国プラザ 1004
TEL (03) 3632-3236 FAX (03) 3635-0045

相談役 平良敬一
スタッフ 小泉淳子 戸谷知里
編集協力 伏見唯 帳章子

印刷・製本 シナノ印刷株式会社
表紙・住宅建築ロゴデザイン 三浦かなえ
本文デザイン 株式会社マップス

表紙 「秋田の町屋」 写真＝垂見孔士
背表紙 「村上の家」 写真＝垂見孔士

特集

田中敏溥の仕事

コミュニティを育む家づくり

「小さな町」……ある日の夢

田中敏溥（文・スケッチ）

昔からの友人で、地方の小さな工務店の社長をしているMさんから電話があった。「小さな町」の一期工事分が完成したので見てほしいというお誘いであった。計画時から相談を受けて、何回か現地を訪ねて概要は知っていたが、気持ちが少し高揚した。

春の初めの日曜日、訪ねることになった。駅に出迎えてくれたMさんの車ですぐに町に向かった。

「小さな町」は5年で30家族の町づくり計画である。今日は一期工事分、6家族の家の完成祝いも兼ねている。1軒はMさんがモデルハウスとして使い、5軒はすでに引っ越しも終わり、生活をしているという。

私が早く見たいと楽しみにしていたのが、太陽光で発電する屋根である。Mさんの仲間の工務店5社と大学の研究室が共同開発した屋根材で、まだ試作段階なのだが、3年後には市場に出るという。町に近づくにつれ建ち並ぶ屋根が見えてきた。「おー、屋根いいですね」。発電していない部分の屋根材と、色、質感が一体に見え、テカリもない。軒先もシャープに見える。大成功だ。

各家には蓄電池が設置され、車はすべてEV車である。もちろん、この町には電柱は立っていない。見上げた空がすがすがしかった。

「小さい町」は、表通りから少し入ったところにある。道と各家のカーポートの工事はすべて完成していた。町の中程には、昔からその場所に立っていた高さ15ｍ以上もあるケヤキの木を、この町のシンボルツリーとして残している。秋の終わりの落葉の掃除はたいへんだが、子ども達のたまり場としては楽しい場所になると思う。

道は4ｍから6ｍの幅で変化しながら緩いカーブを描いて、また表通りに戻る。そのため個々の敷地は不整形で、広さは60坪から80坪とさまざまである。道は、通過交通がないこともあり、自主管理する私道として認めてもらったという。道の仕上げは石敷き。公共工事の改修などで搬出された石の再利用である。いろんな形や色が混ざっているが、自然な感じでいい。

道路両側の雨水側溝は、公園などで見かける豆砂利入りの洗い出し仕上げのプレキャスト板。それに続くカーポートとの段差はなく、道との一体感がある。床の仕上げは全部共通で、芝生を植え込んだ有孔ブロックの敷き込みである。これで夏のカーポート床への蓄熱量は半分になる。冬枯れから緑の芝生が顔を出しはじめ、車が置かれないところは庭のように見えた。

家々の道のそばには、他の庭木より大きめの木が竣工記念樹として植えられている。住む人に好きな木を選んでもらうのだという。ヤマモモのように常緑の木もあれば、ヤマボウシのように今ようやく新芽が出はじめた木もある。5年、10年とその家の歴史を刻みながら成長し、道に日影をつくる街路樹になる。その足元には、思い思いのイスが置かれ、誰でも一休みできる。

町には、生け垣はあるが、隣地境界や道路境界を示すフェンスや塀がない。そのことを聞くと、Mさんは「公園の中に家が建ち並んでいるように、この町をつくっていきたい」と目を輝かせて話した。

Mさんの会社には大学で環境学を学び、造園家を目指している若いスタッフがいる。この「小さな町」で「自由さ、大らかさが感じられる家をつくりたい」「個々の家が仲良く見える、掃除の行き届いた町並みをつくりだしたい」と思いを話してくれた。あったかい気持ちになった。

家は自分のものであるが、町のものでもあるという、昔は普通にあった意識が根付いていくことが大切なのだと思った。

夕方から「小さな町」に人が集まりだした。これから一期工事分の完成パーティーがあるというので、少しだけ参加させてもらうことにした。みんなで石敷きの道にテーブルとイスを並べ、地元の野菜と鶏肉の鍋パーティーだ。みんなMさんの家づくり町づくりに共感して、この町に住むことにした家族と、一緒に仕事をしている仲間達だ。楽しい時間を過ごせた。夕暮れになり、庭と玄関前と道の照明がついた。控えめで落ち着いた照明計画で、思わず「夜もロマンティックな町ですね」と言ってしまった。

長く居たい気持ちになったが、明日も仕事があるので先に帰ることにした。みなさんと挨拶を交わし、駅まで送ってもらった。

「小さな町」の季節の移り変わりを見たいと思った。また、秋に来よう。

Mさんと初めて会ったのは、15年ほど前、ある環境問題の会合の後、これからの家づくりについて、酒を酌み交わしながら熱く語ったことがある。最後は「自分だけでなくみんなのことを考えながら、一軒だけでなく町並みのことも考えながら、今日だけでなく未来のことも考えながら、家のことを考えていこう」と締めくくった。

今、Mさんはこの「小さな町」づくりで、その夢を実現しようと仲間と一緒に闘っている。

私も一つひとつ、人と町と地球にやさしい家づくりを通して、爽やかで穏やかな繋がりが感じられる町をつくってゆきたいと思う。

困難はある。

「だが、夢は見続けよう！」

たなか・としひろ／建築家

北窓から四季折々の眺めを楽しむ

村上の家

新潟県村上市
設計＝田中敏溥建築設計事務所
施工＝加藤組
写真＝垂見孔士

6～7頁写真／庭から食卓越しに、北に広く開けた窓を見る。田んぼの中に浮かぶ緑の浮島
上写真／食卓から南の庭を見る
下写真／東の農道からアプローチを見る
左頁写真／アプローチから主屋を見る

10～11頁写真／母親の家から主屋を見る
右頁写真／居間から客間を見る
上写真／客間から庭を見る
下写真／障子を閉めた居間と客間を見る

北に開けた窓

北に大きく広がる田んぼの中に建つ北国の家。母親と息子家族3人が住む2世帯住宅である。

冬の北西から吹き付ける風は強い。下から吹き上げる日もある。それを防御する形で、主屋と独立した生活もできる母親の家を北と西を背にL型に配置した。また、南の道路側には、ゲートを兼ねた車寄せをつくり、三方向を囲んだ庭をつくった。アプローチのある東の境界は農道が通る。

主屋の周りの景色が漠として大きいことから、それに対応した形で、大きな片流れの屋根を南に降ろした。

冬の季節は厳しいが、春から秋にかけて北側の風景は刻々と変化する。冬枯れから、水が張られた水田。田植え後の若い緑。濃い緑の夏の稲の葉。そして日々色を変えていく黄金色の稲穂。おだやかな日の冬景色も美しい。家の中から、移りゆく季節を感じられるようにしたいと思った。そこで、食卓前に北に開く大きな窓を、窓枠を見せないように設えた。

設計の仕事で大事なことは、その場所に変わらないよいところがあればそれをより引き立てようと考え、よくない条件は目立たないように努めることだと思っている。

田中敏溥

右写真／2階子供室から居間を見下ろす
上写真／2階作業コーナーから寝室方向を見る
下写真／居間の薪ストーブ

断面図　スケッチ＝田中敏溥

1階平面図　1/200

上写真／ゲートから主屋を見る
左頁写真／東から見る蒼い稲穂越しの夕景

2階平面図

矩計詳細図　1/40

資 料

●建物名—村上の家
所在———新潟県村上市
家族構成—夫婦＋子供1人＋夫の母
●設計——田中敏溥建築設計事務所
（田中敏溥、内田洋）
構造設計—H&A構造研究所（浜宇津正）
●施工——加藤組
現場監督／津野清
棟梁／渡邉勇一
竣工———2010年12月
構造規模—木造2階建
●面積
敷地面積—749.89㎡
建築面積—187.81㎡
延床面積—181.93㎡
（1階／134.73㎡　2階／47.20㎡
車寄せ／33.12㎡）
建蔽率——25.04％
容積率——24.48％

地域地区—区域区分非設定地域、法22条地域
●主な外部仕上げ
屋根———ガルバリウム鋼板葺き
壁———左官掻き落とし仕上（白洲そとん壁）
建具———アルミサッシ　玄関／木製建具
●主な内部仕上げ
天井———プラスターボード＋紙クロス貼り下地の上、石灰薄塗り仕上げ　浴室／ヒノキ縁甲板厚15㎜張り
壁———プラスターボード＋紙クロス貼り下地の上、石灰薄塗り仕上げ　浴室／ヒノキ縁甲板厚15㎜張り
床———杉フローリング厚15㎜　浴室／十和田石貼り　玄関／大磯洗い出し仕上げ　客間／本畳敷き
●設備
冷暖房——薪ストーブ、ヒートポンプ式AC

配置図

深い軒下とテラス

テラス
居間
食堂
作業コーナー
矩計図 1/40

道路側に連なる薪棚が
緩やかに境界をつくる

北国分の家

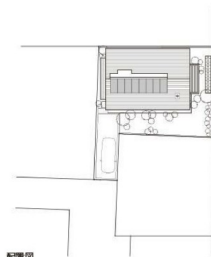
千葉県市川市
設計＝田中敏溥建築設計事務所
施工＝田中工務店
写真＝垂見孔士

右頁写真／東道路から薪棚を見る
上写真／玄関土間。山の道具の手入れ作業場
左写真／玄関ポーチ
22頁～ 23頁写真／東にバルコニーと南には大きな窓を設えた開放的な居間と階段室を見る

上写真／階段室から居間を見る
下写真／食堂からバルコニーを見る

上写真／居間、食堂から和室方向を見る
下写真／居間の低い南の窓

上写真／道路側からの夕景
左頁写真／食堂を見る。食卓の椅子は小田原健さんのデザイン

配置図

断面図　スケッチ＝田中敏溥

境界塀の薪棚

開発分譲地の南から入る旗竿地の敷地。計画時は南と西隣りは建設中であり、北側は、今は畑ではあるがいずれ開発が予想された。東側は道路に接し、その向こうには畑が広がっていた。

この敷地条件から、生活の中心を2階に設けた。当分の間東の畑は開発されないという判断で、視界の広がる東に向いた生活を考えた。

この家では台所、食卓、居間のソファーの位置設定が大切であった。とくに、調理できるストーブと大きなテレビの配置に時間を要した。プランづくりでは重要であり難しい課題である。

また、食卓の椅子選びも大切なことの一つである。お二人が選んでいたのは、私が学生の時、椅子の設計課題で製作指導を受けた小田原健さんの椅子であった。大変うれしい気持ちになった。

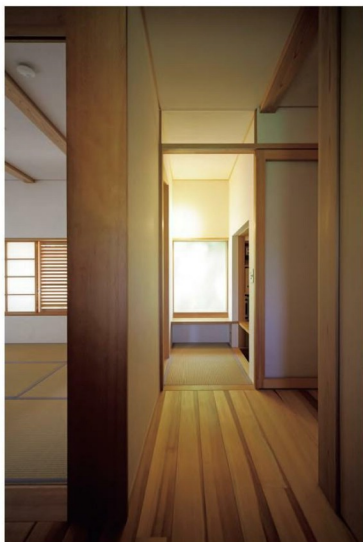
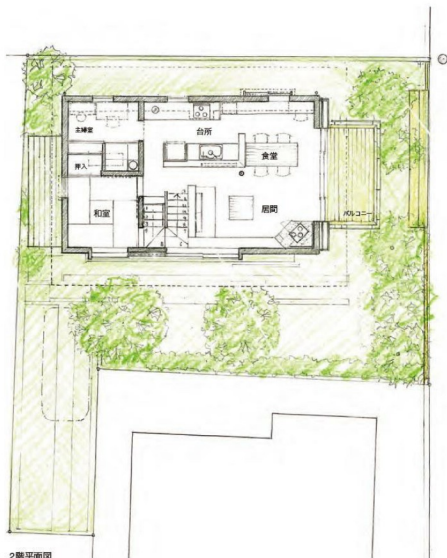
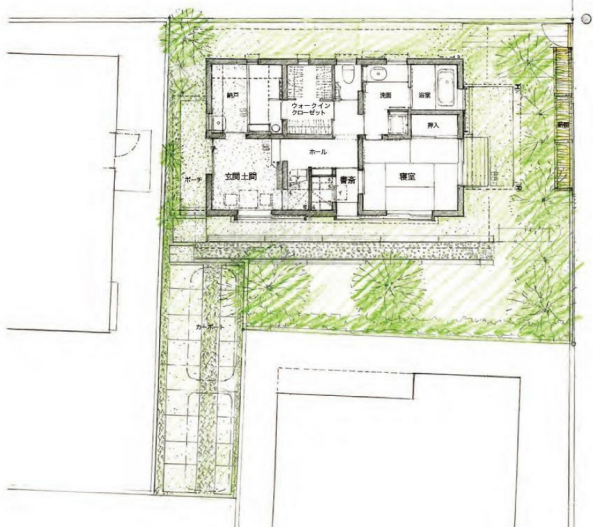
ご夫婦とも山とスキーが大好きである。山道具とスキーの手入れをする場を兼ねている広い玄関土間と用具置き場がほしいと要望があった。それだけが理由ではないが、書斎は階段下を立体的に有効利用してつくり出した。

この家では暖房だけでなく料理にもストーブを使う。東側の道路との境界塀を兼ねる薪棚は、住み手がコツコツとつくり上げた。この内外から出し入れできる薪棚は、家と町とのあたたかい関係をつくり出してくれた。そこに住む人の人柄を感じるとても大事な薪棚である。

境界の設えは、家の設計ではもっとも大切なことの一つである。

田中敏溥

上写真／2階和室
下写真／1階寝室

上写真／ホールから玄関土間を見る
右下写真／ホールから書斎を通して南庭を見る
左下写真／階段下を利用した座式の書斎

東側バルコニー

2階平面図

1階平面図　1/150

上写真／バルコニー下。植栽と薪棚が寝室と浴室の目隠しとなっているが、緩やかに繋がり通りの雰囲気は感じられる
下写真／台所から食堂方向を見る。間仕切りを低くして台所・食堂・居間を緩やかに繋げている

910

1200
軒の出

135
45
120×180
446
タルキック
2-N90
45
40
N90 @150

玄関屋根
カラーガルバリウム鋼板 厚0.4（銀黒） 平葺
＋透湿防水シート
＋構造用杉パネル 厚30
＋垂木：120×120 @910

内部
壁：プラスターボード 厚12.5下地の上、和紙貼り
天井：ケイカル板 厚6仕上

L型金物で固定
（「へ」相当品）

面戸板：厚60（杉）
10
3.5
垂木先端
66
120
広小舞：30×60（檜）
軒裏：野地板アラワシ
30
55
20

外壁
杉板 18×180〜210（押縁 杉18×36）
＋通気層 厚18
＋透湿防水シート
＋ダイライトMS12

垂木水平にカット
鼻隠し：30×75（檜）
30 30 30

玄関軒先詳細図 1/12

玄関土間。ポーチ下屋の張り出しのための垂木が見える

浴室

主婦室

資料

●建物名―北国分の家
所在――千葉県市川市
家族構成―夫婦＋子供1人
●設計――田中敏溥建築設計事務所
（田中敏溥、木下治仁）
構造設計―H&A構造研究所（浜宇津正）
●施工――田中工務店
現場監督／眞壁誠
大工棟梁／竹平恵次
造園／高田造園設計事務所（高田宏臣）
椅子／ベル研究所（小田原健）
竣工――2014年6月
構造規模―木造2階建、長期優良住宅
●面積
敷地面積―188.82㎡
建築面積―56.53㎡
延床面積―99.36㎡
（1階／49.68㎡　2階／49.68㎡）
建蔽率――23.64%
容積率――41.56%
●主な外部仕上げ
屋根――ガルバリウム鋼板葺き
壁――杉板厚18㎜の上、押縁押え
建具――アルミサッシ　玄関／木製建具
●主な内部仕上げ
天井――1階／ケイカル板厚6㎜張り放し仕上げ　2階／プラスターボード厚9.5㎜張り放し仕上げの上、竿縁　浴室／サワラ縁甲板厚15㎜張り
壁――プラスターボード下地、和紙貼り仕上げ　浴室／サワラ縁甲板厚15㎜張り
床――赤松フローリング厚15㎜　寝室・和室／本畳敷き　玄関／豆砂利洗い出し仕上げ
●設備
冷暖房――OMソーラーシステム、薪ストーブ、ヒートポンプ式AC
給湯――ガス給湯器

屋根（南側・集熱面）／
ＯＭ集熱パネル（ＯＭ部材）
カラーガルバリウム鋼板 厚0.4（銀黒）浮かし平葺
屋根（北側・南側妻側）／
カラーガルバリウム鋼板 厚0.4（銀黒）浮かし平葺
＋通気垂木：30×40
＋透湿・防水シート
＋野地板：構造用合板 厚12（軒裏部分は杉相决り板（化粧）厚12）
＋垂木：杉 45×120@455
天井断熱材：セルロースファイバー 厚120
屋根断熱材：グラスウール10K 厚100
天井：プラスターボード 厚9.5貼り放し仕上げ
面戸板：杉 厚45mm
内部ケイカル板 厚12
軒裏：野地板現し
外壁見切：杉 厚30
通気口：SUSパンチングメタル
水平にカット
鼻隠し：檜 30×90（塗装）
軒樋：タニタハウジングウェア／スタンダード
ガルバリウム鋼樋半丸105φ（シルバー）
上吊り金物使用
外壁／
・杉板 18×180〜210（押縁 杉18×36）
＋通気層 厚18
＋透湿・防水シート（壁）
＋ダイライトMS12
＋断熱材（壁）：アクリアネクスト 厚105
壁：P.B 厚12.5下地、和紙貼り
居間
床：赤松フローリング 厚15
構造用合板 厚28
梁：120×180@910
天井：檜縁甲板 厚15
天井：ケイカル板 厚5仕上
小庇／
・カラーガルバリウム鋼板 厚0.35
＋透湿・防水シート
＋杉板 厚30
付枠／
・アルミサッシ廻り（四方）／杉 厚30
下枠（水切）はカラーガルバリウム鋼板巻き
壁：檜縁甲板 厚15
（下地：防水シート）
脱衣・洗面
床：赤松フローリング 厚15
（下地：防水シート）
構造用合板 厚28
壁：P.B 厚12.5下地、和紙貼り
寝室
床：畳 厚30
構造用合板 厚12
根太：杉 45×60@303
土台廻り／
水切：カラーガルバリウム鋼板 厚0.35加工
基礎：打ち放しのまま
断熱材：
カネライトフォームスーパーEX 厚45
大引：杉 105×105
鋼製束
土台：檜 120×120
防湿シート
三和土
砂利
▽最高高さ（GL+6480）
▽棟木天（GL+6175.5）
▽軒天（GL+5220）
▽2FL（GL+3063）
▽胴差天（GL+2920）
▽1FL（GL+563）
▽土台天
▽基礎天
▽設計GL
▽基礎下
2730
2730
矩計図 1/40

瀬戸内海の風を感じる住まい

岡山の家

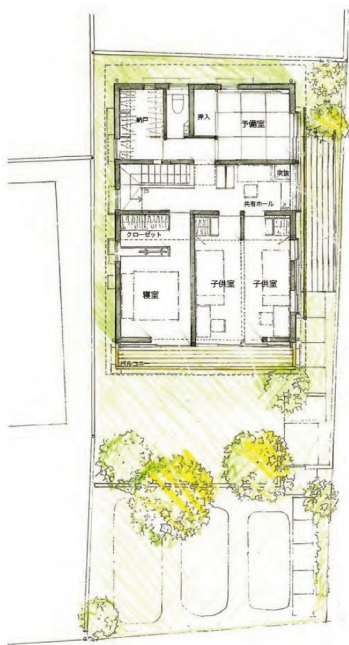
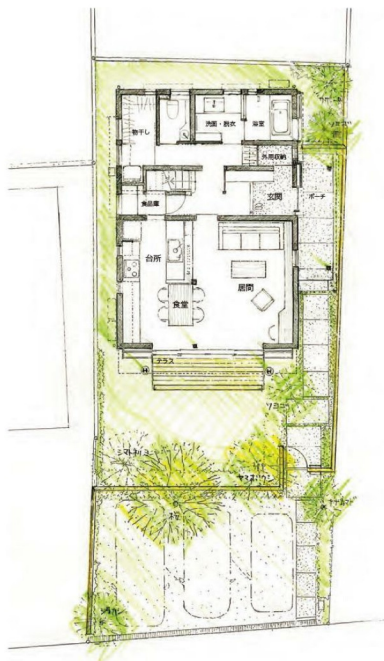
岡山県岡山市
設計＝田中敏溥建築設計事務所
施工＝福富建設
写真＝垂見孔士

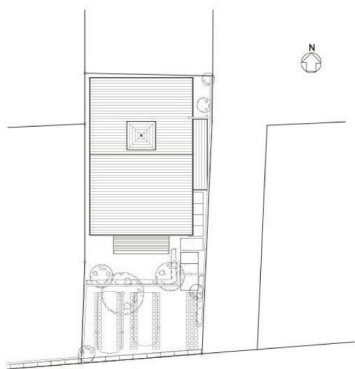
右頁写真／門から南面を見る
上写真／車寄せから見た、低い仕切り塀で通りに開く南側外観
右下写真／玄関
左下写真／玄関ポーチ

右頁写真／テラスから門方向を見る
上写真／居間から大きく通りに向けて開いた開口部からテラス、庭を見る
下写真／居間の障子を閉めた状態

居間

居間から食堂、台所を見る

2階の予備室

2階平面図

1階平面図　1/150

浴室

配置図

風の塔のある家

車の通りが多い南側道路に面した敷地。子どもが幼かったこともあり、道路への飛び出しを防ぐための「仕切り」を要望された。そのため車3台分の車寄せを除いた庭は、木の塀で囲い、また閉鎖的にならないよう塀を低くつくることでこの要望に応えた。

さらに、境界塀を門扉と連続させ、家と敷地全体との一体感をつくり、庭木も含めその場所に落ち着きを与えられるように心がけた。家と外構と庭木がそれとなく気配りされていると、町と仲良く見えると思っている。

瀬戸内海の地域は、日中風が凪ぐことが多く夏場は蒸し暑い。そこで猛暑の時を除き、春から秋には家の中に風の流れをつくりたいと考え、北側屋根上部に風が通り抜ける高窓「風の塔」を控えめに設けた。開閉は手動である。1年の半分以上ある冷暖房のいらないこの季節に、風が通る家は気持ちがいい。

今、家づくりでは、脱炭素社会に向け、一次エネルギー消費量の収支をゼロにする住宅を早急に実現させなければならない時代である。その時、決められた数値だけクリアすればよいという考えに陥らないように注意が必要である。

日本にはまだ四季がある。大切なことは、その地域の気候風土条件、その場所の特別な立地条件を知り、それらを暮らしの快適さに反映させる努力を忘れないようにすることだと思う。

田中敏溥

断面図　スケッチ＝田中敏溥

台所から食堂を見る。障子を閉めると落ち着いた空間になる

破風：60×50（檜）

壁見切：ガルバリウム折曲げ

子供室

○小庇／
・カラーガルバリウム鋼板 厚0.35
＋透湿防水シート
＋構造用トラパネ 厚30（片面化粧）

○付枠／
・アルミサッシ廻り（三方）/杉 厚30
下枠（水切）はカラーガルバリウム鋼板 厚0.35巻き

40×210（檜）
ブラケット：SUS厚3mm

○屋根
カラーガルバリウム鋼板 厚0.4平葺き（雪留め：なし）
＋透湿防水シート
＋構造用トラパネ（片面化粧）：厚30
＋登り梁：120×120（松）@910

軒の出：350
軒裏：構造用トラパネ片面化粧
広小舞：30×35（檜）
SUS製作樋

玄関

上り框：欅木

○玄関床仕上：
大磯（2〜3分）洗い出し仕上

柱脚金物：カネシン／
ステンレス装飾柱受 SH-90角

幅木：檜

気密パッキン
断熱材：積水化学
／フェノバボード

断熱材：厚35

板塀／18×120（杉）
支柱：アルミ角パイプ50角@1800
コンクリート基礎：150×150×450
笠木：ガルバリウム巻き

矩計詳細図　1/50

天袋

見切り：30×30

子供室

風の塔　詳細図　1/50

右頁
上写真／風の塔。オペレーターを引いて窓を開閉する
右下写真／東立面。屋根の上に風の塔が見えている
（写真＝田中敏溥建築設計事務所）
左下写真／アプローチから居間を見る

上写真／2階子供室
左写真／2階共有ホール。右手に子供室の入口と天井に風の塔の下部が見える

居間から食卓方向を見る

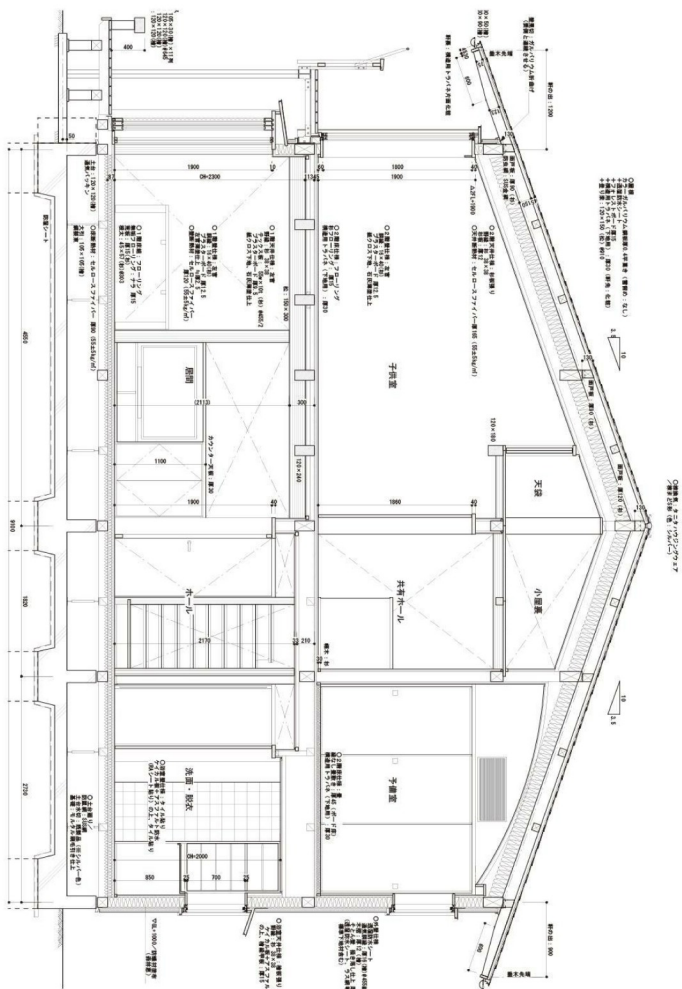
道路側外観

洗面室

資料

●建物名—岡山の家
所在———岡山県岡山市
家族構成—夫婦+子供2人
●設計——田中敏溥建築設計事務所
(田中敏溥、木下治仁)
構造設計—H&A構造研究所(浜宇津正)
●施工——福富建設
現場監督/松本拓也
大工棟梁/岩本健太
竣工———2015年9月
構造規模—木造2階建
●面積
敷地面積—184.27㎡
建築面積—67.43㎡
延床面積—115.92㎡
(1階/57.96㎡　2階/57.96㎡)
建蔽率——36.60%
容積率——62.91%
地域地区—第一種中高層住居専用地域、法22条地域

●主な外部仕上げ
屋根———ガルバリウム鋼板葺き
壁————左官掻き落とし仕上(白洲そとん壁)
建具———アルミサッシ　玄関/木製建具
●主な内部仕上げ
天井———1階/プラスターボード+紙クロス貼り下地の上、石灰薄塗り仕上げ　2階/杉板厚12㎜張り　浴室/ヒノキ縁甲板厚15㎜張り
壁————プラスターボード+紙クロス貼り下地の上、石灰薄塗り仕上げ　浴室/タイル貼り
床————1階/ナラフローリング厚15㎜
2階/杉フローリング厚15㎜　玄関/大磯洗い出し仕上げ
●設備
冷暖房——ヒートポンプ式AC
給湯———ガス給湯器

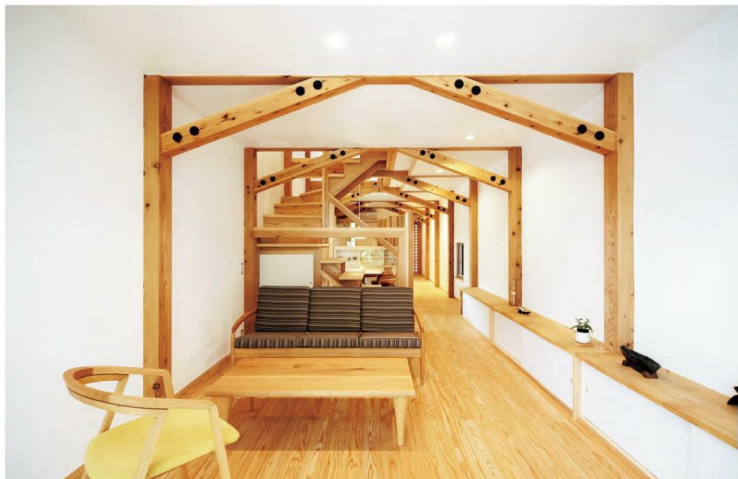
矩計図 1/50

自由度の高い木造のトンネル

秋田の町屋

秋田県秋田市
設計＝田中敏溥建築設計事務所
施工＝村上商店　写真＝垂見孔士

右頁写真／道路側正面
上写真／店。1間ピッチに並ぶ柱、梁、方杖

上写真／玄関と中庭
下写真／台所から居間方向を見る

右上写真／ホールから細長い玄関を見る
左上写真／居間（手前）と食堂の間に配置された階段
下写真／居間から食堂方向を見る

2階階段室。ホールから子供室方向を見る

町屋造りの家

秀吉によって行われた京都の間口の狭い短冊形の町割りは、狭い敷地を無駄なく使うために、隣り合う壁を接してつくる町屋造りを生み出した。それは地方の城下町まで伝わった。この計画地も、江戸時代の古図の中に、現在とそのまま同じ形で描かれていて驚いた。また、同じ町の絵図には、妻入りの町屋が軒を接して建ち並ぶ様子が描かれていて、人が暮らす町の活気を感じた。残念なことに、秩序なく勝手につくられていく現在の町に、江戸の面影はない。

敷地は間口4m奥行き42m。前面に計画道路が通り3・5m後退の線引きがある。この細く長い敷地に「今の時代に通用する家を提案してほしい」という要望があった。

計画は、構造家の浜宇津正さんと一緒に進めた。プランづくりの自由度を高め、将来の変更にも対応力をもたせるために、短手方向の構造壁の無い2段重ねのトンネル状の構造を考えた。家の中ほどに光を入れ風を抜くための中庭を設けた、3・3m×28m、2階建のプランとなった。現在の生活スタイルに合った家にできるかどうか興味深い挑戦になったが、町屋造りの家として、一つの形を提案できたのではと思っている。

完成後、南側の敷地が売りに出され、購入することになり、今その利用法を検討中とのことである。できれば新しい町屋造りの家が並ぶことを願っている。

田中敏溥

北立面図　　スケッチ＝田中敏溥

南庭に面した居間

上写真／2階の畳の間
左写真／2階の洗面室
下写真／南庭から見る外観
左頁写真／2階から食堂を見下ろす

資料

●建物名─秋田の町屋
所在───秋田県秋田市
家族構成─夫婦＋子供2人
●設計──田中敏溥建築設計事務所
（田中敏溥、木下治仁、久保敦史）
構造設計─H&A構造研究所（浜宇津正）
●施工──村上商店
現場監督／村上直樹
大工棟梁／小松良幸
竣工───2014年11月
構造規模─木造2階建
●面積
敷地面積─176.80㎡
建築面積─94.34㎡
延床面積─176.56㎡
（1階／89.42㎡　2階／87.14㎡）
建蔽率──53.36%
容積率──99.87%
地域地区─商業地域、準防火地域
●主な外部仕上げ
屋根───ガルバリウム鋼板葺き
壁────左官掻き落とし仕上（白洲そとん壁）
建具───アルミサッシ　玄関／木製建具
●主な内部仕上げ
天井───プラスターボード下地、紙クロス貼り仕上げ　畳の間／杉板張り
浴室／ヒノキ縁甲板厚15㎜張り
店／プラスターボード下地、漆喰塗り仕上げ
壁────プラスターボード下地、漆喰塗り仕上げ　浴室／ヒノキ縁甲板厚15㎜張り
床────杉フローリング厚15㎜　畳の間／本畳敷き　店・玄関／大磯洗い出し仕上げ
●設備
冷暖房──ヒートポンプ式土間蓄熱暖房、ヒートポンプ式AC
給湯───ヒートポンプ式給湯器
その他──太陽光発電

1階平面図　1/160

店
玄関
ホール
主婦コーナー
台所
食堂
居間
テラス
庭
3.5M
42.35
42.17

2階平面図

子供室
子供室
畳の間
物干し
収納
収納
PCコーナー
収納
収納
浴室
脱衣
洗面
吹抜
ウォークインクローゼット
寝室

配置図

空き家になり、買い求めた西の隣地から見る外観

屋根／
・カラーガルバリウム鋼板 厚0.4平葺
＋透湿防水シート
＋フォレストボード 厚15
＋野地板 厚12
＋垂木：45×120@455
（通気層 厚30確保／MAG：通気くん等）
＋断熱材（天井）：セルロースファイバー 厚185
▽高さ（GL+6180）
▽棟木天（GL+5989）
▽軒天（GL+5520）
棟換気
イーヴスベンツ
軒先：板金巻き
外壁見切：板金加工
天井：プラスターボード 厚9.5の上、紙クロス貼り
寝室
壁：プラスターボード 厚12.5の上、漆喰塗り
床：杉フローリング 厚15
構造用合板 厚24
▽2FL（GL+3034）
外壁／
・スーパーシラスそとん壁 厚20
＋木摺 厚12
＋通気層 厚18
＋透湿・防水シート（壁）
＋断熱材（壁）：パーフェクトバリア
／スタンダード13K耳付き 厚100
居間
土台廻り／
水切：カラーガルバリウム鋼板厚0.35加工
気密パッキン
断熱：スタイロフォームAT（3種b） 厚50
仕上：スタイロフォーム直塗り仕上げ材
▽1FL（GL+479）
土台：檜120×120
大引：檜 105×105@910
▽設計GL
▽基礎下
基礎／
耐圧版 厚200（蓄熱蓄熱層）
＋断熱：スタイロエース（3種b） 厚50
＋防湿フィルム
＋捨コンクリート 厚50
＋砕石 厚120
柱長：5310
浴室
寝室
▽浴室FL
主婦コーナー
天板：セン 厚30
居間
テラス
屋根／
・カラーガルバリウム鋼板 厚0.4平葺
＋透湿防水シート
＋構造用ラバネ厚30
＋垂木：120×120@900
桁／SP-139.8φ×4.5
鉄部塗装：関西ペイント
／フェロドール
柱：H-100×100×6×8
鼻隠し：30×75
ベンチ：檜 240×30
床／檜：120×30
大引／檜：120×120@910
土台／檜：120×120
ガルバリウム巻

矩計矩計図 1/45

傾斜地に建つ借景を楽しむ住まい

鎌倉山の家

神奈川県鎌倉市
設計＝田中敏溥建築設計事務所
施工＝安池建設工業
写真＝垂見孔士

右頁写真／道路から玄関ポーチを見る
上写真／玄関
右下写真／玄関ホール
左下写真／玄関からホールを見る

道路下3mの敷地

鎌倉山の山頂近くの傾斜地に建つ、親子3人とご夫婦の両母親が暮らす画家の家である。

道路から3m下に平地がある。当然2階が玄関の家になる。この高さは、一般の住宅と比べると少し高いのだが、アトリエの天井を高くしてほしいという要望に応えるには都合の良い寸法であった。道路面の高さで車2台分の駐車スペースを鉄骨とコンクリートでつくり、家とは構造的に切り離した。

家のプランは、1階に寝室と子ども室、そこから3段下がって天井の高いアトリエ。玄関のある2階には母親の部屋と水廻り、それにキッチンと、この家の中心である家族室を配した。

建築主が惚れ込んで買い求めた敷地の南から西にかけて広がる展望は格別である。夏は木々の葉で隠れるのだが、葉が落ちた冬場は海も遠望できる。

以前、一緒に仕事をしたことのある庭師さんが、隣の家の庭木や遠くに見える大木を「ご馳走」だと言って、ご自分の造園計画に組み入れていた。昔の借景の考えである。それ以来私もその言葉を使うようになった。

この家の眺望を最大の「ご馳走」と考え、家族室に取り込むために、西南の角を大きく開くことにした。

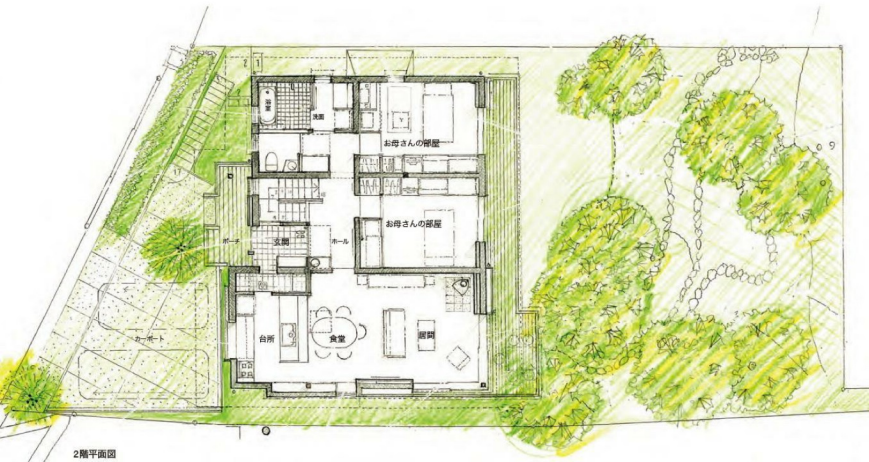
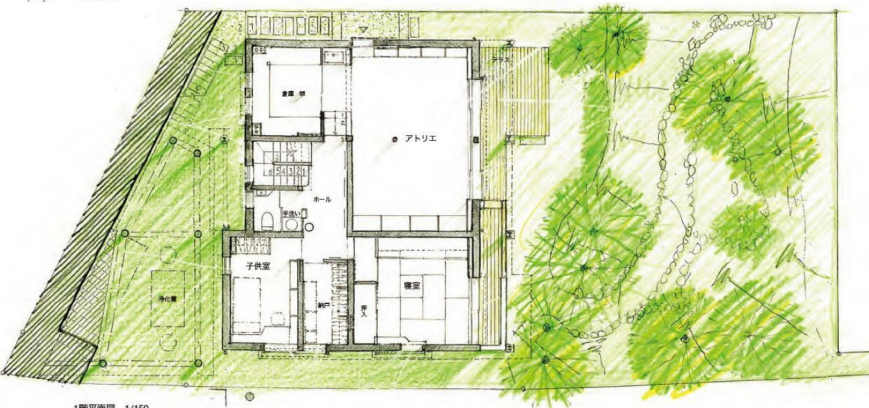
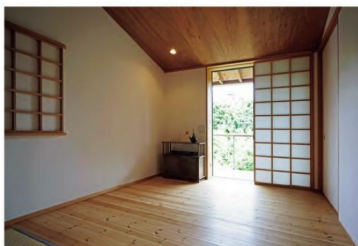
田中敏溥

58頁〜59頁写真／テラスからの西の展望
右頁上写真／居間
右頁下写真／台所から食堂、居間を見る
上写真／居間の障子を閉めた状態
左写真／居間から食堂、台所を見る

右頁写真／アトリエの開口部を見る
上写真／アトリエ　下写真／1階寝室

浴室
洗面
お母さんの部屋
お母さんの部屋
ポーチ
玄関
ホール
カーポート
台所
食堂
居間

2階平面図

テラス
倉庫
アトリエ
ホール
手洗い
子供室
浄化槽
納戸
押入
寝室

1階平面図　1/150

お母さんの部屋

お母さんの部屋

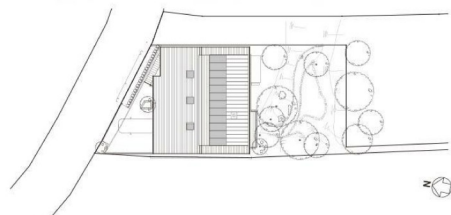
南側外観

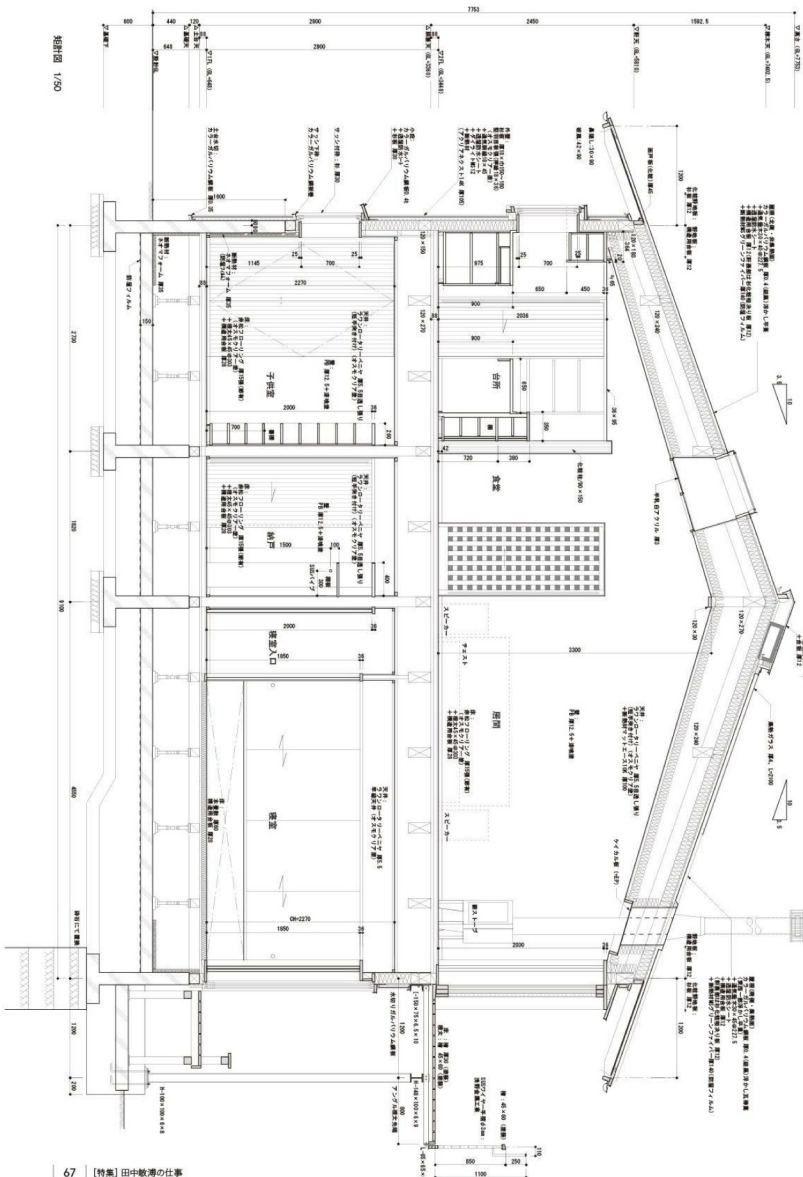
断面図　スケッチ＝田中敏溥

南立面図　スケッチ＝田中敏溥

配置図

資料

●建物名―鎌倉山の家
所在―――神奈川県鎌倉市
家族構成―夫婦＋子供1人＋妻の母＋夫の母
●設計――田中敏溥建築設計事務所
（田中敏溥、木下治仁）
構造設計―H&A構造研究所（浜宇津正）
●施工――安池建設工業
現場監督／岩田健一
大工棟梁／井上元一
竣工―――2013年11月
構造規模―木造2階建、長期優良住宅
●面積
敷地面積―377.86㎡
建築面積―116.64㎡
延床面積―186.32㎡
（1階／93.16㎡　2階／93.16㎡）
建蔽率――30.87%
容積率――54.88%
地域地区―風致地区、市街化調整区域、法22条地域
●主な外部仕上げ
屋根―――ガルバリウム鋼板葺き
壁――――杉板厚18㎜の上、押縁押え
建具―――アルミサッシ　玄関／木製建具
●主な内部仕上げ
天井―――ラワンベニヤ厚5.5㎜張り　浴室／ヒノキ縁甲板厚15㎜張り　アトリエ／プラスターボード下地、EP仕上げ
壁――――プラスターボード下地、漆喰塗り仕上げ　浴室／ヒノキ縁甲板厚15㎜張り　アトリエ／ラワンベニヤ厚5.5㎜＋ガラスクロス下地、EP仕上げ
床――――赤松フローリング厚15㎜　寝室／本畳敷き　浴室・玄関／タイル貼り
●設備
冷暖房――OMソーラーシステム、薪ストーブ、ヒートポンプ式AC
給湯―――太陽熱利用ヒートポンプ式給湯器

1階ホール

道路側全景。道路からは平屋のように見える

矩計図 1/50

特別記事

バワ建築の源泉を探る旅 その1 Barbara Annex

企画・監修＝木下光・和田彬代
写真＝DOMINIC SANSONI・78頁写真特記以外＆83頁写真＝SEBASTIAN POSINGIS

建築家と芸術家との協働が生まれる瞬間

木下光（関西大学）・和田彬代（安井建築設計事務所）

1．バルバラ・アネックスを巡る人々

インフィニティプールの創始者、あるいはトロピカルモダン・スリランカの風土とモダンの融合に成功した、今年生誕100年のスリランカを代表する建築家ジェフリー・バワ（Geoffrey Bawa・1919年～2003年、以下バワ）は知っていても、1959年から1967年まで8年間、バワの設計パートナーであったデンマーク人建築家ウルリック・プレスナー（Urlik Plesner・1930年～2016年、以下プレスナー）や芸術家バルバラ・サンソーニ（Barbara Sansoni・以下バルバラ）を、みなさんご存知だろうか？　プレスナーは著書『IN SITU』（2012年）で、バワと共に設計した最高の建築として、イナ・デ・シルバ邸（1960年～62年）、ポロンタラワバンガロー（1963年～65年）というバワ作品では必ず取り上げられる住宅に加え、バルバラ・アネックス（Barbara Annex・1960年～62年、以下アネックス）を挙げている。バワ研究者のデイビッド・ロブソン（David Robson）の著書『complete works』でもアネックスは触れられていない。プレスナーに設計が帰属した住宅であるが、プレスナーは『IN SITU』でバワと設計したと書いており、私たちもアネックスはバワとプレスナーが思想を共有し、協働して生まれた住宅と考えている。アネックスの建主はバルバラ、画家としてキャリアをスタートさせたが、バワの遠戚で、鮮やかな色合いの手織物や出版など、スリランカの文化発信の拠点であるBAREFOOTを1964年に創設したテキスタイルデザイナーである。BAREFOOTの誕生は、バワ、プレスナー、バルバラが協働したバンダラウェラの教会CHAPEL for the Good Shepherd Convent（1961年～62年、設計はプレスナーに帰属）に由来する。バルバラは教会の建主で親友であった女子修道院長（Mother Provincial）と共にスリランカの恵まれない女性のための手織産業BAREFOOTを興し、その製品であるリネンをバワ設計のホテルで使用した。

2．アネックスの背景
ウルリック・プレスナーと
バルバラ・サンソーニを中心とする
デザインサーベイ

バルバラとプレスナーは単なる建主と建築家の関係ではない。2人は、プレスナーがバワのパートナーとなる1959年、並行してスリランカの古建築調査の再評価をはじめる。このスリランカのデザインサーベイは、プレスナーとバルバラを中心として、バワ建築を支える建築家や芸術家であるラキ・セナナヤケ（Laki Senanayake）やイスメス・ラヒーン（Ismeth Laheem）と共に行った。デイビッド・ロブソンはバワの協

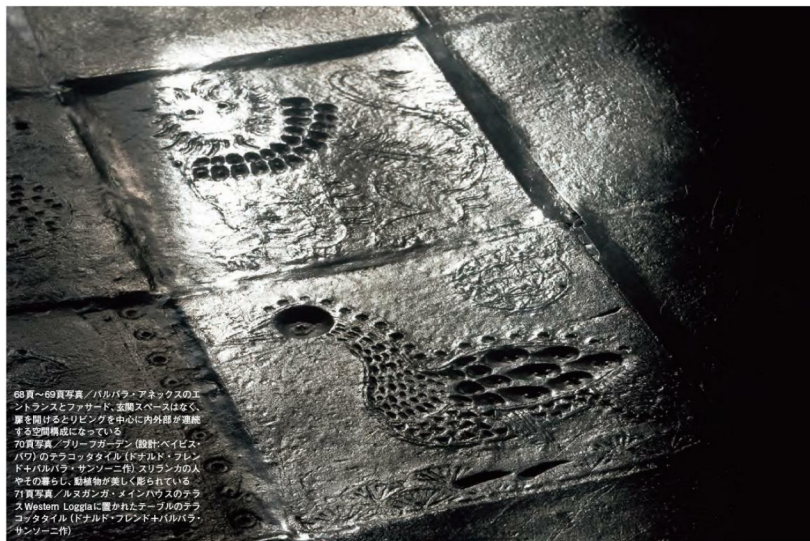
働者たちをチームバワという意味を込めてバワサークルと呼び、1959年からプレスナーやバルバラを中心とするバワサークルとともに、バワは「自身のスタイルを探す旅」がはじまったと私たちは考えている。

『IN SITU』でプレスナーは、「バワと私は完璧に建築観を共有していた」と回想する。デザインサーベイの契機について、プレスナーが「パデニヤ寺院の僧侶は、その建築の価値を見出すことなく建て替えたいといい、私たちは危機感をもって、ラキとイスメスとともにパデニヤ寺院に向かった。それ以来、毎週ジープに乗って、スリランカの様々な古建築を実測調査した。」と『IN SITU』で書き残している。プレスナーとバルバラはCeylon Daily Mirrorの新聞紙上で、基本毎週土曜日に文章をプレスナー、挿絵をバルバラが担当し、1961年10月14日から1963年1月5日まで2年間、Collecting old buildingsという企画で55本の記事を書いた。

ちなみに新聞でモノクロだったバルバラの挿絵には、その後BAREFOOTのテキスタイルと同じセイロンの色がバルバラのタッチで着彩されている。当初、バルバラの2人の息子の名前をとって、Simon & Claudeというペンネームで発表された。ちなみにClaudeこそ、本特集のアネックスの住まい手で写真を撮影したドミニク・サンソーニ(Dominic Sansoni)である。新聞記事は37事例を対象とし、ヴァナキュラー住宅、タウンハウスやワラウアと呼ばれる中庭をもつ邸宅など住宅建築が15件、仏教寺院、ヒンドゥー寺院、キリスト教会、モスクなど宗教建築が11件、公共建築やその他が11件であり、時代・立地・宗教・民族のスリランカの多様性を反映した構成になっている。この伝統的建築群から彼らは何を見たのだろうか?

プレスナーは『IN SITU』でスリランカの古建築から抽出したデザイン要素を挙げている。

1 住宅や寺院のこれまで評価されてこなかった中庭
2 周辺環境から密集市街地の住宅を守る窓のない高い境界壁
3 どんな村の大工でもつくることのできる涼しい日陰をつくる低い庇を持つ大きな勾配屋根とその技術
4 熱帯で楽しい空間をつくる広く深く開いたベランダと列柱廊(コロネード)
5 仏教寺院、ワラウア、古い邸宅でみられる建築内部への奥行きのある眺めとシークエンス
6 微風を取り入れ、プライバシーとセキュリティを与えるコロンボにある古いムーア人住宅の格子窓
7 歴史的建築から学ぶ多くの有用で美しいディテール
8 ジャフナ貿易商の古い住宅にあるような備え付けの寝台・座台と美しい家具
9 多くの寺院でみられる巨大な壁画やバティック

この9つの要素は、中庭や大きな瓦屋根、ベランダやコロネードなど空間構成だけでなく、格子窓(トレリス)に代表される蒸暑気候への工夫、つまり美しく機能的でかつ環境工学的なディテールや素材、それらをつくる職人、さらには家具や壁画、バティック(蠟纈染めの布)といったアートにも関心が及んでいる。プレスナーは、デンマークで習得したレンガ施工の技術をスリランカで教えていた。その高い技術、素材やディテールに関する豊富な知識を背景にして、設計と施工を分離することなく建築をとらえていたと思う。

68頁〜69頁写真/バルバラ・アネックスのエントランスとファサード、玄関スペースはなく、扉を開けるとリビングを中心に内外部が連続する空間構成になっている
70頁写真/ブリーフガーデン(設計:ベイビス・バワ)のテラコッタタイル(ドナルド・フレンド+バルバラ・サンソーニ作)スリランカの人やその暮らし、動植物が美しく彫られている
71頁写真/ルヌガンガ・メインハウスのテラスWestern Loggiaに置かれたテーブルのテラコッタタイル(ドナルド・フレンド+バルバラ・サンソーニ作)

3. アネックスの魅力

1 伝統建築アンバラマのメタファーとしての瓦屋根

デザインサーベイではなぜか取り上げていないが、プレスナーが『IN SITU』でも高く評価する伝統建築にアンバラマ（AMBALAM）がある。これは偶像崇拝以前の仏陀の化身として扱われるインド菩提樹の並木が道標となり、ちょうど食事をとる間隔である約1マイル～12マイル毎に置かれた巡礼者のためのベンチと屋根付きの休憩所・東屋、建具のない床と屋根だけの小さな公共建築である。

プレスナーは、Kataragamaへの巡礼の旅人とアンバラマの深い関係性や中世につくられたアンバラマが精緻な彫刻が施された放射状の垂木の美しい構造と傘のように四方に開く大きな瓦屋根をもつことを記述している。簡素な構造と彫刻をはじめとする装飾紋様は対照的だが、どちらも重要なデザイン要素だと言いたいのではないだろうか。

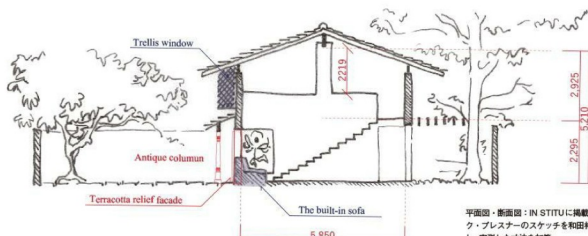
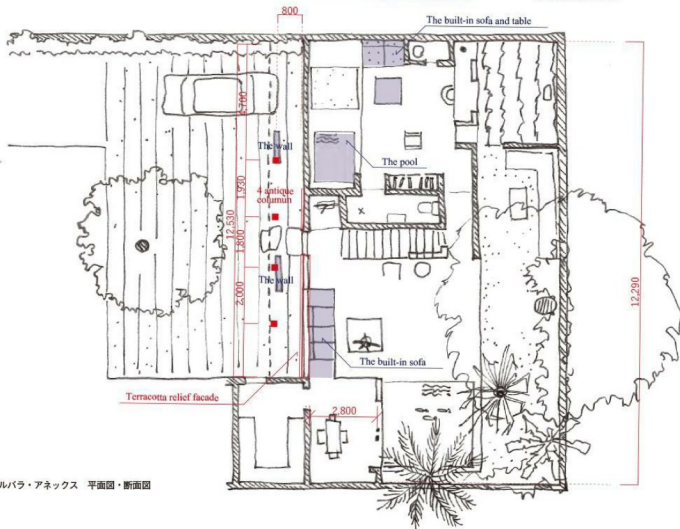
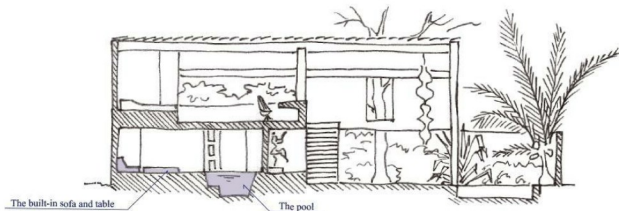
イスメス・ラヒーンは、自身が編集したプレスナー特集を掲載する『Domus 014 SRI LANKA』（2015年、Nov.15-Dec.15）の中で、「プレスナーのデザインは当時の常識、すなわちモニュメンタルとは対照的にシンプルで簡潔なデザインであった」と述べている。アネックスの屋根はアンバラマのメタファーとしてつくられている。アンバラマの軽快な屋根の浮遊感は、アネックスでも構造的に試行されていて、傘のように中心の柱で切妻屋根を支え、リビング側の妻壁では、T字の柱梁の上にレンガを積んで、中心の柱の位置に縦スリット開口をあえて設けることで、妻壁では屋根を支えていないという表現がとられている。

Karagahagedera Ambalama
聖地は巨石に宿るというが、スリランカも例外ではなく、宗教建築の多くは巨石群との関係が深い。このアンバラマも巨石の上に置かれ、柱と屋根による簡素だが美しい東屋である
写真＝木下光・和田彬代

バワとプレスナーが1960年チャンディガールを見て灼熱の中、庇のないコルビュジエの建築がインドの気候風土に合わないことに気づき「未来ではなく、過去を」（If that's the future,we'll stay with the past）という立ち位置をみつけ、それから、大きな屋根（big simple roof,It's all in the roof）という共通の設計理念を抱いた。大きな屋根の最初の設計がアヌラーダプラにつくられたシェルバンガロー（1960年～61年）である。アネックスは下地にコルゲート板を敷いて防水し、その上にシンハラ瓦（半丸瓦）を葺くというディテール（これ以降、スリランカで一般化している手法）であるが、これは1960年同時に設計が進んでいたムトゥクマラナ・ハウス（Muthukumarana House・1960年～62年）でバワとプレスナーが瓦とコルゲート板が同じカーブをもつことに気づき、結果的に最も早くできあがった屋根がアネックスである。

2 ミネット・デ・シルバ（Minnette de Silva、1918年～98年）との関連性

プレスナーは、バワのパートナーになる前、CIAMにおいて初めてアジア代表になるミネット・デ・シルバの設計を手伝っている。キャンディ郊外のエンベッカ寺院をプレスナーに紹介したのはミネットなので、バワサークルのデザインサーベイの契機はミネットと言えなくもない。ミネットの代表作にピエリス邸（Pieris House・

バルバラ・アネックスのリビング。妻壁では縦に柱と同サイズのスリットを採光窓として抜くことで、対となる内部空間の中心の柱を際立たせている。ソファー上のラキ・セナナヤケや階段横のライオネル・ウェント（Lionel Wendt、1940-1944）の写真に代表されるColombo ’43 Groupの絵が空間を引き立てている。ドミニク・サンソーニ夫妻はアネックスを愛し、そのコンセプトが色褪せぬように住み続けている

平面図・断面図：IN STITUに掲載されたウルリック・プレスナーのスケッチを和田彬代がトレースし、実測した寸法を加筆

バルバラ・アネックス　平面図・断面図

妻方向の断面図から、中心の柱が内部にある唯一の壁から立ち上がり、傘のように大きな屋根を支えるというアンバラマの開放性を踏襲したコンセプトが強く感じられる。壁の表には階段を配し、その裏にはコンパクトにうまく水廻りを集約し、隠している。

プレスナーは『IN SITU』においてアネックスの建設をアクションアーキテクチュアと表現している。屋根の葺き方、床材の張り方、構造のもたせ方、白塗りのレンガに代表されるローカルな素材の使い方などプレスナーの即興的な指示のもとでつくられたからだ。アンバラマのようなスリランカの村々がもつ建設技術で施工することもコンセプトに含まれている。現在のアネックスと図面を比べると、細部の設計にも即興性が伺える。現在のファサードではオランダ統治時代のアンティークの柱が平側の軒を支えるが、図面ではその記載はなく、2カ所の壁柱で支える構造としている。アネックスのシグニチャーともいえるテラコッタレリーフの壁面には図面では開口が設けられており、現在のファサードとは大きく異なる。これはおそらく建設に際してプレスナーやバルバラが即興的にデザインを変更したものと考えられ、現場に立ち会ったバワの意見も加わったかもしれない。建設当初にはあった格子窓やプール、造り付けの家具は一部取り払われている。

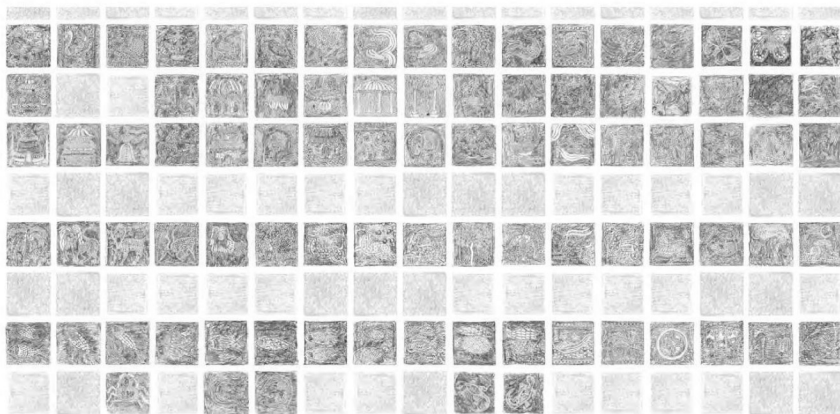
木下光・和田彬代

1952年〜56年）がコロンボに現存するが、バワより先にモダニズムとリージョナリズムの融合を図ろうとした建築と位置づけられる。プレスナーは、ピエリス邸をデンマークの気候風土による閉じた住宅と対比して緑に包まれた微風を感じる開かれた空気のような建築と評しているが、ピロティと螺旋階段による断面構成、石積みやラテライトの壁、瓦屋根など地域に根ざした素材やデザインボキャブラリーが白い躯体と対比的かつランダムに使われている。アネックスはこのようなミネットの試みを洗練させ、スリランカの気候風土に適した心地よさを技術的に実現しようとしたといえる。

3　最小限の建具をもつ平面・断面構成とデザインサーベイから得たデザインボキャブラリーの使用

アネックスは機能的で素材と構造が簡潔に表現されたシンプルな切妻屋根の下、建具の数は必要最小限まで減らすことのできる平面的にも断面的にもシンプルなワンルーム空間となっている。平入りの玄関ではオランダ統治時代の南インド様式と思われる古材の柱を再利用して庇を支え、矩形の平面の中央にはオープンな階段を設け、リビングの吹抜けと2階の部屋を断面的に連続する開放的な構成である。リビングには建具がなく、そのまま水盤と連続することで、高密度な敷地でありながら、玄関からの視線は対角線の奥へといざなわれる仕掛けになっている。魚を飼う水盤は蚊対策としてスリランカでは有用かつ重要なデザイン要素である。切妻の船底天井が高いリビングの横には、対照的に天井高を抑え込んだコンパクトなダイニングとキッチンが水盤と連続するように配置され、母屋のキッチンとスムーズにつながりをつくっている。2階の書斎、寝室には、ファサード側に格子窓を用い、その反対側には穴空きブロックでつくるブリーズソレイユがある。

平入りの平面構成、階段室を吹抜けに設けた大きなワンルームの断面構成、プライバシー保護と通風を兼ねたトレリスの多用という手法は、アネックスの連作で同じコロンボに立地する1964年竣工のHouse for Maurice and Malkanthie PereraとHouse for Ian and Gun Pieris、マウントラビニアに建つLeela Dias Bandaranayake House（1963年〜65年）でも使われている。プレスナーやバルバラがデザインサーベイから得た9つのデザイン要素が、アネックスには巧みに用いられていることが分かるだろう。

建具が最小限に減らされていることは、壁が少ない空間構成であることと同義で、アネックスは現代版アンバラマだともいえる。敷地の制約から奥行きのある広いコロネードをもったベランダはそのまま使わず、古材柱の列柱のある庇と建具のない半屋内のリビングとして翻訳できるとプレスナーは言いたいのだろう。そして、もう一つのボキャブラリーである歴史的な建築を彩る壁画やバティックに代わり、バルバラが製作したテラコッタレリーフが決定的なファサードになっている。アンバラマのようなシンプルな屋根の下に、細やかで多様なデザインボキャブラリーが用いられているが、これはバワとプレスナーが大きな屋根の次に行き着く価値観、「大きなものを単純化するなら、小さいものを複雑にしなければならない」（If you simplify the big things, you must complicate the little things）の具現化でもある。

上写真／木下光・和田彩代・栄玲央名によるバルバラ・アネックスのテラコッタレリーフの拓本（2018年9月）
左頁上写真／切妻屋根の下地であり、半丸の素焼瓦と同じ形状のコルゲート板が見える吹抜けのリビング。建具のない大きな開口部が2面にあることで、その開放感が素晴らしい。家具・調度品や絵画が主役のギャラリーのようである
左頁下写真／リビングと対照的に低く天井を抑えた水盤と連続する小さなダイニングルーム。スリランカでは水盤は防蚊の役割も有している。水盤奥の樹木（プランジパニ）・水面・建具のないダイニングルームが三位一体となって、柔らかい光が降り注ぐ水辺の木陰にいるような気持ちにさせられる。円形のダイニングテーブルで食事をすると、どんな空間で食べるかということの大切さを痛感する

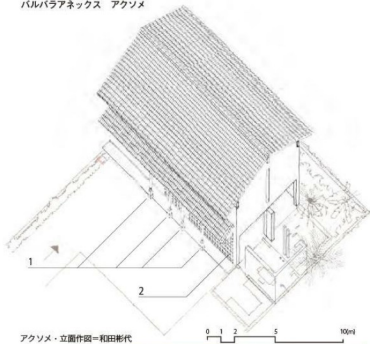
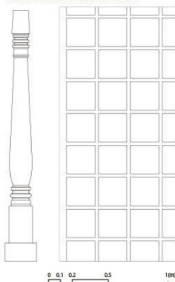
4．バルバラのテラコッタレリーフ

1　4作品あるバルバラのテラコッタレリーフ

バルバラは、アネックスのファサードに不可欠なデザインボキャブラリーになっているテラコッタレリーフをオーストラリアの芸術家ドナルド・フレンド（Donald Friend、以下フレンド）と制作している。フレンドとのテラコッタレリーフは、アネックスだけではない。50年の歳月をかけて完成していくバワの週末住宅群とその庭園ルヌガンガ（1948年〜1998年）で、バワが最初に改装するメインハウスのテラスWestern Loggiaに置かれたテーブル天板、バワの兄ベイビス・バワ（Bevis Bawa、1909年〜1992年、以下ベイビス）作のランドスケープデザインで知られているブリーフガーデンの住宅の壁、最終的にプレスナーに設計が帰属しているバンダラウェラの教会（1959年〜1962年）とあわせて4点つくられている。バンダラウェラの教会を除く3点はフレンドとの共作である。そのデザインが似通っているのはブリーフガーデンとアネックスで、バンダラウェラの教会は聖書の物語がテーマとなっている。ルヌガンガは緑みのある黒のタイルで、ブリーフガーデンとアネックスは濃く赤いが、バンダラウェラの教会はオレンジ色のテラコッタだ。

バルバラはフレンドの作品集に寄せた文章「Tiles and Veranda theatre」で回想する。バルバラにとって終生の親友はベイビスとアーサー・ファン・ランゲンベルグ（Arthur van Langenberg）であった（アーサーはバルバラの叔父で、ベイビスやバワに影響を与えたガーデンデザイナー）。バルバラは、1957年にスリランカに来たフレンドとブリーフガーデンで出会い、ベイビスとフレンドからアートを吸収する。バ

ルバラは手始めにブリーフガーデンのベイビスの家で、装飾したセメントタイルと色ガラスのボトルを使った壁のデザインを試しており、今でも現存している。そして、アーサーからケラニヤ（コロボ北の郊外）を紹介されたバルバラはフレンドと共にケラニヤで制作をはじめ、その土地の濃い赤の粘土に石灰を混ぜて0・5インチ（約13ミリ）の厚い平板タイルにレリーフを彫刻した。この手仕事でこねられた濃い赤土によるテラコッタに彫刻が施され、その色とテクスチャーはとても美しい、バルバラは素材である粘土にこだわったのだろう。薪を使った窯で焼成したテラコッタを友人たちのテーブル天板で使うように提案し、1個5ルピーで売ったとバルバラは回想している。また、バルバラは10インチ角（254ミリ）床タイルをつくっていた工場主に頼み、週1日作業し、翌週焼成するというスケジュールで、緑色のタイルにエッチングを施した。このように、フレンドを先生として、バルバラはアーティストとしてのトレーニングをつみ、テラコッタレリーフに得意な絵をエッチングしていくことで自分の世界観をつくっていく。幸運にも、彼女にデザインの場を提供したのはベイビスやアーサーだ。つくられた順序は類推の域をでないが、バルバラの回想からすれば、ルヌガンガのテーブル天板が最初、次にブリーフガーデン、アネックス、教会の順だと思われる。教会はバルバラ単独によるものだ。そして、ブリーフガーデンとアネックスは同じさまざまな動植物をテーマにしており、アネックスでより完成されたデザインになっていると思う。バルバラをアートに誘ったのはドナルド・フレンド、建築に誘ったのはプレスナーというのが歴史の事実だろう。

バルバラ・アネックスのファサードのテラコッタレリーフ（ドナルド・フレンド＋バルバラ・サンソーニ作）

左写真／バンダラウェラの教会（CHAPEL for the Good Shepherd Convent・1961年～62年）の彫像とその内観。祭壇に向かって左に十字に区切られた開口と、右にテラコッタの腰壁があり、その上に十字形のテラコッタが配置されている
右写真／バンダラウェラの教会の十字形のテラコッタレリーフ（バルバラ・サンソーニ作）が9つ並び、キリスト生誕の物語が描かれている
写真2点＝SEBASTIAN POSINGIS

バルバラ・サンソーニによる甦ったキリスト復活の彫像。バンダラウェラの教会（CHAPEL for the Good Shepherd Convent、1961年～62年）の彫像が最初につくられ、このアネックスの彫像は2番目となる

前庭からアネックスをみる。ポーラスに構成された建築から光がもれ、美しい陰影をインド菩提樹とともにつくりだす。ハンドメイドのテラコッタレリーフや古材の柱が夜景ではより引き立つ

2 テラコッタレリーフの世界観

アネックスのテラコッタレリーフに何が描かれているか、20センチ前後のテラコッタタイルに、スリランカの風土に根ざした紋様が彫刻されている。レリーフは玄関右側の壁一面を彩っており、タイルは、縦8段、横17列の構成である。レリーフがあるのは、下から1・2・4・6・7・8段。テラコッタはケラニヤの濃い赤土を材料としているのだろう。テラコッタの赤がとくに濃く発色し、薪焼成による一枚一枚色味が微妙に違う手づくりの味わいがある。1・2段目には、亀や蟹、魚など海の生き物、4段目はライオンや鹿、うさぎなど地上の生き物、6・7段目は、人々や建物、象やトカゲなど、地上の生き物、8段目は鳥や花など、空や空中の生き物とスリランカの人間や建築、動植物が平衡に描かれている。これを初めて見たとき、京都高雄の高山寺が持つ鳥獣戯画図を思い出した。私たちには仏教的世界観にもみえるが、人間中心主義というより、スリランカの風土において生きとし生けるものはすべて同等とする、多民族多宗教が重なり合う重層的歴史をもつセイロン的価値観の表現ともいえる。バルバラは敬虔なカトリックであるが、1960年前後、こういった多様な価値を表現できるアーティストが建築家と協働するバワサークルという芸術家集団がスリランカに生まれた。とても魅力的な、そして奇跡の物語である。

5．バワ作品の中でのアネックスの位置　バワはどうしてバワになれたのか

バワにとって最初の設計依頼であり、AAスクール留学で設計が一時中断した後に完成するデラニヤガラ邸（1951年～59年）が、建主であるプリーニ・デラニヤガラ（Preeni Deraniyagala）夫人にもバワにも満足いくものではなかったのは有名な話である。建主は、モダンでありながらセイロンの伝統建築との融合を求め、そのテーマはバワにとって終生のコンセプトになった。しかし、1950年代はまだ、今日の評価につながるようなバワの設計スタイルの萌芽はない。その一方で、中庭式邸宅であるワラウアを現代につくり直したイナ・デ・シルバ邸（1960年～62年）、敷地の巨石を活かし、大屋根とランドスケープデザインの掛け算で場を生み出したポロンタラワバンガロー（1963年～65年）、さらにはアネックスのように型枠装飾や鮮やかな壁画がファサードとなるセント・トーマス小学校（1957年～64年）やモンテソーリスクール（1963年～64年）などは、1960年代前半に設計され、これらバワの代表作とされる建築を眺め並べると、その先駆けとしてアネックスは位置づけられる。そして、デラニヤガラ家の勧めもあり個人的には古建築をみていたバワでも、1950年代、それを設計に活かすことには成功していない。しかし、バワサークルが大々的に古建築デザインサーベイを敢行し、デザインサーベイの代表者で、実測調査ではラキ・セナナヤケやイスメス・ラヒーンの先生でもあったプレスナーがバワの設計パートナーとなる1960年代初頭、バワとプレスナーはスリランカの風土を活かした現代の建築を生みだしていく。バルバラの言葉を借りるならば、バワ建築はその意味で最もセイロン的なるものである。プレスナーにとって、デザインサーベイで得られたデザインボキャブラリーを試す絶好のプロジェクトがアネックスであり、未来ではなく過去を見つめ、大きな屋根をかけることを具体的に2人で議論したのもアネックスであった。『IN SITU』でもプレスナーは、アクションペインティングのように即興的な協働でデザインや施工が進んだと回想している。それを示すように、プレスナーの図面をトレースした平面図・断面図では、一部、現状とは異なる部分がある。1階ファサードにあった開口や2階の格子窓がそれにあたる。バワの設計スタイルが確立していく1960年代において、プレスナーのクレジット作品でありながら、バワとの間接的な協働を見て取れ、かつバワサークルのデザインサーベイの知見が反映し、建築家と芸術家の協働というバワの真骨頂が最初に行われたアネックスは、チームバワが「バワ」になっていくプロセスを示す重要な生きた住宅である。

きのした・ひかる／わだ・あきよ

ピーコックが描かれたテラコッタレリーフ。ドナルド・フレンド作かバルバラ・サンソーニ作かは不明。ファサードの一連のテラコッタレリーフでも、テラコッタの色も鳥の描かれ方も特別な意匠である

参考文献

＊『Domus014』SRI LANKA november15-december15,2015年

＊『IN SITU』Urlik Plesner, 2012年

右写真／階段を介し2階には、リビングを見渡す書斎が配置され、その奥には格子窓からの採光と通風が確保されたベットルームがある

左頁上写真／庭で挟むように配置されたアネックスは、奥側にあたる東側の庭へは建具がなく、プライバシーを守りながらも可能な限り外部へ開放されている。庭のエッジに造り付けられたL字型の長いベンチは、住宅内部と同じ素材である白塗装のレンガで、それが空間の連続感を生み出している。通風を考え、ドアとトレリスの扉が二重になっている奥が1階寝室。この住宅は扉や建具の数が最小限に抑えられている

左頁下写真／1階奥の唯一閉じた、プライバシーを確保した寝室。バワ建築同様、調度品と建築の協働によって空間が生まれる。バルバラ・サンソーニによるベアフットの鮮やかなベッドカバーがテラコッタの床の素材色や白を基調とした空間に映える

上写真／House for Maurice and Malkanthie Perera（1964）の内部空間。アネックスとのシリーズであるのは一目瞭然。ここではリビングと水盤が建具なしで連続した構成になっている
左写真／House for Maurice and Malkanthie Pereraの外観。House for Ian and Gun Pieris同様、トレリス（格子窓）が多用されている

下写真／House for Ian and Gun Pieris（1964）ファサード。平入りの構成をプレスナーは好むようだ　写真＝木下光・和田彬代

House for Maurice and Malkanthie Perera (1964)

House for Ian and Gun Pieris (1964)

ウルリック・プレスナー、ゴールフェイスホテルにて（1998年）

ウルリック・プレスナーは『IN STITU』において、THREE HOUSESとしてアネックスを紹介している。他の２つの住宅とは、同じコロンボ市内につくられたHouse　for Maurice and Malkanthie Perera（1964年）、House　for Ian and Gun Pieris（1964年）である。ここではさらにマウントラビニアにあるLeela Dias Bandaranayake House（1963年～1965年）を加えて比べると、プレスナーの通底するコンセプトを理解することができるだろう。それは、コルゲート板と半丸の素焼瓦による切妻屋根、平入りのリビングアクセスによる平面構成を柱がアンパラマのように支える断面、テラコッタの床と白を基調する壁、通風と光をコントールするトレリス（格子窓）と必要最小限まで抑えられた扉や建具の数、の4点である。アネックス同様、住み手の家具・調度品や絵画を引き立てる、すなわちライフスタイルの基盤となる環境がデザインされている。そして、どの家もスリランカの熱帯において、とても快適で心地よいことをお伝えしなければならない。ある意味、現代住宅建築の教科書のような家々である。

木下光・和田彬代

ウルリック・プレスナーの住宅

上写真／Leela Dias Bandaranayake House（1963-1965）の外観。内部の豊かな空間とは裏腹にとてもシンプルな外観である
左下写真／内部空間。切妻屋根と吹抜けを介したリビング、柱が象徴的に屋根を支える共通のコンセプトが貫かれている
右上写真／妻壁の上に開けられたスリット。バルバラ・アネックスと同じ手法である　　右下写真／階段の配置がバルバラ・アネックスをはじめとする一連の住宅群と同じである

Leela Dias Bandaranayake House (1963-1965)

【特別記事】

設計組織の温故知新
多くの主体の合作として生まれたガウディ建築

山村健（東京工芸大学）

時代が異なれば建築のあり方は異なる。昔の秀作を参考にしようとも、社会状況が異なれば、実現できることにも差が生まれる。

例えば、アントニオ・ガウディの建築に共感し、感動しようとも、その造形を現代でそのまま模倣するのは難しいこともあるだろう。しかし、あのような造形が人の営みとして、なぜ生み出し得たのか。天才の所業と言ってしまえばそれまでだが、それだけが起因ではないはずだ。建築はひとりではつくれないことが、今も昔も変わらないとすれば、その組織のあり方に、建築を生み出す秘訣があったのではないか。その体制は、もしかしたら造形そのものよりも、現代の建築のヒントになるのではないか。

（伏見唯／編集協力者）

私の唯一の長所は、私のもとで働いている人びとのひとりひとりが仕事を充分にできるよう、彼らの能力を引き出すことにある

（アントニオ・ガウディ）

アントニオ・ガウディは世界で最も名前の通った建築家のひとりだ。未完の大聖堂は現在も建設中であり、世界中の人びとを魅了する建築である。とくに皆が面白いと思うのは、建設現場が聖堂のなかにあることであろう。訪れる人は完成した空間とこれから建ち上がる空間の建設現場の両方を楽しむことができる。普通、現場に一般の人びとはなかなか入ることができない。しかし、ここは昔から建設現場が市民に開かれていた。設計者のガウディは、来訪者が来ると人を区別することなく時間をかけて全体構想や、検討している部分に関して快く丁寧に説明していたようである。ガウディの建築が現代的にはどうかは意見が分かれるが、ガウディのアトリエに関しては現代的であったような気がしている。本稿はあまり知られていないそのガウディ・アトリエの組織体制についてである。

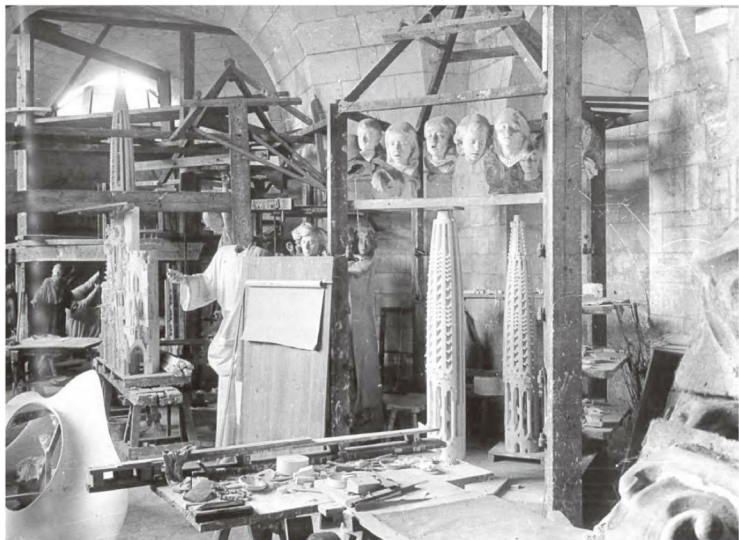
アトリエ・ガウディの体制

このアトリエは1887年に設けられた。ガウディは死ぬまでここを創作活動の拠点とした。ここでカサ・ミラ、グエル公園、コロニア・グエル、サグラダ・ファミリア聖堂が生み出された。そこでは、建築家は当然のこと、図面工、彫刻家、画家、木工職人、石膏職人など、プロジェクトに応じてさまざまな職種の職人が出入りしていた。近代的な建築設計事務所というよりは、ガウディを親分とした工房のイメージの方が正確である。

工事中のサグラダ・ファミリアとアトリエ・ガウディ（写真右下の切妻屋根の建物）※1

近代建築の父と言われるル・コルビュジエのアトリエは吉阪隆正の回想によれば、アトリエ内にいる人の多くは建築家であり製図板に向かっているのが常であったようだ。「私たちがあもこうもと迷っている時にコルはポンと決めてくれる」（『ル・コルビュジエと私』45頁）と記している通り、コルビュジエがひらめきをスタッフに伝えるものであったという。そして、出張中や外出中にも電話でその指示が飛んできたというから、現代のアトリエ事務所とさほど変わらない姿が想像できる。しかし、アトリエ・ガウディはそれとは異なる現代の我々にはないものづくりの体制を築いていた。

アトリエ・ガウディの正面外観。手前のベンチもレンガの実験としてアトリエでつくられた※2

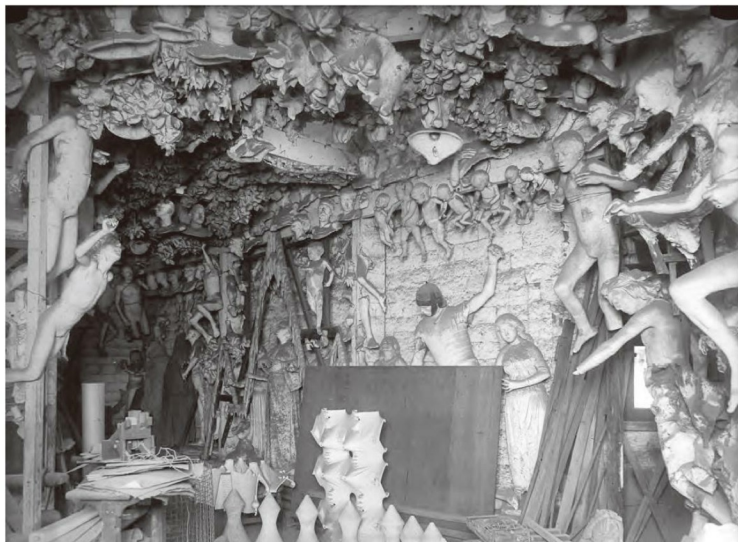
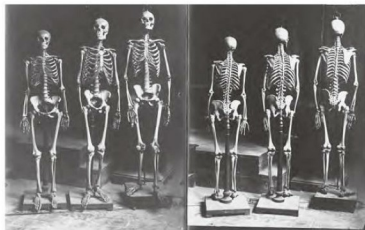
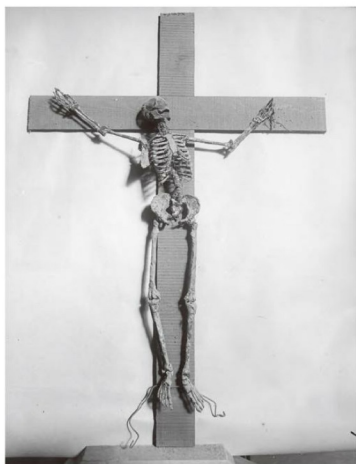
上写真／アトリエ・ガウディの内部。建築の模型とともに、彫像の試作などが渾然一体となって置かれている※3
左写真／棚上段には双曲放物面の石膏模型が、さらにそこから聖具のモックアップが吊り下がり、下段には受難の門のファサードが描かれた絵がある。さらに右奥には丸められた図面が収められており、石膏職人、金属加工職人、画家、製図工が混在していたアトリエの様子がうかがえる※4

コミュニケーションと「お題」の連続

ガウディはまず朝アトリエに来ると図面チェックを助手と一緒に行った。その次に各職人ごとのセクションを回り、エスキスを続けていった。職人との会話を大事にし、あだ名で呼ぶことを意識的にし、常にコミュニケーションをはかりながらつくっていくことを心がけていた。ガウディの指示に従うトップダウン式ではなく、対話形式だったのである。「イメージが違う」「正確さに欠ける」などの言葉を使いながら、「こうしたらどうなるか」というお題を出し、職人がそのお題の回答を翌日まで必至に考えるという繰り返しだった。そう書くとガウディが思いつきでお題を出しているかのように思われるかもしれないが、実際に職人は最終的に「アントニオは正しかった」と思うことが多く、それゆえに常にガウディの問いには真剣に答えることがアトリエの日常であったようだ。しかし、ガウディ自身も会話だけではなく大判の紙に水彩やグアッシュを用いて自らスケッチを描いている。残念ながらそれらは1939年の市民戦争で焼失してしまっている。

無いものは自分たちでつくる

ガウディのアトリエで興味深いのは、「必要なものは自分たちでつくる」ことである。

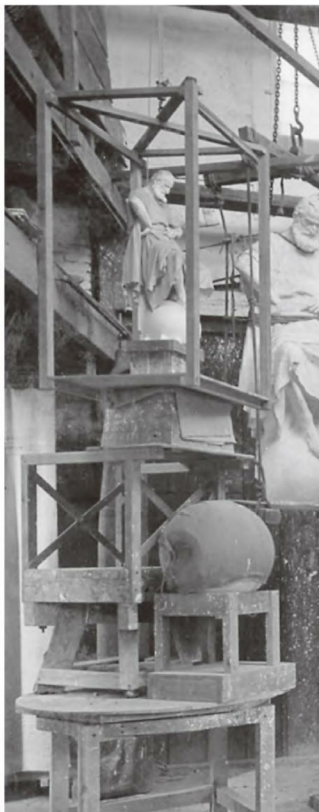
例えば、模型を例にとってみよう。サグラダ・ファミリア聖堂のスタディ模型は25分の1や10分の1がスタンダードであった。聖堂の頂部は地面から170mに達するので、単純に考えても10分の1スケールで17m、25分の1スケールでも7m近い高さが必要となる。かつ、内部の陰影空間を検討するために日射光が必要であった。そこでガウディは模型制作小屋を設計した。自然光で検証する必要があるために、屋根を開閉式の構造としている。それがアトリエの中心にあり、その周りには図工室や作業室があった。残念ながら今そのアトリエは現存していない。

自分たちでつくるものの対象は作業場所だけではなく施工機械にまで及ぶ。カサ・ミラは石造に見せた鉄骨構造である。波打つファサードの石材を持ち上げるクレーンが当時はなく、それを自分達のアトリエで設計している。また、それに付属する金具もつくっている。「無いから

上写真／解剖学を参照して人体の彫像を作成していた。さまざまな習作が並ぶ※4
右中写真／モデルが並び、彫像の角度などを写真家との共同作業により検証している※5
右下写真／彫刻の制作において、ガウディは解剖学的視点から造形を決定するために人骨の選定からエスキスを開始した※6
下写真／彫像の参考とするための人骨※7

さまざまなスケールで作成された彫像の習作。1/25、1/10などを経て原寸の検討へと向かっていく※5

できない」のではなく、「無いものはつくる」という発想がガウディのアトリエには浸透していたといえる。創作段階の検証から施工に至るまで一貫しており、実はそれがガウディの創作の重要な組織体制であるといえる。それは造形にも反映されている。

ガウディは複雑な立体幾何学を用いる造形を多用している。立方体、四面体、正八面体、放物曲面、双曲面、懸垂曲線など現代のCAD顔負けの造形を実践していた。ガウディのアトリエは建築家ではなく職人たちがほとんどであった。彼らは模型でスタディをする設計所員であると同時に現場で施工する施工者でもあった。ここにアトリエ・ガウディの魅力がある。例えば、曲線で上昇する石材を石工が刻んでいくとき、石工は幾何学的数式を勉強していない。しかし、ガウディは「右に10㎜進み垂直に１００㎜、その後20㎜進み垂直に４００㎜……の点に沿って石を削ってくれ」と促すことで石工は放物線を削り出すことができる。それは10分の1でも1分の1でも石工にとっては同じであり、石を正確に掘る能力を有していればスケールに関係なく作成できる。結果的に模型も実物も綺麗な曲面が石に掘られていくのである。ガウディが幾何学を多用していた理由の一つには、この施工者とのコミュニケーションに関係があると考えている。建築家が構想する造形と、職人が無理なく動かせる手業の共通言語として幾何学が重要だったのである。

ゆえに、現在のBIM（Building Information Modeling）のように設計と施工が連動したものづくりの原型のようなスタイルがここにはみられるのである。所員と施工者の一体化がガウディ建築の独特な創作方法であることに間違いはない。「建築家は曖昧に話すのではなく、幾何

右上写真／彫像とともに撮影する人びと※5
左上写真／自分たちの仕事を誇るように写真を撮影している※8
下写真／彫像完成後の記念撮影と思われる写真。服装がさまざまで、異なる職種の人たちが集まっていると思われる※5

学的に話すべきである」という言説が残っている。それは明快に秩序立てて話すという意図として解釈されているが、造形にまでその思想が徹底していたと理解することができる。

アトリエ・ガウディの現代性

　このアトリエの組織体制を現代の視点で振り返ってみるとどうだろうか。有名建築家のアトリエ事務所や大手組織設計事務所にも類をみない独特の組織体制であるといえる。建築家が少なく職種が多い時代の性質もあるだろう。建築を総合芸術と捉える風潮は残念ながら現在はない。もし、アトリエに彫刻家や画家と協働している事務所があればそれは希有な存在といえる。また組織内の関係はガウディの場合はガウディも所員も一緒に考える関係であるが、指示を出すのではなく問いを出すというのはユニークな手法である。トップダウンでもボトムアップでもないバランスのとれた関係といえる。そして重要なのが共通言語の存在である。ガウディの場合は幾何学がそれであった。それが造形言語としても通底していた。

　現在の組織論ではコミュニケーション問題、上からの圧力、プロトコルの遵守などさまざまに指摘されることがあるが、ガウディは毎日所員と話しかけることでそれぞれの長所を見抜いていくのである。弟子の日記や逸話のなかには、ガウディと話した他愛のない会話もたくさん記録されている。しかし、その裏から浮かび上がるのはガウディがアトリエ内をうろうろし、所員と会話を絶やさないアトリエの雰囲気であろう。そして建築的に重要なのは彼らが所員であり現場施工者であった点である。設計者と施工者の分離ではなく、施工と設計が一体化していることで、思考から制作まで一貫して推進されていく体制である。それは高度なアナログのBIMともいえる。組織づくりという言葉を近年至るところで耳にする。ガウディは結果的に組織をつくっているが、重要なのは「なにをつくりたいのか」というヴィジョンをもつことであると教えてくれる。ガウディは造形や構造的理解に優れていたが、自身でも述べているように人の長所を見抜く才能こそが、大きく彼の建築に影響しているといえる。

やまむら・たけし／建築家

参考文献
・Juan Matamala, Antoni Gaudí. mi itinerario con el arquitecto, Editorial Claret, 2009
・吉阪隆正『吉阪隆正集第8巻 ル・コルビュジェと私』（勁草書房、1984年）

図版クレジット
※1 THOMAS(ED.)/AHCOAC
※2 ADOLF MAS/Institut Amatller D'Art Hispànic
※3 ADOLF MAS/ESTAB
※4 FERRAN,COAC
※5 AUTOR DESCONEGUT/AHCOAC
※6 AUTOR DESCONEGUT/ESTAB
※7 FERRAN/AHCOAC
※8 Fons Matamala. Càtedra Gaudí. Escola Tècnica Superior d' Arquitectura de Barcelona. Universitat Politècnica de Catalunya

大正期の貸家を
現代の町家暮らしを体験できる宿に

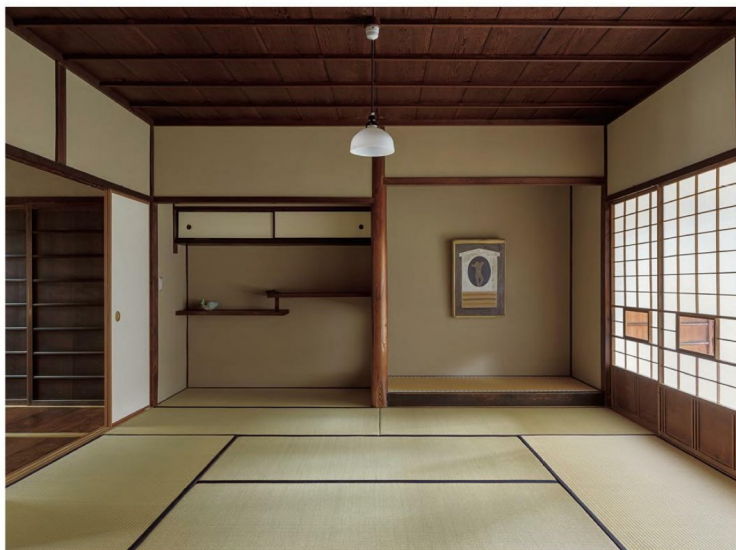
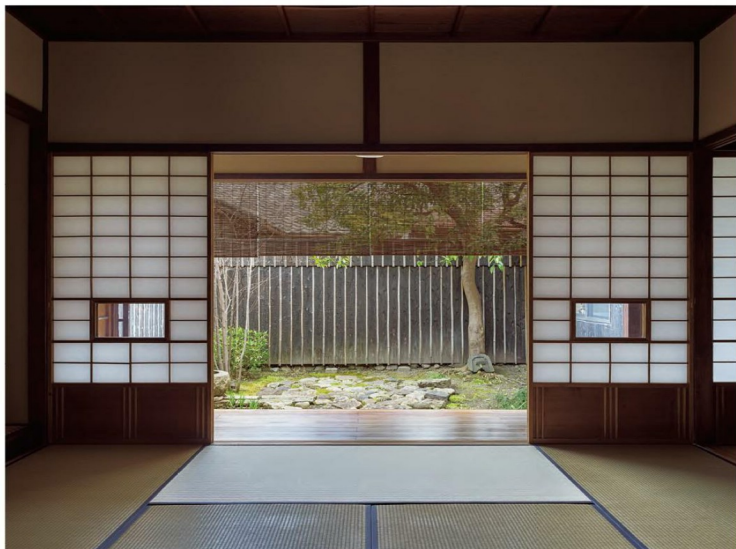
奈良町宿 紀寺の家

奈良県奈良市紀寺町
改修設計＝藤岡建築研究室／藤岡龍介
「縁側の町家」施工＝ツキデ工務店
「前庭の町家・通り庭の町家」等施工＝ヒロタ建設
写真＝市川靖史

シリーズ　第2回

登録有形文化財のこれから

縁側の町家（登録有形文化財）

90頁～91頁写真／改修により大正期の一般庶民の住む貸家の座敷が甦る
上写真／縁側と裏庭境のガラス戸の敷居・鴨居を柱の外側に取り付けることにより、外部と内部が一体化する
左頁上写真／座敷から裏庭を見る。改修前から庭に転がっていた多くの古石を活用し重層する時間を表現した。
大正時代に植えられた橙の木は生活の木であり、この木を活かした庭をつくり「住み継ぐ」を表す
左頁下写真／座敷の床構えから当時の庶民の暮らしが浮かぶ

上写真／外観庇の取替えた材がよく分かる。内部から路地の様子がうかがえるよう、開口部には物見格子が付けられていた
右写真／当初の土間に戻し、新たに対面型キッチンを据えた
左写真／増築した浴室。古材を活用した洗面台と、白の洗面器、白のモザイクタイルを貼った長州風呂が対比する

「紀寺の家」の歴史

「紀寺の家」は旧奈良町の東南に位置し、2戸1棟の長屋と戸建の貸家を活用し、全5戸（縁側の町家・通り庭の町家・三間取の家・前庭の町家・角屋の町家）の宿泊施設として修復再生した建物です。

紀寺という地名は平城京に都があった時代に元興寺の南に紀寺という寺院があったことから名付けられました。

近代に入り奈良町周辺は銀行倶楽部や国立奈良博物館、県庁、奈良女子師範学校、郵便局、奈良ホテル、小学校などが建ち、鉄道も敷かれ、日本陸軍の練兵場なども開場し、めまぐるしく様相が変わっていきました。新しい時代の波と共に奈良町にも多くのサラリーマン世帯が移り住むようになり、周縁部に広がる田畑を開発し、多くの貸家が建てられるようになりました。

2008年度から行われた奈良県の近代和風総合調査で、この紀寺周辺も悉皆調査を行いました。瓦葺きの町家型農家、かつて材木屋だった高塀の付く大型の町家、材木屋の事務所だった町家、数棟の貸家や長屋などが存在していましたが、30年前からすると町並みは大きく変貌していました。

今まで気にも止めなかったエリアには、前面道路と路地奥に平屋建、切妻、平入り、桟瓦葺きの建ちの低い2戸1棟の長屋2棟と、戸建1棟の計3棟が建っていました。これが後の紀寺の家となります。

調査を行うと、道に面した貸家は、通り庭と3室の居室が1列に並ぶ奈良町の伝統的町家スタイルの長屋（通り庭の町家・三間取の町家）。2棟目は、路地奥西側に主体部から土間の炊事場が突出た角屋（つのや）の長屋（前庭の町家・角屋の町家）。これは角屋から戸口のある塀を建て、塀と建物の間に空間を設けて玄関とする角屋型前庭タイプでした。その向かいの3棟目は、式台形式の玄関と土間の炊事場、居室がくい違い4間取りで縁側付き、座敷には違い棚のある立派な床構えをもつ戸建の貸家（縁側の町家）でした。後に1924（大正13）年4月6日上棟の紙の棟札を発見し、建築年代が判明しました。当時は軍人、小学校の教師、木工職人などの家族が暮らしていたようです。

このように、伝統的一般型町家タイプ、角屋前庭タイプ、戸建タイプとそれぞれの住戸にバリエーションがあり、非常に興味深い建物でした。また、基礎石や木材など地域材で構成された伝統構法による建物であり、土間の炊事場や床の間のある和室など、大正期頃の一般庶民の暮らしと奈良町における近代の住宅への変遷が見られます。そして、奈良町の中ではありますが、平屋で建ちが低くスカイラインに広がりを感じました。

しかし時代と共に改造が繰り返され、20年間も空き家で放置され、かなりの老朽化が進んでいたことから所有者は取り壊す予定でいたそうです。所有者に話を聞くと、先代が建築好きで、周辺に何棟もの建物を建てたとのことでした。そこで、建物の価値や魅力を伝えると、かつてお父様のされてきた数々の事柄や思いがこみ上げてきたご様子でした。そんな建物を歴史的資産として残していくために、貸家は貸家としての活用を提案させていただきました。

改修の意図

大正期の庶民の町家を再生し、その良さを実際に多くの方々に感じてもらうための宿泊施設とすること、暮らすように泊まることで、「住まい」として体感できるものとすることが、この改修の主題になりました。

具体的には以下の5点を軸に、時間が重層する中に居心地のよい空間を目指しました。

・かつて日本人の精神のなかに「朽ち果てるまで使い続ける」があったように、材として強度を保って使用可能な材は極力利用し、新規材としても古材を使用する
・当初のカタチを基本とし、戻す部分、残す部分、新たに活かしながら展開する部分などを判断しつつ、広がりと時間の対比や新鮮さを求める
・伝統構法を基本とした改修とする
・現代技術を取り入れて快適性を確保するが、建物の価値や魅力は殺さない
・構法を活かした限界耐力計算法で耐震化を図る

改修の流れ

第1期工事（2009年8月～2010年3月）は「縁側の町家」から始めました。度重なる改造で玄関土間の壁にはプリント合板が貼られ、炊事場であった土間部分には床や天井が張られていました。そこに流し台やコンロ台が置かれ、その横には1畳分程の風呂場がつくられていました。また、雨漏れで柱が腐り便所の屋根や庇が落ちかけていました。不同沈下や建物の倒れなどは多少あるものの想定内の破損状況でした。

炊事場は改造により床と物見格子の高さが不自然でした。残存する床下の三和土や壁の腰板、天井裏の煤けなどの痕跡により、床と壁、屋根裏を当初に戻し、トップライトを設けました。食堂と対面する形で新たにスチールフレームのキッチンを据え、床は古材の板張りとし、食堂と台所境の鴨居や小壁を取り除き一体化することで、広がりと明るさと利便性を兼ね備えました。また縁側の床は畳の部屋のレベルに合わせ、縁側と庭境の敷居と鴨居を外部側に新たに設けることで、ガラス戸を引き寄せて全開口を可能にしました。

第2期工事（2011年2月～2011年9月）は、残りの隣接する長屋2棟に着手しました。これら長屋は雨漏れや湿気による破損や腐朽による老朽化が著しく進んでいたため、更に住まいとしての快適性や居住性を高めました。また、宿泊施設の機能としてフロントや事務所などの整備も行いました。

おわりに

「奈良町宿　紀寺の家」は2011（平成23）年10月末にオープンしました。オープン後は多くのリピーターに利用され、ゆったりとした時間を味わって頂いています。

2016（平成28）年2月には「縁側の町家」が登録有形文化財に登録されました。この建物のように、たとえ小さな貸家や老朽化した建物などであっても、歴史や文化面、景観面、資産面などを調査することで価値付けができ、国の登録有形文化財にもなり得るということを知っていただき、活かしていってもらいたいと思っています。

今までに私が奈良町内で、利活用を目指した改修で登録有形文化財となった建物は10軒、現在申請中や今後改修を予定している建物は3軒ほどあります。今後も歴史的建物の価値や魅力を活かした改修や再生を推し進めていき、次代へ繋げていきたいと思っています。

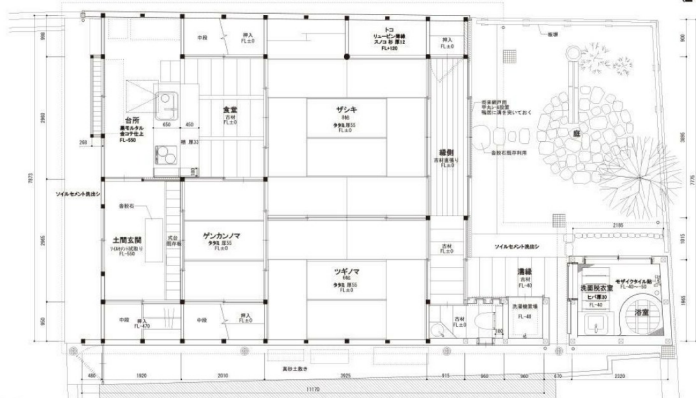
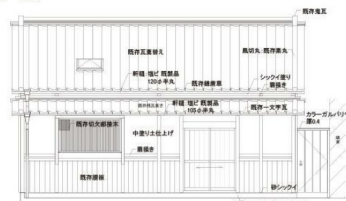
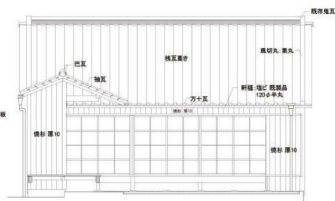
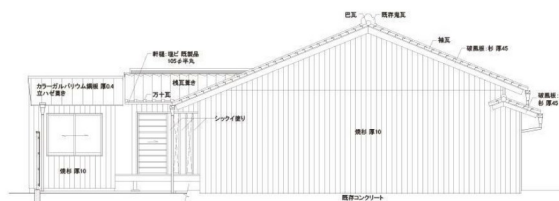
藤岡龍介

前庭の町家

右上写真／前庭から瀟洒な玄関を見る
左上写真／台所から和室・裏庭を見る。4畳間には庭に面して書斎コーナーを設けた
下写真／和室からかつて炊事場だった土間を広げた寝室を見る。土間は敷き瓦で床暖房を敷設。
小屋梁は古材を使用

通り庭の町家

上写真／オクノマから通り庭を見る。トップライトの光が壁に光と陰影を映し出す
右写真／通り庭からオクノマ・ナカノマ・ミセノマを見る。オクノマの時代の違う古材の天井板が空間にリズムを与える
下写真／浴室は槙風呂。裏庭を見ながら湯に浸かる

(■…既存材)

平面図　1/100

西側立面図　1/120

東側立面図　1/120

北側立面図　1/120

柱の腐朽部分を金輪継で継いだ

写真＝藤岡建築研究室

資料

●建物名—奈良町宿 紀寺の家
第1期工事—「縁側の町家」
所在———奈良県奈良市紀寺町
所在———宿泊施設
●設計——藤岡建築研究室
担当／藤岡龍介、小橋憲太
耐震設計／井出晃二建築研究室
(井出晃二)
●施工——ツキデ工務店
現場監督／山崎博司
大工棟梁／中村光善
屋根／光本瓦店
左官／しっくい浅原
建具／岡本建具
造園／アースワーク
電気／エムイーテック
給排水／ S&W 巽
家具製作／浦辻製作所
竣工———2010年3月
(改修前竣工：1924年)
構造規模—木造平屋建
●面積
建築面積—513.08㎡
延床面積—84.00㎡
地域地区—78.66㎡
●主な外部仕上げ
屋根———桟瓦葺き（既存瓦利用、一部新規）
軒天———垂木野地現わし
壁———焼杉板張り、一部中塗土仕上げ
建具———既存建具補修及び古建具利用、一部アルミサッシ
●主な内部仕上げ
天井———ゲンカンノマ・ザシキ・食堂／既存竿縁天井補修　ツギノマ／竿縁天井　台所／中塗り土仕上げ　浴室／桧縁甲板張り　縁側／軒裏現わし
壁———居室部／中塗り土仕上げ　トイレ／漆喰塗り　浴室／桧縁甲板張り
床———ゲンカンノマ・ザシキ・ツギノマ／畳　台所／墨入モルタル　食堂・トイレ／古材松板張り　縁側／古材縁甲松板張り　浴室／モザイクタイル貼り
●設備
冷暖房——ルームエアコン
給湯———貯湯式電気温水器／ダイキンエコキュート
換気———第３種換気
●主な設備機器
台所———電磁調理器／三化工業
洗面所——水栓金具／ハンスグローエ
浴室———長州風呂／大和重工
トイレ——便器／ TOTO
照明———ガラスグローブ

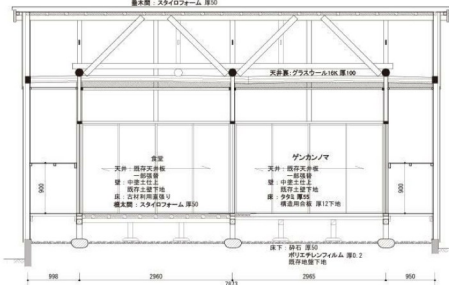
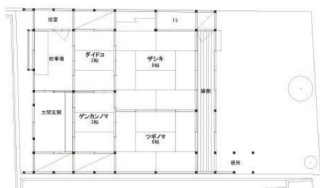
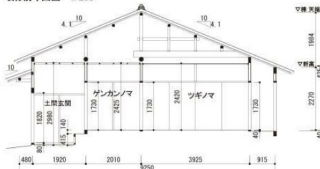
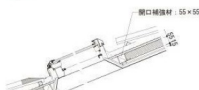
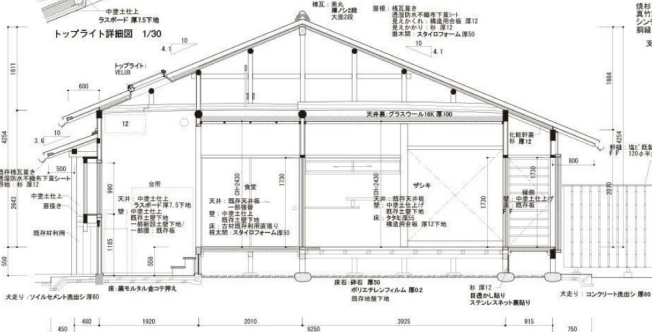
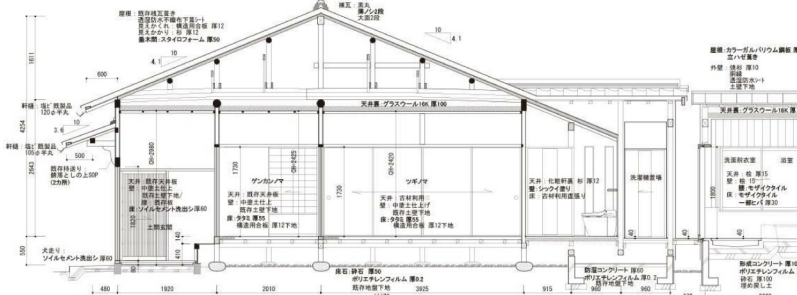
縁側の町家　改修の様子

工事は建物の部位で活かせる部分は極力既存材を活かした。軸組や小屋組、土壁、床など構造的にも耐震補強を行った

写真12点＝藤岡建築研究室

改修前外観

改修前内観

部分解体

足固め及び根絡みの設置

小屋組の補強

構造部材の取り替え

既存の瓦をめくる。葺き土も荒壁に使用

既存瓦の打音検査で使えるものを選別

使える既存瓦は穴を空けてステンレス釘で止め付け

既存の屋根土や壁土を練って荒壁に使用する

腐朽部分の柱・壁を落とし、柱の根継ぎを行った。
壁面は新しく竹小舞を編む

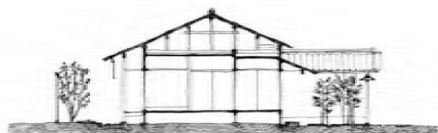
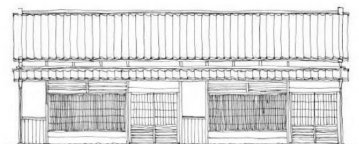
新しい壁土を塗り、新旧を一体化させる

配置図

道に面した伝統的町家長屋（通り庭の町家、三間取りの町家、フロント部）の再生した外観

奈良町宿 **紀寺の家**（奈良県奈良市紀寺町779）

奈良の大切なものを宿にしました。“泊まる”のではなく、奈良町で“住まう”ようにひとときを過ごす。
築約100年の町家を改修し、これからの町家暮らしを提案した施設です。
電話　0742-25-5500（受付時間9:00～19:00）　webサイト▷　http://machiyado.com/
※ご予約、料金・お問い合わせはwebサイトをご確認ください。

復原図

資料

●建物名—奈良町宿 紀寺の家 第2期工事—「前庭の町家」「通り庭の町家」等
●設計——藤岡建築研究室　担当／藤岡龍介、藤岡奈保子
耐震設計／藤岡建築研究室（藤岡龍介、井上広之）
●施工——ヒロタ建設
現場監督／藤田進
木工事／武中建設
屋根／光本瓦店
左官／川村左官工業
建具／中村建具
造園／古川三盛
電気／吉田電機商工
給排水・空調／米田水道商会
浴槽（槙風呂）／樋口製作所
竣工———2011年9月
構造規模—木造平屋建
●主な外部仕上げ
※「縁側の町家」に同じ
●主な内部仕上げ
天井———[前庭の町家]和室／既存竿縁天井利用、一部新規竿縁天井　土間／AEP　浴室／桧縁甲板張り
[通り庭の町家]クチノマ・ナカノマ／既存竿縁天井利用　6畳間／古材杉柾竿縁天井　土間／AEP　浴室／桧縁甲板張り
壁———[前庭の町家]玄関の間・6畳間・4畳間／中塗り土仕上げ　土間／漆喰塗り　洗面脱衣室／AEP　浴室／桧縁甲板張り
[通り庭の町家]玄関の間・寝室・6畳間／中塗り土仕上げ　通り庭／砂漆喰塗り　洗面脱衣室／AEP　浴室／桧縁甲板張り
床———[前庭の町家]玄関の間・洗面脱衣室／赤松縁甲板張り　6畳間・4畳間／畳　土間／敷瓦貼り及び砂漆喰塗り　浴室／モザイクタイル貼り
[通り庭の町家]玄関の間・寝室・洗面脱衣室／赤松縁甲板張り　6畳間／畳　通り庭／敷瓦及び砂漆喰塗り　浴室／モザイクタイル貼り

「記憶の燈」を継ぐために

落合悠斗(奈良県文化・教育・くらし創造部 文化財保存課 技師)

「善良な人々の家には、その跡に新築されるどのような建築においても二度とは得られない神聖なものがある。一般に善良な人々は皆そう感じていると私は信じる。」
(ジョン・ラスキン 著『建築の七燈』杉山真紀子訳、鹿島出版会、255頁)

銅色の登録プレート

登録有形文化財と聞いてまず思い浮かべるものは何だろうか。2020年2月現在、全国では12,000軒ほどの建造物が登録されているが、多くの人に身近なのは、もしかしたら特定の建物ではなく登録プレートの方かもしれない。古い建物に関心のある人ならば、農家の軒下などに高価そうなブロンズ色の金属銘板が誇らしげに掲げられているのを一度は見かけたことがあるだろう。

県の担当者として登録有形文化財に関係する業務はさまざまあるが、最も心躍る瞬間は、やはり新しいプレートが届いたときだ。桐箱入りのプレートは、鋳たてでまだ銅色に輝いている。素手で触ると錆びる(と注意書きにある)ので、万が一にも汚さないよう、手袋をはめて取り扱う。同じような緊張感は重要文化財の指定書に触れる時にもあるが、桐箱入りのプレートでは格別だ。奈良県では、プレートや登録証は各市町村を通じて所有者さんに渡しているので、必ずしもプレートが所有者さんの手に渡る瞬間が見られるわけではないが、同じような気分で受け取ってもらっているのではないか。

紀寺の家より

奈良市紀寺町は、近世期から続く市街地である奈良町の南辺に位置する。町名は古代豪族の一つである紀氏の氏寺が平城遷都に伴い当地に移転したことに由来するという(『角川日本地名大辞典』)。近世まではすぐ南手に田畑が広がる長閑な地であったらしいが、明治に入ると近くに陸軍の第53歩兵連隊(通称 奈良連隊)の練兵場が出来たこともあり、宅地開発が進んだ。

文化財登録原簿に登録されている「紀寺の家 縁側の町家」は、この時期に建築された貸家である。建築年代は明らかでないが、紀寺の家の一棟から大正13年の棟札が発見されており、この頃のものと推定されている。しかし、通土間を廃し玄関を設けるところは新しく、時代的には更に下るかもしれない。

切妻造り、桟瓦葺き、平入りで西面し、内部は床・違棚付きの8畳間を中心に、6畳間、玄関の間および台所がある。東には半間幅の縁側を通し、南西隅には附属屋として便所を設けていたらしいが現在は改修されている。登録有形文化財となっているのは、附属屋を除く主屋の部分である。

瓦の再用、竹小舞の土壁と旧規を踏襲した改修がなされているが、宿泊施設とするために大きな手が入れられた部分もある。とくに大きな部分は台所で、天窓が設けられ、シンクのついたカウンターが後設されている。

紀寺の家は改修後に登録を受けた例なので、今回の改修は文化財的価値に支障ないことが確認されていると言えるが、登録有形文化財にはいつも保存と改修という問題が付きまとう。

文化財のための修理とは

歴史的な建物を使い続けるためには絶えず修理を続けることが必要であるが、木造では必ずといってよいほど部材の取り換えを伴うために、一種の破壊行為を伴うことを免れない。このため、国宝・重要文化財の修理にあたっては、詳細な調査の上に写真や図面を作成し、修理工事報告書を発行するが、それでもなお、すべての情報を記録できているわけではない。

修理に際してもこのような状況であるのに、活用のための改修といえば、内部の使い勝手の向上のために行われるものであるから、文化財の保護という見地からのみ言えば、できる限り避けることが望ましい。

ただ、紀寺の家のように、宿泊施設などとして積極的に利用することを前提とする場合、このような対応は難しいことも多い。とくに、長年放置され、雨漏りが発生し、軸部まで腐朽しているような民家を修理する場合には、大規模にならざるを得ないし、その後の利用面から相応の手を加える必要が出てくる。

それでは、登録有形文化財や、登録を目指す建物をやむなく改修する場合にはどのような点に気をつけるべきだろうか。

まず、どんな部材であっても、できるだけ再用することが必要である。例えば、土壁の土は近くで採取されたものが使われていることが多いが、良質な民家の上塗り土では、現在は採取できない土が使用されている場合もある。その

上写真／紀寺の家のフロント部
左頁上写真／「縁側の町家」。当初の炊事場土間に復原し、腐朽部分は新規材で修理。トップライトが新たに据えた対面型キッチンや土間を明るくする。物見格子から路地をうかがうことができる
左頁下写真／「通り庭の町家」。通り庭吹抜け部分、小屋裏からやわらかな光が差す。土間は敷き瓦に床暖房

既設瓦を使った軒先・螻蛄羽(けらば)の納め　写真＝藤岡建築研究室

場合には、古土を篩に掛けて再度使うような配慮が必要である。瓦葺きの建物はまだ一般にみられるが、明治や大正の瓦というと数が少なくなりつつある。たとえ平瓦の一枚でも破損がないものは再用したい。野地板にある何気ない製材所の印が、地域の歴史を紐解く資料となることもあり得る。やむを得ず外した部材は将来の参考として小屋裏などに保管しておく。

新たな設備の導入や構造補強が必要な場合には付加的に行い、後に取り外せるようにしたい。一般に設備の寿命は建物よりも短いし、将来的に新しい技術が開発されるかもしれない。

また、新たな部材を付け加える場合には、新旧が分かるようにしておきたい。世界的には真正性（オーセンティシティー）の観点から、補足材は一目で見分けがつくようにすることが好ましいとされるが、部材の取り換えが頻繁に発生する日本の木造建築の場合には、古色塗りを施さないと見苦しい場合も多々ある。将来的にオリジナルの部材と区別がつくように、部材の見え隠れに修理年を記すなどの配慮がなされていれば支障ないだろう。

また、竣工時には工事前後の写真や図面を含む十分な記録を作成して備えておきたい。重要文化財では大きな工事毎に修理工事報告書を作成して全国の図書館に配布しているが、工事写真帖と図面を簡易製本したものがあるだけでも、将来の修理の際の参考となる。しかし、書類は散逸しやすい。併せて、修理のいきさつや概要を記した棟札を作成し、小屋裏に取りつけておけば確実である。

以上は概略に過ぎないが、改修にあたってはその建物のもっている特質を引き出すよう気をつけたい。木造であれば木造の、煉瓦造であれば煉瓦造の空間性があるので、不釣り合いに大きな開口をつけるなどして壊すことのないようにしたい。その建物の本来もっている価値を引き出し、磨きあげる作業のなかに、設計者の創意が埋没していることが好ましい。

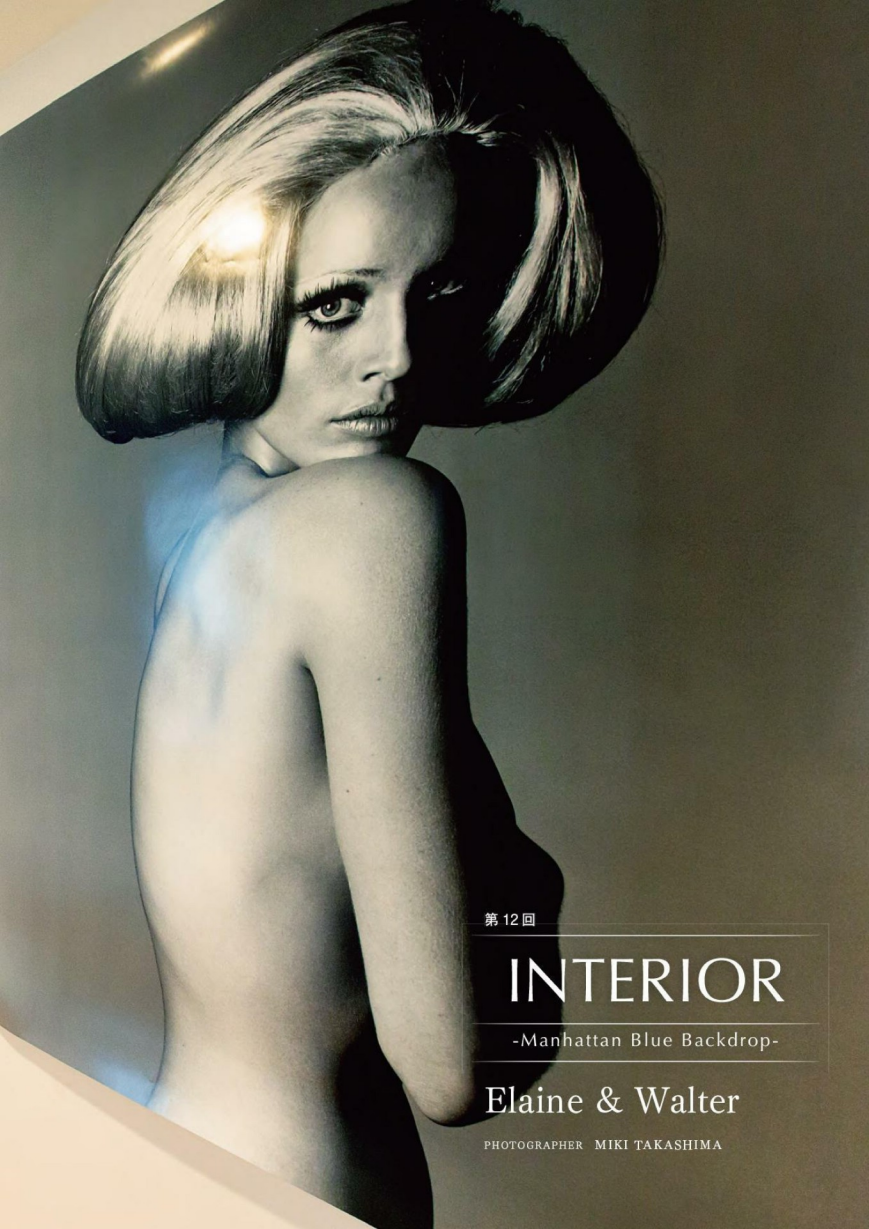
再び登録プレートに戻る

ところで、登録プレートには建物名も所在地も建立年代もない。あれば便利だと思うのだが、代わりに刻まれているのは「この建造物は貴重な国民的財産です」という簡明にして清明な宣明である。この一文を読むと、私はいつもラスキンを思い出す。彼は『建築の七燈』の中の「記憶の燈」と題した一章で、次のように述べている。

「過去の建築を保存するかしないかは、便宜上や感情の問題ではない。私たち批評家には、それらに触れる権利は全くないのである。それらは私たちのものではないのである。一部は建てた人に属し、一部は我々に続いて生まれて来る人類のすべての世代に属するのである。」

（同書278頁〜279頁）

ラスキンこの時弱冠29歳ながら、歴史的建造物の保存に携わるすべての人にとってこれほど力強い言葉はない。

おちあい・ゆうと

第12回

INTERIOR

-Manhattan Blue Backdrop-

Elaine & Walter

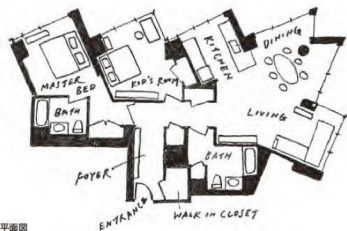
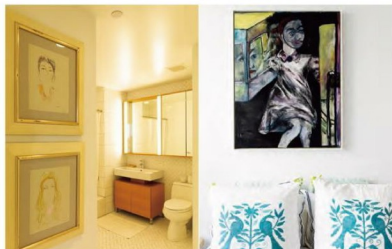
PHOTOGRAPHER MIKI TAKASHIMA

ハドソン川からマンハッタンを眺めた時に目を引くピラミッド型のビルディングは、2016年にオープンしたばかりの VIA57th。エレイン・ディファーリーは、このビルディングの30階に娘イジーと、パートナーであるウォルター・チンと3人で暮らす。3人は2018年の秋に、最初の入居者が1年居住した後のまだまだ新築の匂いが残る部屋に引っ越してきた。壁の多くの面が窓ガラスになっていて、マンハッタンの摩天楼はもちろんハドソン川も視界に入っており、とくにサンセットの時間帯が美しいという。“このアパートメントは、建物が主役。まわりに次々と建設されている面白みのない立方体のビルディングとは明らかに違う形をしていて、細部までこだわり過ぎず、デザインされ過ぎていないのに独特”。

エレインはコスメブランドのクリニークでソーシャルコンテンツのエグゼクティブディレクターとして仕事をする。ウォルターはヴォーグジャパンやヴィクトリア・シークレットを始め世界中で活躍するファッション・フォトグラファー、エレインの娘イジーは高校生活をスタートさせたばかり。マンハッタンで忙しい生活を送る3人にとって、この部屋に入ってくるたくさんの光と軽やかな空気感、ピースフルで落ち着いた感じは、オアシスのようでとても気に入っているという。天井が高く、たくさんの収納スペースがあり、部屋から部屋へのフローがよく考えられたレイアウトは心地よく、限られた床面積を最大限に広く感じる。とくにリビングルームはユニークな形をしているから、ファニチャはシンプルで機能的なものを空間に合わせて揃えたとのこと。“ブルーはリラックス効果に加えて、窓から見える空やビルなどと相性が良く、この部屋に一体感をもたせてくれる”と、白を基調としたアパートメントの所々にブルーカラーのアイテムが見られ、透明感と中立的な雰囲気をつくり出している。“私たちのゴールのひとつは、散乱物、デコレーション、消費物を最小限に抑えること。意識的に日々をシンプルなものにしようと努めている”とエレイン。多様性と、学校や仕事場などさまざまな場所へ素早く到達できる便利さと柔軟性をもつニューヨークを愛する3人は、同時に、喧騒から逃れたっぷりと休息しエネルギーをチャージする時間を何よりも大切にしていて、このアパートメントでは読書や料理をよく楽しむという。　高島未季

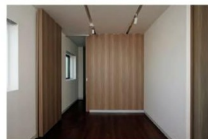
104頁～107頁写真／広めに空間がとられている玄関ホールには、ファッションのモノクロプリントがシンプルかつ大胆に掲示されていてギャラリーのよう。Allure Magazineスポンサーの元で開催されたInternationalCenter of Photography での写真展以降、ストレージに眠らせていたウォルター自身の作品を、ある日思い立って壁に貼り付けたという。画鋲だけの簡単な掲示方法が気に入っている、とエレイン
上写真／入居の際に見つけたウォルナッツの saarinen のダイニングテーブルが、このユニークな空間にフィット
下写真／リビングスペースのソファは、ブルックリンの家具屋 Organic Modernismで、このコーナースペースに合う形のものを見つけた
左頁下写真／高校生イジーの部屋。ゴージャスな眺めを背景にファーやゴールドが品良く配置されている。覚書が全身鏡にポスカでメモされていたり、枕の上に写真がニートに飾られていたり、女子高生らしさが見える

エレイン・ディファーリー（右）
パートナーのウォルター・チン（左）

高校生活をスタートさせたばかりのエレインの娘イジー・ディファーリー

平面図

左写真／バスルーム。クリスチャン・ディオールのイラストレーター、ビル・ドノバン作のエレインとイジーのポートレートがドアの脇に。友人からの贈り物　右写真／マスターベッドルームの壁面には、エレインのアートスクール時代のペインティング作品

2016年にオープンしたばかりのレジデンシャルビルディング、VIA57th。郊外に繋がるハイウェイがマンハッタン市内の道路に交わる交差点前という立地で、"マンハッタンへの入口"という意味を込めてその名が付けられたという。35階建

PRODUCT NEWS

壁や出入り口を自在に変更

自由に動かせる間仕切りシステム「ZIZAIKU／自在区」。1LDKから2LDK、3LDKと自在に間取りを変えられるため、ライフスタイルや家族構成の変化に合わせて住まいを楽しむことができる。軽量化で一人でも容易に取り外しできるため使いやすく、施工の簡略化にも貢献。

ユナイトボード
☎03-3652-1241
www.uniteboard.com

大開口向け新型アコーデオン網戸

アコーデオン網戸「アルマーデフリー」をフルリニューアル。アルミ形材の形状を見直して大開口へも対応可能となり、開閉操作がスムーズに。さらに網戸本体の着脱も簡単になって施工性やメンテナンス性も向上した。樹脂部品の見え掛かりも最小限でデザイン性もアップしている。

セイキ販売
☎03-5999-5825
www.seiki.gr.jp

庭に本格的なスピーカーシステム

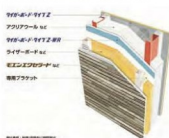
屋外用スピーカーシステム『ローボルト®サウンドスケープシステム』。LEDIUSローボルトトランス（12V）と専用アンプを繋いでスピーカーに接続するシステムで、低電圧のため安全で簡単に施工できる点が特長。専用アンプ1台につき最大8台のスピーカーを接続できる。

タカショー
☎073-486-2531
takasho.co.jp

SOLIDOシリーズに新商品追加

窯業系内外装材「SOLIDO typeM」に新商品を追加。「SOLIDO typeM_FLAT研磨」（写真右上）は、従来モデルの表面を研磨することで内部の骨材が現れ、新しい素材感を表現。また、素材の色を生かした「灰」や、赤みのある「錆茶」もラインナップに加わり、表現の幅がさらに広がった。

ケイミュー
☎0570-005-611
www.kmew.co.jp

日本のマンションで外断熱

軽量外断熱システム「FEISタイガーモエン」。吉野石膏・旭ファイバーグラスとの共同開発で、外壁の構造を見直して日本のマンションでもコストを抑えた外断熱を可能にした。外壁の下地を鉄骨造としたことで、軽量化と施工の簡略化に加え、優れた断熱性により建物の省エネ化に貢献する。

ニチハ
☎03-5205-3916
www.nichiha.co.jp

再塗装に最適な自然塗料

屋外木部用塗料「カントリーカラープラス」。ドイツ生まれの自然塗料「オスモカラー」ブランドから登場した新商品で、浸透性でありながらも隠蔽性が高く、経年劣化で灰色化した古材を1回塗りで再塗装できる。沿岸部や山間部など、気候条件の厳しい環境でも使用可能。

オスモ&エーデル
☎0794-72-2001
osmo-edel.jp

タイルの総合カタログ

「2020-2021年版 総合カタログ」を発行。巻頭では「タイルをアートに！！」というテーマのもと、製造技術の進化によって新たな表現領域に踏み出した最新デザインタイルの魅力を紹介。屋内外の床・壁タイルからアートモザイクタイルまで、世界中から集めた素材を紹介している。

名古屋モザイク工業
☎0572-44-3060
www.nagoya-mosaic.co.jp

遮熱効果に優れた外装材

フッ素インクジェット塗装商品「NFI-フィネストーン」「NFI-グラブロッシュ」。金属サイディング業界として初めてフッ素インクを採用。日射がもたらす表面温度の上昇を抑制するほか、紫外線による変褪色からサイディング表面の塗膜を守り、長期にわたって美しい意匠が保たれる。

アイジー工業
☎0237-43-1810
www.igkogyo.co.jp

優れた短期許容めり込み耐力

土台座金「PZカットスクリュー・ミドル」。座面積が直径50mmに広がり、ヒノキ類やベイマツ類において10kN以上の短期許容めり込み耐力を実現。従来品より使用数を減らすことができる。土台を削りながら締め付けるため、座掘りせずに材面とフラットに仕上げられる。

BXカネシン
☎0120-106781
www.kaneshin.co.jp

受賞記念講演

環境と建築

西沢立衛

有形学からの影響

半年ほど前に、内藤さんから吉阪賞の受賞についてお電話をいただいたのですが、偶然『吉阪隆正集』を読んでいた時だったので非常に驚きました。学生の頃読んでいた本ですが、最近とくに読み返すことが多くなってきた本です。吉阪さんは僕にとっては影響を受けた建築家の一人で、最近とくにその影響を感じるようになってきていたのでこのような賞をいただき大変嬉しく思います。

吉阪さんからは、とくに有形学の影響を受けました。物がどんなかたちで人間に関わり、影響を与えるのか、その関係についての吉阪さんのお考えはたいへん示唆的で、ずいぶん影響を受けたと思います。

唐招提寺

唐招提寺は僕が好きな建築の一つです。時々そこを訪ねて新しいことを見出すこともあれば、自分が面白いと思ってやってきたことがほとんど実現されているなと思うこともあります。いろいろな点で自分にとっての教材になっています。

一言でこの建物を語ることはできませんが、興味がある点をいくつか挙げると、まず第一に「大自然のすぐ隣に建つ」ということです。第二に、「建築に中も外もない」ということです。ほとんどストラクチャーしかない状態です。第三に、「生命的な感覚」です。ヨーロッパの建築の

特別記事

第5回 吉阪隆正賞

西沢立衛

業績　人間・都市・自然を対象とした一連の有形的建築

Teshima Art Museum
Rei Naito : Matrix, 2010
Photo : Ken'ichi Suzuki

──受賞理由・吉阪賞を振り返って──

以前、西沢さんの豊島美術館を訪れました。内藤礼さんのインスタレーションと空間が響きあい、本当に涙が出そうになりました。私たちが2011年以降経験してきた災害や社会的な問題、そういうものが風とともにこの空間を抜けていくような思いがしたのです。今は要領のいいデザインばかりが流布しています。この空間はそうではなくて、もっと人間に近いものです。空間が力を持っている。吉阪もそういうものを求めていたのかもしれないし、吉阪が生きていたらこの作品を素晴らしいと言っただろうと思います。

10年前、私はこの賞を始めるにあたって吉阪の言葉を引いてこう書きました。

「"*経済が独走し、技術が横暴に振舞い、政治が横車を押しているような今日の傾向に、もう一度人間のためのという大目標を確立するために。これらの勝手な方向に進んでいる力を空間の秩序立ての法則によって、並行を保たせたいと念願する。なぜなら前者のいずれも現実に力を発揮するときは必ず空間を占拠せずには不可能だからである。このためには新しい道具が欲しいのである*"。吉阪は著書、『住居学』の最後で、有形学の必要性をこのように訴えている。状況は何も変わっていない。それどころか日に日に人間は追い詰められているようにさえ見える。我々は未だ人間を讃歌するに足る新しい道具を手にしていない。言語を超えたものや建物の形は、人間社会の不和を解き、相互理解へと道を開く新しい道具となることができるのか。形をあらしめようとする人間の営為に対する根源的な問いかけが吉阪が発した数々の言葉の根底にある。この問いかけに叶うもの。答えようとするもの。時代を超えてこの精神を引き継ごうとするものに、吉阪隆正賞を送り顕彰したい」。

10年やってきて、その通りになったのかどうか。でも、かなりのことは達成できたのではないかと思っています。この成果は、参加していただいた審査員や協力していただいた関係者の皆様の尽力によるものであることは言うまでもありません。この場を借りて御礼申し上げたいと思います。ありがとうございました。

内藤廣

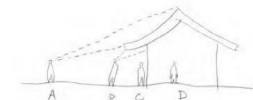
受賞者／西沢立衛（にしざわ・りゅうえ）

1966年 東京都に生まれる。1990年 横浜国立大学大学院修士課程終了、妹島和世建築設計事務所入所。1995年 妹島和世と共にSANAA設立。1997年 西沢立衛建築設計事務所設立。2001年～ 横浜国立大学大学院助教授。2010年～ 同大学大学院建築都市スクールY-GSA教授。主要作品に、グレイス・ファームズ（2015年）、ルーブル・ランス（2012年）、軽井沢千住博美術館（2011年）、豊島美術館（2010年）、十和田市現代美術館（2008年）。

彫刻的で造形的なダイナミズムとは異質の、構造や構法、平面計画やまたは自然とのつながりからくる力強さとダイナミズムがある、それを生命的なものととりあえず言ってみます。第四に「記念碑性」です。人間の思いが形になるということです。こうしたことを、整理がつかないまでも話してみます。

大自然のすぐ隣に建つ

唐招提寺は中国の様式で建てられた建築ですが、日本的だと感じる部分が多くがあります。中国の場合は、大陸の砂漠の中に基壇をつくってその上に建つという形で、まず敷地づくりから始まる。まず都市計画から始めるのです。世界全体を構築するような、構築的で人工的なつくり方です。日本は海に囲まれて、国土の大半が山で、建物を建てる場所がほとんどなく、大自然に直面した状態で、自然の中に建築が建つ。大自然から一歩も下がらないそういう建ち方に、僕は非常に感動してきました。それは自分にとって建築をつくるときの課題にもなっています。

唐招提寺に見られる自然と建築の関係で興味深い点は、緑のなかを進みだんだん建物に近づいていくのですが、このアプローチが面白いなと思います。まず門をくぐって金堂の屋根が見えます。この時点では建築の外にいます。さらに近づいていくと、あるところ

唐招提寺金堂へのアプローチ　　スケッチ＝西沢立衛

House in Los Vilos（2018年）

で瓦屋根が見えなくなって、代わりに軒裏が見えてくる。この段階で建築の傘下に入ったことが分かりますが、平面的にはまだ建築の外にいる。さらに進んで、庇の下の空間に入る段階で、屋根下に入りますが、しかしまだ室外です。いきなり外から中に入るのではなくて、徐々に中に入っていく、外から中に移行する際にいくつもの建築空間が現われてくるという面白さがあります。

「ロレックスラーニングセンター」（２００９年）はSANAAで設計したスイスの図書館です。この建物の外側には玄関ドアがなく、人々はまず建物の下のオープンスペースに入り、エントランスの中庭に入って、エントランスに入って内部に入る。という唐招提寺のような、段階的に空間が展開してゆくアプローチをつくり、中と外が経験として連続することを考えました。それが、いろんな方向からできるようになっています。

「豊島美術館」（２０１０年）の場合も、敷地に入っていきなり内藤礼さんの作品にダイレクトに行くのではなくて、ぐるっと回ります。まず道路の向かいの見事な棚田を見て、海を見て、森を通って近づいていくというアプローチです。豊島美術館はドアもガラスも入っていませんが、入口をすごく狭くして、閉鎖的な内部空間をつくり、中に入ると空間が変わったように感じられるようにもしています。環境と建築の一体化という意味で、どういう風に建築に近づいていくかということは自分にとって非常に重要な課題になっています。

吉阪さんがコルビュジエのエスキスを紹介しているくだりがあります。まず都市の外側から都市を見て、街の外観を遠望する絵を描く。次に、通りに並ぶ周りの建物と自分の建物を同時に並べて描いて、その次に自分の建物のファサードを描く。街の外から建築まで連続しているのです。その発想方法も僕としては唐招提寺と同じものを感じます。建築にどう近づいていくかを考えることは、建築と都市の調和を考える重要なきっかけになるのではないかと思っています。

「森山邸」（２００５年）は、集合住宅の状態からスタートして、ローンを返済していくに従って森山さんの住まいが広がり最終的には全体が森山さんの家になるというプロジェクトです。集合住宅として考えた時に、いろんなところから人が出入りできることが面白さではないかと思いました。普通の集合住宅のように必ず通らなければいけないエントランスや共用廊下があるのではなくて、商店街に行くか駅に行くかに

森山邸（2005年）

よって出入口が変わり、無関係の人が一緒に住む時に出入りを自由にできたらいいなと思いました。部屋と部屋の間に隙間があって、そこから横道に出ていくようなかたちで町と繋がっています。

生命的なもの

　豊島美術館の大きなテーマのひとつに自由曲線があります。自由曲線を使えば隣の山をカットすることなく、周りに合わせて建つことができます。また自由曲線によってつくられたワンルームの空間は、中にいても、外との関係性が分かる。中があって外、外があって中がある、という中と外の一体感が分かる。建物の中にいても外が感じられるというのは重要なことで、美術館に限らずいろんなプロジェクトで考えていることです。豊島では大きな穴を開けて、光と風、空気が室内に入ってきます。閉じているけど開いている、ということが面白さではないかと思います。

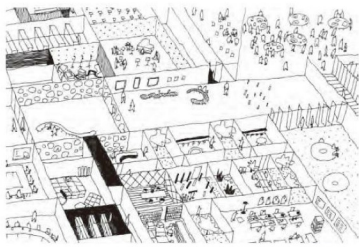
　佐々木睦朗さんに構造をお願いして、コンクリートシェルでつくりました。内藤礼さんの作品が床に展開するということで、あまり大空間ではなく天井高を低くしたいと考えました。シェルを低くすると足場を建てるよりも土で山をつくった方が楽なので、基礎をつくった時に出てきた土で山をつくり型枠にして、山の上に配筋してコンクリート打つという方法でつくっています。この方法は型枠のジョイント線がないので表面に3×6の型枠の線が出ず、スケールのない世界が生まれます。それも自分の考え方にあった構法だと感じました。建物に開けた穴は、型枠となった土を掘り出すためにも必要でした。この穴は3カ所あって、2カ所は地面のすごく近いところに配置しています。穴を開けることで光や風、音や匂いが入ってきて、環境と建築、アートが一体になる、ということをイメージしていました。

House A（2007年）

　中と外が一体ということで言うと、「House in Los Vilos」（2018年）は、地形からつくった建築です。チリの太平洋に面した岬の突端のところにつくった住宅で、岬に沿ってアーチが反復するのですが、違う形に変化しながら反復するリズムをもったアーチです。工業生産だと1個つくっても10個つくっても量の差でしかありませんが、例えば詩の場合、一文だけと三文繰り返すのとでは意味がまったく変わります。量だけでなく質が変わるわけです。それは、機械的反復か、生命的反復かの違いです。建築の反復もそうなるべきと考えて、アーチが機能に合わせたり敷地に合わせたりしてリズムをつくり海に向かってどんどん大きくなるようにしています。このリズムによって有機的、生命的なものをつくり出そうとしています。構造は必ず反復しますが、機械的・工業的反復でなく、リズム的・生命的反復をどうつくるか、という課題です。

　「生命的なもの」ということを言葉で考え始めたのが「森山邸」や「HouseA」（2007年）の頃からです。「HouseA」は住宅のプロジェクトです。敷地が東西南北に長い敷地で、外壁を敷地に沿って、凸凹にしています。南面に隣家が迫っていて非常に限定されていたので、採光を考えてということもありましたが、凸凹にすることで中と外が入り乱れるということを感じるようになりました。凹んだところをキッチンにしたり、凸凹にすることで中にも影響を与えていろんな場所が生まれて、同時に庭も生まれて、中と外が繋がる雰囲気がつくれると思いました。

多中心

　SANAAで妹島さんと一緒につくった「スタッドシアター・アルメラ」（2007年）という劇場があります。これは、大きな建物の中にいろんな場所をつくるということがひとつのテーマでした。要求条件としては大きい劇場2つと、小さいバイオリン教室やピアノ教室など、地域の人たちが学ぶ教室群の小さい部屋がいくつも並ぶ建築でした。普通にそれらを並べると一番大きな大劇場がいちばんえらく見えてしまうのですが、実際は大きい部屋も小さい部屋も同じように重要なのです。そこで大きい部屋が中心に見えないようなかたちを模索していました。ひとつの中心をもつ建築ではなく、どの部屋も

スタッドシアター・アルメラのスケッチ　図提供＝SANAA

中心になりうる、いわば多中心の建築です。
森山邸でも同じ問題を引き継いでいます。森山邸は最初の状態が集合住宅なのですが、敷地境界線沿いの部屋が、敷地の端っこに置かれた、道路に脅かされる部屋という感じにならないように、どうやってそこを快適な部屋にするか、という問題を考えていました。敷地の端っこでも、端っこ感覚というより中心にいるような感覚をつくろうと考えていて、当時何かを読んでいるときに出会ったのが、界隈という言葉です。例えば蒲田一丁目という領域は、人工的につくられたもので、中心と周辺が生まれます。一丁目と二丁目の境界近くに住んでいる人は、一丁目の端っこに住んでいると感じる。他方で界隈は、二丁目の端っこにいたとしても、界隈空間の中心に自分がいます。界隈は近所付き合いから生まれる空間なので、どこにいても自分中心の空間になるのです。界隈空間は自分中心の広がりをもち、それは一丁目からあふれ出る。これを僕は面白く感じました。一丁目という空間が政治的・人工的なものであり、界隈という空間が生命的・動物的なものという違いです。界隈には自分を中心とした生命的な広がりがある。森山邸に戻ると、道路に面して建つ家は、道路に面して大きな引き戸をつけて、路地に向かって大々的に開くように建てています。八百屋でもいいし、独立したばかりの若手建築家がここで住みながら働くのでもよい。建築家なら、道路にすぐ出られた方がスプレーも外で吹けて便利じゃないかなと。自分の場所が道路まではみ出して広がるような状況をつくることで、敷地の真ん中か端っこかを超えて自分の居場所がつくれるのでは、と考えました。そのため当時は、多中心というよりも、「敷地からはみ出る」という言い方で考えていました。

森山邸
周囲に開き、自分の場所が敷地の外へとはみ出し、広がってゆく

形のないファサード

吉阪さんの『有形学』からは、いろいろな影響を受けました。たとえば森林の地域と、大陸の砂漠またはスイスの山岳のような地域では、場所のつくり方がどう違うかを、足し算引き算で説明しています。砂漠や山岳は、雨が少なく木々が少なく、遠くまで見渡せます。自分の場所を示す目印として石を積む。山登りで使うケルンがこの例として挙げられています。目印をつくるとき、遠くから見えるように石を高く積む。これは城郭都市の原型でもあり、何もないところに塔を建てるので、いわば足し算です。一方で森においては、ケルンを積んでも遠くから見えないので、逆に木を切り倒す。そうすると切ったところに光が当たってそこだけ明るくなり、遠くから見てもその場所が分かる目印になる。これは引き算です。砂漠と森では、場所のつくり方が違うという話です。砂漠のケルンは物なので、彫刻的というか、外と中の領域がはっきりしています。でも木を切り倒した広場は物でなく空間なので、境界が曖昧で、森と広場がなんとなく連続しているわけですね。この目印のつくり方の違いは僕にとってたいへん示唆的でした。
「ガーデンアンドハウス」(2012年)は、建物の壁と壁に挟まれた土地に建てた建物です。建主は女性2人で自宅兼仕事場にするということでした。これを家と考えて、ここに普通の切妻の家らしい家をつくるのは変だし、あまりオフィスらしいとか家らしいという形じゃないほうがいいなと考えた結果、「形がない」ということを考えるようになりました。仕事場でもあり家でもあるという、用途がはっきりしないあいまいな感じをそのまま形にできないかと考えました。具体的には、スラブを積層して、各階で部屋を囲むように庭を配置しました。敷地境界線から少しセットバックさせることで広がりも感じられます。積層させながらも高さや明るさなどが変わることで、いろいろな場所をつくろうとしています。構造体は3本のコンクリート柱で、その隙間にキッチンやお風呂を入れ込み、庭部分には打ち合わせスペースをつくっています。

ガーデンアンドハウス(2012年)

建築の記念碑性

先ほどの吉阪さんの、森林と砂漠の話から、建築のアイデンティティは単独的なものではなくて、環境のなかで決まるということが分かります。冒頭に述べた「記念碑としての建築」に関わる部分ですが、パルテノン神殿に行くといつも面白く思うのが、それは人間のための建築ではないので、誰も中に入らない。入らないけど、十分に建築の経験ができる。建物に入ったかどう

かではなくて、近寄っただけで建築の威力、空間の力を感じます。建築は、その中だけでなくその外にも空間をつくるものです。建築は環境的事物なのです。

中国の「済寧美術館」（2019年）では、大きな軒空間をつくって、その軒で囲われた庭をつくっています。屋根の半分近くが外部で、夏場の日除け空間になっています。四角く閉じた展示室を回廊が繋ぐというプランです。期待していたことの一つとしては、中と外が反転するということと、ファサードが明るくなるということです。美術館が閉館していても軒下で市民が休めるような憩いの場所になる。中庭側からは美術館の回廊が見えて、その奥に公園が見えます。中庭は非常に大きくて屋根下から見ると明るく見えて建築が輝くというイメージがありました。中国の国宝を保存展示する建物だったので、宝物殿のような中に大切なものが入っているという感じが説明しなくても分かるようにしたいと考えはじめて、レンガの建物にしました。レンガにしたのは、隣町の曲阜にある孔廟が見事なレンガだったこともあります。

「徳田邸」（2016年）は、豊島美術館を一緒につくった学芸員の方の家です。この方が京都の二軒長屋の町家を改修して、家と集会場にしたいということでした。いろんな要望のなかで一番覚えているのは、宝もののような、持っていて嬉しいというものが欲しいと言われたことです。建物は昭和後期にモルタルが塗られていたり屋根も当初とは変わっていたりして、新しいものと古いものが混在していたので、まずは二軒長屋だったということが分かるように戻すことと、古い部分を磨いてきれいにするということを考えました。また、埋められてしまっていた通り庭の吹抜けを復活させました。平面計画的にはそれほど新しいことはしていませんが、新しい部材で戻していくというのは面白いなと思い、新旧混合の建物になっています。クライアントが言われた「宝もの」というのは、お金をかけるということではなくて、建築として貴重なもの、価値のあるものをつくりたい、というふうに考えました。

吉阪さんの有形学をそうとう勝手に解釈していますが、自分自身は、ものと人間の関係、ものがどう人間に影響を及ぼすかという点で、有形学は建築を考えるうえで大きなテーマの一つになっています。

にしざわ・りゅうえ／建築家

111頁～116頁特記なき写真・図提供＝西沢立衛建築設計事務所

徳田邸（2016年）

吉阪隆正（よしざか・たかまさ）

1917年 東京都に生まれる。1933年 ジュネーブ・エコール・アンテルナシャル卒業、1941年 早稲田大学卒業。1950～1952年 渡仏し、ル・コルビュジエに師事。1952年 帰国。1954年 吉阪研究室（U研究室前身）設立。1959年～ 早稲田大学教授。日本建築学会会長、日本生活学会会長、早稲田大学専門学校を歴任。1980年 逝去。登山家・冒険家としても知られ、ヒマラヤK2登山隊を組織し世界中を駆け巡った。主な作品に吉阪自邸（1955年、現存せず）、浦邸（1956年）、海星学園（1957年）、日仏会館（1960年、現存せず）、江津市庁舎（1962年）、アテネフランセ（1962年）、大学セミナーハウス（1965年）、野沢温泉ロッジ（1969年）ほか。

──吉阪邸に刻まれた文字──

旧吉阪邸の階段を登った右肩入口に、この文字が刻まれていました。受賞者にはこの文字を刻んだ盾をお渡ししてきました。吉阪先生がよほど好きな文章なのでしょうが、一体どういう意味なのか今まで分かっていませんでした。吉阪賞最終回を前に改めていろいろ探してみると、『臨済録』（岩波新書）という臨済禅師の言葉を集めた全集の問答にこの言葉が出てくることが分かりました。

心隨萬境轉
轉處實能幽
隨流認得性
無喜亦無憂

「心はばんきょうのままに天変しつつ、その天変の仕方はなんともひめやか。その流れのままに身体を見てとれば、喜びも憂も生ずることはない」。（世の中は流れて変わっていくが、そういうものすべてが空（くう）と悟ったうえで身を任せてみれば、喜びも憂いも生ずることはない）

しかしここから先が吉阪の食えないところで、実は『臨済録』のこの部分はインドの第22代マヌラ尊者の伝法偈からの引用です。インドのことなので、これより前のことはもう分かりません。ようやく分かったと思ったのに、実はもっと奥が深い。吉阪先生は巳年で、生前言われたことがあります。「巳年は捕まえにくいんだよ」と自分を笑っていました。捕まえたと思ったらヌルッと逃げる。まさにそんな思いです。

内藤廣

第5回 吉阪隆正賞授賞式・記念シンポジウム

2019年11月18日（月）
会場：アテネ・フランセ文化センター
主催：吉阪隆正賞実行委員会
第5回吉阪隆正賞選考委員会：
委員長／内藤廣（建築家・東京大学名誉教授）
委員／北山恒（建築家・法政大学教授）
後藤春彦（都市計画家・早稲田大学教授）
中谷礼仁（歴史家・早稲田大学教授）
藤井敏信（国際開発学・東洋大学名誉教授）

●過去受賞者／業績

【第1回・2011年】田中泯／「身体気象言語」から桃花村という場の生成へ
【第2回・2013年】坂口恭平／路上生活者の視点から暮らしの原点を問う一連の活動
次郎丸慶子／ベッドタウンからライフタウンへ―楽しく暮らせるまちへと進化する高蔵寺ニュータウン―
【第3回・2015年】一般社団法人アーキエイド／東日本大震災における建築家による復興支援ネットワーク
【第4回・2017年】黄聲遠＋田中央工作群／台湾・宜蘭における持続的かつコミュニケイティブな空間デザインの実践

●選考委員

【第1・2回】内藤廣、岡崎乾二郎、進士五十八、中谷礼仁、西川祐子、藤井敏信、松山巖
【第3回】内藤廣、岡崎乾二郎、北山恒、黒石いずみ、進士五十八、藤井敏信
【第4回】内藤廣、北山恒、中谷礼仁、後藤春彦、藤井敏信

●事務局

田中滋夫

ディスカッション

吉阪隆正賞
最終回を迎えて

内藤廣・北山恒・後藤春彦・田中滋夫・
藤井敏信・西沢立衛
進行＝中谷礼仁

上写真＝済寧美術館（2019年）

西沢さんの受賞について

中谷　まずは皆さんから今回の西沢さんの受賞や講演いただいたことについて、それぞれコメントをいただきたいと思います。

北山　これまでにいくつか彼の作品を見てきました。西沢さんは多中心と言われましたが、中心がないというのか、遍在している感じがして、不思議な建築でした。建築を考えるとき、必ずデザインする人の目がどこかに現われて、中心が否応なく出現してしまうんですが、彼の建築は中心が不在になっている。豊島が素晴らしいなと思うのは、あの空間に入ると、同じ空間の中にいるという感覚と同時に、端の人の振る舞いが感じられる。シェルがすごく低くて、建築も人間に圧力をかけている。でも丸い穴が開いていて解放もされている。解放された先に巨大な自然がある。構築物の主体が消えながら、でも自然に屹立する空間が出来ている。空間がこんなふうに中にいる人間を支配することができるんだと感心しました。

後藤　吉阪賞の規定には、近年公表されたデザイン行為であることと記されています。この「行為」という部分が重要だと思っています。僕は、吉阪先生がご存命であったら、この時代にどんな仕事を展開されたか。その方向性を見定めたいと思って選考に参加してきました。最終回の受賞者の決定には難儀しましたが、西沢さんの名前が出たときに審査員全員が「それだ」と一つになったような感覚がありました。その時に、内藤さんが、「自分の建築は弥生的だけれど西沢さんは縄文的だ」というコメントをされたのですが、まさに豊島美術館は縄文的というか吉阪的なる見事なデザイン行為として成立していると思いました。今日の西沢さんの講演のなかでも「有形学」というキーワードが繰り返し出てきて、吉阪的なるものを西沢さんのお話から再発見することができ、最後の吉阪賞として素晴らしい方に受賞していただけたのではないかと思います。

藤井　私は建築から少し離れて、地域の動きに興味がありアジアのスラムなどを研究してきました。スラムの人たちは自分たちで生きる環境を確保しないといけないので非常に自立的につくっていて、貧しくても結束して助け合いながら生きています。後藤先生がデザイン行為と言われましたが、吉阪賞もそうした行為がまさにそういうふうに繋がっていくと面白いと思っていました。

生前吉阪先生が「今は建築つくる時ではない」と言われたことがあります。大勢が動いていて、いきいきとした発想が生かされないという時期だったからではないかと思います。今でもそういう閉鎖的な状況がありますが、西沢さんもおそらくそういうことを多少なりと感じておられて、それをどうやって空間として打破していくのを考えられていたように感じ大変共感しました。

田中　僕も何回も『有形学』を読んでいるのですが、全然分からないところばかりでいまだに謎だらけです（笑）。吉阪先生は、形があるということはどういうか、その永遠の謎を常に自分自身に問いかけながら有形学という言葉をつくったのではないかと思います。西沢さんもそういうことに非常に忠実に、本気で取り組まれているように感じます。形をつくるという本当に大変な作業のなかで、言葉を紡ぎながら空間が出来てきているのだなと感じました。

内藤　僕が西沢さんに吉阪賞をもらってほしいと電話をかけたとき、「ちょうど吉阪さんの本を読んでいるところです」と言われて、嘘つけ、と思ったんです（笑）。でもどうも本当だったようで、これはもうご縁というしかありません。私は少し前に豊島美術館を実際に訪ねて、私自身建築家としてというより一人の来訪者としてとても感動しました。でも、彼はプレゼンが思ったより下手ですよね（笑）。今の若い建築家は形の操作もうまいし提案する能力には長けているんだけど、それはただの方法に過ぎません。西沢さんは自分が何を実現したいかということに対して正面から取り組まれている。それこそが建築家に求められるべきことだと思います。吉阪もプレゼンは下手でした。でも、そのもどかしさみたいなものが本当に新しいものを見出す

力でもあるのだと思います。

中谷　審査の議論は6回にも及びました。何度も議論して、最後西沢さんの名前が出て腑に落ちた感覚がありました。最初は平和、国際主義、といった言説から選考をしていましたが、終盤は吉阪さんのデモーニッシュな部分や形の部分から検討を進め、一番最後に西沢さんに決まったのは、我々自身の勉強の過程があったからではないかと思います。豊島美術館は、その竣工直後の2011年3月の東日本大震災による関心の変化によって、やや損をしていたと思います。建物を訪れて、ようやくそこから解放されて、この美術館に込められた有形の可能性を見出した気がいたしました。

有形学、唯物論的思考

西沢　僕は、吉阪さんの有形学に共感するところが多くあります。吉阪さんは年表をよく使われるんですが、年表のほとんどが紀元前で、近代はほんの一瞬でしかない。あのような人類史的視点から建築を考えていく視点は素晴らしいと思います。唯物論的な視点も素晴らしいと思います。例えば集落の影響範囲は3・5kmだと書かれていました。なぜかというと1・5mの高さから見渡した時に地球の半径から考えると3・5kmだと。感覚ではなくて、唯物論的な思考があり、それにはとても影響を受けました。

藤井　今のお話はよく分かります。先生が亡くなる年に、2人で穂高に登りました。そのときに驚いたのが、草木の名前を本当によく知っていたことです。どこで勉強しているんだろうと思いました。休んでいると、川に水の渦ができているのが見える。それを見て「渦の計算式は大体分かるんだけどねえ」と、そんな話をされました。先生はそんなことを考えずにもっと大きなことばかり考えていると思っていたのですが、全然そうではありませんでした。しかも、その話の流れがストレートに僕に伝わってくる。そういう感覚を持ちました。

田中　私が学生の頃、よくコンペをしていました。アムステルダムのシティホールのコンペのときは、みんなが寝ている間に先生が一所懸命その晩に油土をいじって、朝起きるといろいろつくり変えられていて、ええこれかと（笑）。頭より手でものをつくりたかった人だったと思いますし、それがU研の活動にも大きく関係していたと思います。それを都市や空間に広げて言おうとすると、西沢さんが言われたようにものにこだわってしか言わない。抽象的な言い方を嫌う人でした。

内藤　田中さんのおっしゃる通りで、僕も生意気な学生で、抽象的なことを分かったみたいに話したら吉阪さんから叱責を受けて、それ以来言うことがなくなっちゃった（笑）。「ものから語る」。西沢さんが感覚的に捉えられたことは当たっているんだろうと思います。当時は磯崎新さんを筆頭としたポストモダニズムの時代で、概念的な話が飛び交っていて「ものから語る」ということはほとんどありませんでした。でも僕自身は吉阪さんの言葉が頭に残っていて、できるだけ「ものから語る」というふうにしようと思ってやってきたつもりです。

　吉阪さんが亡くなる少し前に話されたことですが、コルビュジエが亡くなる前「君は幾つだ」と吉阪さんに聞くので、「30歳です」と言うと、「君はいいなあ。やり直せるから」と言われたんだそうです。つまり近代が背負っている根深い誤謬みたいなものがいっぱいあって、そうした唯物論的ではない観念的なものに対して、吉阪さんは挑戦をしてきたのかなという気がします。

後藤　吉阪先生は、有形学の中で環境と造形の関係を、寝相が悪い人間が布団をはいで寝てしまい寒くなった時に、自ら移動して布団に戻り潜り込もうとするか、あるいは布団を自分の方へ引っ張り寄せようとするか、2択あると解説されています。まさに西沢さんのダイアグラムの中心Aと端っこBの関係、多中心という言葉のように、その2つの対応を人間がすると解かれていました。ですからその辺りもお2人には通じるところがあると感じました。吉阪先生は亡くなる直前の病床で、これからは無形学ですよと言われたそうです。僕は数年前に『無形学へ』という本を著したんですが、それを書いている時に吉阪先生が夢枕に立ち、「結局、有形学と無形学はメビウスの輪の関係ですよ」と言って消えていかれました（笑）。有形と無形というのは表裏なく循環している。没後40年以上経っても吉阪先生には教育されているんだなと思いました。

北山　吉阪さんの言葉は発明的、発見的だなと思います。僕は「不連続統一体」という言葉を発明しているのがすごいなと思うのと、後藤さんがメビウスの輪とおっしゃったけど、本には蛇が自分の尻尾を噛んでいる絵が描いてありました。イメージと共に言葉があるという印象が強くあって、そういう吉阪さんの言葉に学びました。でも、僕は早稲田出身ではありません。基本的には吉阪さんの目でみようとしますが僕はその目をもっていない。最後の吉阪賞を誰にするかということになった時に、早稲田という荒波の中で発言できるのか自分で分からなくなってしまったんです。そういうなかで、西沢さんはどうかという案が出てきて、中谷さんが言われてああそうだなと思ったのは、彼の言葉の強さと空間とダイアグラムが本当に一対で出てくる建築家であること、納得しました。

吉阪隆正から社会へ

中谷　会場の方にも伺いたいと思います。齊藤祐子さんいかがでしょうか。

齊藤　私はU研究室で吉阪先生の晩年から亡くなるまでの間、一緒に仕事をしていました。今回最後の吉阪賞が西沢さんに決まったと最初に伺った時は、正直ちょっと違和感を覚えたんです。私自身は世の中で評価されている価値観とはまた別に、埋もれているものに光を当てるような視点をもって社会を見ていたのが吉阪の考え方だと思っているので、吉阪賞にもそういうことを期待していました。今日改めてお話を伺って、むしろ吉阪がもっているものが、今の社会の中の大きな流れの中でもつながりをもちながらより広がっていく可能性を審査員の方が提案されたということがよく分かりました。

中谷　ありがとうございました。では最後、田中先生に締めていただきたいと思います。

田中　2010年に内藤さん、後藤さんから吉阪隆正賞をつくりたいということで相談を受け、私が事務局をやって、吉阪先生ゆかりの方にお声がけをしたところ想定していた倍近くの予算が集まりました。ただ区切りなどを考えると、5回までということで始めました。5回という一つはっきりした区切りをもっているのも吉阪先生らしい賞かなとも思います。このメンバーでの吉阪賞は今回で終わりですが、皆さん方に興味をもっていただき、ぜひともいろんなかたちで吉阪先生の思いを、建築、都市のみならず世の中へと一生懸命考え伝えていっていただければこれに勝る幸せはありません。

110頁～117頁文責＝編集部

『住宅建築』2019年10月号発売記念講演会

「集まって住む」を考える

野沢正光（建築家）×迎川利夫（相羽建設）

緑豊かな環境と住民同士のコミュニティがつくられているソーラータウン府中。
設計者の野沢さん、企画・施工を行った相羽建設のプロジェクト担当者の迎川さんにお話しいただきました。

「ソーラータウン 府中」（2013年）　設計＝野沢正光建築工房、施工＝相羽建設　住人たちのバーベキューは毎週のように開かれているという

第一部　社会財としての住宅

ソーラータウン府中のコミュニティ

野沢　今回『住宅建築』の取材でソーラータウン府中の園路でのバーベキューの様子を傍島利浩さんが撮影してくれましたが、写真にその雰囲気がよく現われています。バーベキューは相羽建設の迎川さんたちが初期から住民同士の繋がりができるようにといろいろと仕掛けをしてくれたことの一つだったのですが、今は住民たちが自主的に開催しているそうです。

僕がここを訪ねたある時は、ご夫婦が園路側の縁側に出て、ちょっとつまみながらビールを飲んでいました。住宅地で窓を開けて昼間ビールを飲むって、今あまり起きないことだと思いますよ。

迎川　飲んでいると通りかかった人が、美味しそうですねって言って、じゃあどうぞって。そうすると自分の家に行ってビールとつまみを持ってくる。それがまた広がって5、6人で飲む、そんなこともあるようです。

野沢　府中は今の日本の住宅地には珍しくこういうシーンがあって、公でも私でもないコミュニティが出来ていると思います。

それから、驚いたのは大きなグランドピアノが置かれている家があったことです。住まい手へのインタビューで、たまたま窓を閉め忘れてしまった時に、お子さんが弾き終わると外から拍手が聞こえてくることがあると言われていました。地域社会が出来ているなと思いました。僕らがつくったこのがらんどうの家は、東村山の「むさしのiタウン」（2007年）を坪50万円でつくらなければならず、苦肉の策として考え出したものでした。奥村昭雄さんが始めたOMソーラーシステムを使うことが前提で、全室一室のドミノ住宅です。大きくつくっておくということが多様な生活や多様な変遷をつくり得るんだということを竣工から6年経ち実感しています。

でも、住宅というのは難しいもので、僕らの先輩が住宅地の開発や団地を夢をもってつくって、そこに若い人が入りたいと何十倍の競争率がありましたが、今はいつの間にか空き家になってしまっているという状況です。だからどこの住宅地もある段階でその姿を変えないといけなくなってくる。次の人が前の住宅を壊してまた新しい住宅をつくるということを続けているのが、ひょっとすると日本の貧困の理由かもしれません。何千万円というお金をドブに捨てるみたいなことをせざるを得ない。でもそれは皆がやっているからそうしているだけなのかもしれない。だから僕はなるべく長く使える住宅にしたいし、そういう認識を広げたいと考えています。

園路を実現する

野沢　2008年3月に東京都から出された環境基本計画というものがあります。2020年までに温室効果ガスの排出量を20％削減（2000年比）することが目標として出されて、具体的には2011年に、「長寿命環境配慮住宅モデル事業」として府中市の敷地の住宅プロポーザルが行われました。この計画書がユニークだったのは、環境配慮住宅の普及だけではなく、中小工務店の技術力の向上と活性化を図ることを目的に、地域特性と地場産業を生かしてつくるよう明記されていたことです。こういうことが明記されなければ、ハウスメーカーの家になってしまうと思います。今の小池知事はそういうことに興味がないようですが、当時の

知事の石原慎太郎さんは、幾分地元の民間企業の住宅づくりに興味をもっていた人だったようです。

　府中の土地は道路に囲まれたヘタ地で、東京都が公営住宅用地として今後使うことが目論めないということで売却されました。相羽建設は東村山が拠点で、最初は東村山に「むさしのiタウン」をつくりました。東村山はエリアが大きく70年の定期借地で、70年後には場合によっては何らかの公共用地としての利用も考えるということになっています。

　府中では計画当初は17棟を敷地に入れようとしていました。そうすると西向きか東向きにするしかない。他の応募案もこういう案が多かったでしょうね。

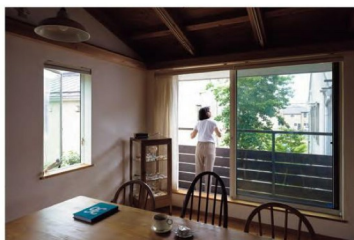
迎川　西側と東側の道路に対して開くように並べて配置するという案が多かったですね。

野沢　南向きにするという案も出てきて、パワービルダーはこの辺りで決めるのかもしれませんが、これはいくらなんでもなと。

　武蔵野美術大学の長尾重武研究室の学生にも協力してもらうことになり、みんなのなかに、緑の道をつくれないかという思いが出てきた。この園路案はすごくいいんだけど、一棟減らして16棟にしないと実現できない。16棟にするか17棟にするかで一棟の売値が違ってきますから、相羽さんは悩んだでしょうね。

迎川　府中は土地があまり安くなくて、ここも坪110万円〜120万円の土地でしたしね。

野沢　それでも人気があるのは、競馬場や工場があって税収が多いので公共施設など公共サービスがいいということが理由のようです。

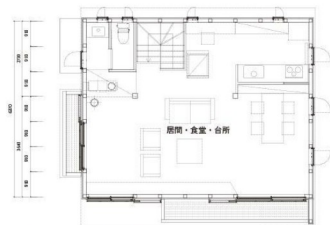
2階リビングタイプの住居。部屋の隅にはグランドピアノが置かれている

園路側の開口部から緑や光、風が入る

118頁〜119頁写真＝傍島利浩

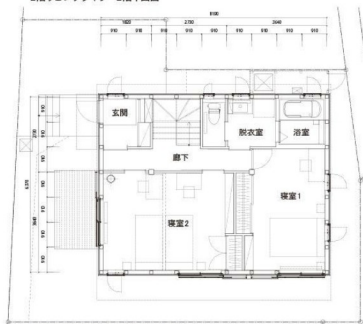
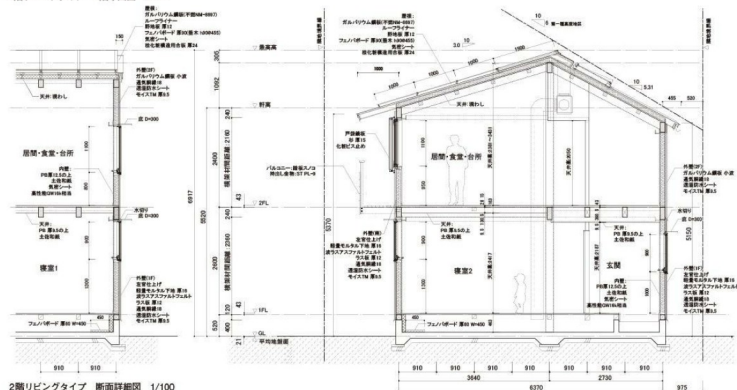
園路を駆け抜ける子供たち。植栽は園路ではなく各敷地に植えられている。各敷地から成長したさまざまな種類の植物が園路を豊かな空間にしている

　話を戻すと、最終的には16棟でいくという決心を相羽建設がして、園路案を都に提出しました。ここに緑があることは大きなポテンシャルになるだろうと。建物の配置も苦労して、何とか南に向くようにしました。日当たりのことなどを考えると正直あと2棟減らしたいくらいでしたが、そうするとまた値段が上がってしまうので（笑）、断面状況がよくない家は2階を居間にしました。2階は天井を高くできるので空間的には2階を居間にして、個室は1階にした方がいいと思っています。でもこの段階では園路を担保する法的なものはまだなくて、アイディアというか理想の段階でした。

迎川　普通の不動産屋さんは避けるでしょうね。権利関係が曖昧なものはトラブルを生むし、訴えられたらどうしようもない。

野沢　園路をどうやって実現しようかと考えている時に、僕の友人に大学で不動産系のことを教えている人がいたので相談してみたんです。すると、「地役権」というものがあると教えてくれました。例えばAさんの土地に行く時に、どうしてもBさんの土地を通らないといけない場合がある。土地を利用されるBさんの土地を承役地と言い、利用するAさんの土地を要役地と言います。このように、他人の土地を自己の土地の便益に供する権利＝「地役権」があるそうです。おそらく、誰かの土地を通らないと自分の家に行けないような入り組んだ地域を便宜的に救うためのルールではないかと思います。簡単にいえば人の土地を勝手に通行できる権利ですね。通行以外にも、どうしても他人の土地の下に自分の家の水道管を通させてもらわないといけない場合の引水地役権や、観望地役権、送電線地役権などいろいろ

2階リビングタイプ　2階平面図

配置図

各敷地面積約130㎡のうち約1割が園路（共有地）

2階リビングタイプ　1階平面図　1/150

2階リビングタイプ　断面詳細図　1/100

イメージスケッチ

120頁〜122頁特記なき図＝野沢正光建築工房

あり、紳士協定ではなく永遠に保全される権利だそうです。

この権利を教えてもらい、これで進めてみようということになりました。僕の事務所の石黒が苦労して、Aさんの土地の地役権分はこれ、Bさんの地役権分はこれ、という風に土地の割り当てをしました。園路だけでなく、自動車交通地役権もあります。一人だけうんと土地を持っていて一人だけ地役権を提供しているとなるとその人の土地代がうんと高くなってしまうので、土地の面積はできるだけ同じになるようにしています。

地役権を設定した敷地に植栽は入っていません。全く地役権の設定のない、それぞれの土地から枝が広がって緑のトンネルが生まれています。ですから植物の管理は個人に委ねることもできますが、ここでは造園を担当してくれた方が定期的に来てくれているんですよね。

迎川　住民の皆さんには、緑化基金と、緑化組合費として月1、000円ほど納めてもらっています。そこで集めたお金で年に1回造園屋さんに剪定と消毒をしてもらっています。

園路がつくる快適な環境

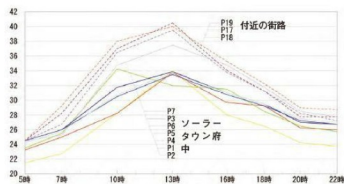
野沢　府中では、首都大学東京の須永修通さんという環境系の研究室が2年間にわたってアンケートや環境調査をしてくれました。

8月のソーラータウン府中の園路と、その隣の道をサーモグラフィで見るとはっきりとした違いが現われています。また、日中13時におけるMRT（平均放射温度：道路や建物など周囲の全方向から受ける熱放射の平均温度）は8℃もの差がありました。隣の道は40℃に達しています。外気が40℃になると暑い空気が入ってくるので窓を閉めてエアコンをつけると室外機で外の気温が上がる。これは我が国で日常的に起きていることですね。でも外気があまり暑くなくて窓を開けてもいいとなると、エアコンが動かない。エアコンが動かないと外の温度が暑くならない。それが府中では起きていました。また、府中の敷地内に散水した後の温度比較も行っていて、散水前後で気温が0・8度下がり、MRTも2℃下がっていました。散水の効果があるのは地面に水が浸透するからです。アスファルトは蒸発してしまうのでこのような効果は期待できません。散水後はエアコンの消費量が下がったことも調査で分かりました。園路は隣の道と比べ温度が低いので、気流が発生して、入ってきた涼しい風が上昇して部屋の中に入っていくという微気候も生まれます。須永研究室の調査で、園路の効果が実証されました。

府中に限らず、あまり車が通らない道であれば園路は実現できなくはないと思います。北欧なら、じゃあ実験してみましょうって実践してしまうんじゃないかと思うんですが、責任が取れないとかで日本はなかなか実現しません。

木造ドミノ住宅

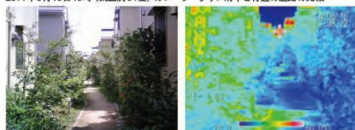
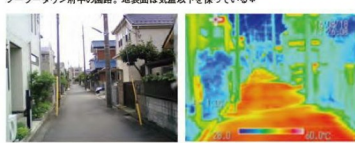
野沢　府中で採用しているドミノ住宅は、基礎の立ち上がりは外周しかありません。構造は外壁と床・屋根だけです。室内の真ん中に軸力柱が1～2本きますが、それ以外はフリーでどう使ってもいい。これを東村山のときにOMソーラーをつけて坪50万円でつくったんですが、その後相羽建設が倒産していないというのは、工務店が坪50万でつくれるということを証明した大きな成果です。

これは迎川さんが努力されて、どういう手順で工事をするか、いつ何を持ち込めば効率的に

MRT（平均放射温度）の日変化＊

観測した地点＊

MRT（平均放射温度）とは、周囲の全方向から受ける熱放射を平均化した温度表示を言う。周囲の表面温度が低ければ気温が高くても快適に感じられる。その放射環境を表現するために、MRTが使われる。
2014年8月に実施された調査では、ソーラータウン府中（P1～7地点）のMRTは、付近の街路（P18-19地点）に比べて、全体的に低いままを保っており、とくに日中の園路のMRTが低い

＊提供＝首都大学東京（現・東京都立大学）須永研究室

2014年8月18日13時（気温約34度）のソーラータウン府中と付近の道路の比較

ソーラータウン府中の園路。地表面は気温以下を保っている＊

付近の街路。アスファルト舗装の表面温度は50℃を超えている＊

園路には雨水を貯めた手押しポンプとベンチのある小さな広場もつくられている。災害時に使うことも想定している

121頁～125頁特記特記なき写真＝迎川利夫

つくることができるか検討された結果だと思います。具体的には、上棟してすぐに使う材料を全部2階に上げてしまうんです。上棟の日は機械があるので材料を簡単に上げられるし、ドミノはどこにも間仕切りがないので資材置き場にできます。使う時に人力で下ろすのは下から上げるよりうんと楽です。

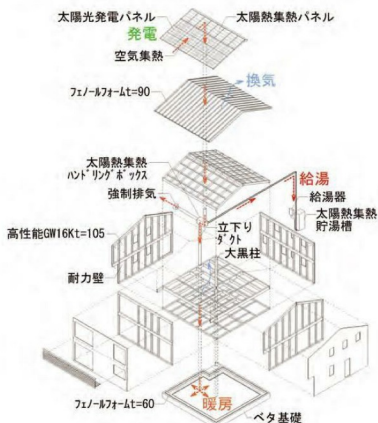
迎川　芝浦工業大学蟹澤研究室で調査したデータがあったので見せてもらったら、実は大工の仕事の37%は木工事以外の仕事、つまり物を運ぶ仕事をしているそうです。

野沢　そんなことをしていると生産性が落ちますよね。たとえばフローリングを張る作業も、熟練の大工でなくてもできる仕事だそうですが、それが間仕切られていると部屋ごとで切って貼らないといけないので時間がかかる。でもこの家は、床を張ってから間仕切り壁を入れますから、端から端まで切らずに張っていける。すると2・5倍くらい生産性が上がるそうです。そういうことの積み重ねです。

外周部しか基礎の立ち上がりがないので、普通の家の基礎に比べると2割位コンクリートの使用量が少なく、CO^2の排出量も2割少ない。総工費2、000万円のうち15%がOMソーラーと太陽光発電ですから、建築材だけだともっと低く抑えられているということになります。ドミノ住宅を知らなかった工務店の人はこの差にすごく驚くようです。頭の中に室内に柱壁のある在来工法があるから、それが前提というか、習慣になってしまっているんですよね。僕らがどうしてそれを切り替えられたかというと、東村山でソーラータウンを手がけた時に知事が坪50万円でつくれと言ったからです。どう工夫をしたら実現できるか考えて、外壁と床の剛性を高めてボックス状にして固め、室内には一切構造壁がない住宅を思いついたんです。

迎川　ドミノ住宅は40坪の場合、午前と午後で1棟ずつ、一日で2棟建ちます。まずハーフユニットバスと大黒柱からスタートします。まとめて柱をレッカーで真ん中に置いて、手分けして建てていきます。中に柱がないのであっという間に柱が立ち、桁に進みます。従来だと棟梁が腕組みして、あれはあっちだ、これを先にやれと差配して建てていくんですが、ドミノはどこから建ててもいいので、簡単にどんどん進む。腕組みしている人がいなくてみんなが動いています。最後は湿気が上がらないように屋根にルーフィングを敷いて垂木を打ち、垂木の間に断熱材を入れて、その上にもう一回垂木を敷きます。これで約4時間です。

金具は使っていますが、部分的です。金物構

木造ドミノの建て方
①基礎の立ち上がりは外周部のみ
②大黒柱を建て、外周部の柱を建てる
③梁を掛け、2階床を組む
④小屋組
⑤完成。上棟まで4時間程度

木造ドミノ住宅の構成
木造軸組み工法（在来工法）をベースに、構造上有効な耐力壁の配置を建物の外周部のみに集約することで、内部の構造体は大黒柱のみのがらんどうな空間。スケルトンとインフィルを分け、間取りの変更や設備の更新がしやすい。太陽光発電と換気、給湯のシステムを組み合わせることで環境性能の高い住宅を実現

法も考えたんですが、金物会社が潰れてしまったらメンテナンスができなくなってしまいます。地域になじんだ在来のつくり方なら、仮に相羽建設が潰れても別の工務店が後の始末を引き継いでくれる。住宅には時間のデザインを考える必要もあります。

工期は4回に分けて、工期が終わるごとに職人と設計者を集めて検討会を開きました。改善の余地がないか。大工さんだけではなくて、建具屋さんや設備屋さん、関わった職人さんたちみんなに来てもらい、アイディアや意見を言ってもらって、みんなでより良くしていこうという目的でした。

ドミノ+OMでエネルギーの消費を抑える

野沢　屋根には太陽光発電パネルとOMの集熱パネルを取り付けています。これで室温と給湯はほぼ賄えています。予算も限られていたし、超高性能な断熱材を使っているわけでもありませんが、Q値は1・9W／㎡k、UA値は0・53W／㎡kで熱損失を抑えられています。ZEHの値基準における一次エネルギーを86％削減し、OMを加味すれば100％の削減率にできます。エアコンは、LCCM住宅(ライフサイクルカーボンマイナス住宅)認定を受けるには高性能エアコンの設置義務があったためやむなく設置しています。

迎川　1棟につき2台設置が義務付けられていたのですが、実際はほとんど使っていないそうです。猛暑の時はつけることもあるようですが、取材で伺った際室外機の周りの緑が枯れていなくて緑のままでした。あまり長時間は使ってないんでしょうね。

野沢　2017年にLCCM住宅として認定を受けた住宅は50棟だったんですが、なんとそのうち16棟がソーラータウン府中のドミノ住宅でした。これも須永研究室が調査してくれたことですが、一般住宅のエネルギー消費量は冬が一番高い。他の高性能な工業化住宅は一般住宅よりはエネルギー消費量は低いですが、ソーラータウン府中はそれよりさらに低い。普通の構法に慣れた大工がつくった住宅が工業化住宅を凌いでいるんです。つまり日本の大工技術は信頼できる。室内に構造壁がなくて断熱材を外側でグルっとまけるというのも、この結果に影響していると思います。

夏はOMソーラーの威力で太陽エネルギーでお湯が取れるからガスや電気でお湯を沸かさなくていい。夏は一般住宅も高性能住宅も、エアコンを使うのでエネルギー消費量が同じくらいになっていますが、府中は低い状態を保っています。

迎川　府中は水道、電気、ガス代合わせて、1カ月で大体8、000円程度で、一般住宅に比べると14、000円分も安く済んでいます。エネルギー消費量も半分以下で、CO_2の排出量は78％も少ないんです。

住宅は社会財

野沢　住宅というのはAさんのためにつくっても、Aさんのものではなく、社会財です。Aさんがいなくなったら Bさんが住むと思ってつくらないと、Aさんがいなくなった時に家は壊されて当然ですよね。でもそこには何千万円というお金と膨大な資源が使われています。Aさんがいらなくなった時にBさんが使えるようにしておかない家というのは犯罪的じゃないかと僕は思います。趣味は後から住む人が持ち込めばいい。個人で家をつくれという話になった途端に、各々が勝手な家をつくって勝手に壊す。家は相続だけが問題ではなく、習慣が問題だと思います。

坪50万円でOMが付いた家をつくるというのは驚異的ですよね。ドミノ住宅を他の工務店でつくろうとすると坪80万、90万、下手すると100万かかってしまいます。相羽建設のように、合理的な手順で合理的につくっていないからです。同じものでも高くなってしまっている限り、安いパワービルダーの住宅には勝てません。でもそういう家は30年くらいで壊される。商売的には壊してまた建てたらいいという考えがあるのかもしれないけど、それをやっている限り日本の社会は絶対豊かになりません。巨大な使い捨てをずっと続けているわけですから。

オランダのニコラス・ジョン・ハブラーケンという人が、1960年代にすでにオープンビルディングシステムというストックとしての住宅を提唱していました。公営住宅をつくるときのルールとして、利用者全体が決定する部分の「サポート」と、特定の利用者のみが決定できる部分の「インフィル」で分けるということです。スケルトンインフィルの元となった考え方です。それこそがこれからの社会財としての住宅のつくり方だと考えています。

第二部　緑が街を豊かにする

一本の木が時間を繋ぐ

迎川　もう45年も前のことですが、僕が学生の頃、『都市住宅』という雑誌をよく読んでいました。当時この雑誌のテーマの一つは、人が集まって住むということで、それを「集住体」と呼んでいました。そこから次第に、やっぱり緑がないといけないだろうと「集緑体」という言葉がつくられて、集住体と集緑体は一体の概念だということになりました。今回、『住宅建築』で紹介されている家はどれも緑が豊かですよね。当時定義されたことが、今実証されているようにも感じました。

僕はまちづくりがしたくてこの仕事をしているんですが、始めた当初は宮脇檀さんにまちづくりを教わりました。

野沢　ハウスメーカーからの依頼で住宅地をつくった建築家は宮脇さんが最初です。作品として住宅をつくるだけではない人になった。

迎川　東急や積水ハウスに宮脇スクールがあって、社内から選ばれた人が宮脇さんに教わりながらまちづくりをしていました。

野沢　当時は、宮脇さんはなぜそういうことに関わるのか、ハウスメーカーの住宅地をつくることにどういう意味があるんだろうと思ったけど、今考えると大事なことをしていたんだと思います。

迎川　そうですね。僕は初めOM研究所にいて、当時横には伊礼智さんがいました。奥村昭雄さんが所長で、永田昌民さんが副所長でしたが、当時は実質的には永田さんがほとんど面倒を見てくれていました。その頃に相羽建設から東村山の久米川にOMソーラーのまちをつくりたいという相談がありました。永田さんは、「まちには変わっていくものと変えてはいけないものがある。そのことをちゃんと考えられる人間じゃないとまちなんかつくっちゃいけない」と言われて、変えてはいけないものの一つは鎮守の森だとも言われました。まちに鎮守の森がなくなってから住宅地に人通りがなくなり立ち話する人も道で遊ぶ子供もいなくなった。だから鎮守の森を必ず設けなさいと。

「ソーラータウン 久米川」（2002年）
設計＝OM研究所＋永田昌民＋伊礼智＋相羽建設　施工＝相羽建設

上写真／道の奥に大きなケヤキの木が見える
中写真／お祭りの様子。背景にはいつもケヤキの木があった
左写真／豚の丸焼きをしたことも

相羽建設は東村山市久米川町に19戸の住宅地を計画していました。永田さんは、鎮守の森のようなシンボルを設けなさいと言われました。そこで植えたのが大きなケヤキの木です。ケヤキの木の下で本を読んだり縄跳びをしたり、誰かとケンカしたりした思い出ができる。そこで育った子がいずれ巣立ち、お正月やお盆に里帰りした時に、自分の子供に「お母さんはあなたと同じくらいの時にこの木の下で遊んだんだよ」と話す。そういうふうに時間を繋げていくことがまちの機能にはある。そしてここで育った子がこのまちに戻ってきて鎮守の森（大きなケヤキの木）を見た時に、ああ帰ってきたなという気持ちになれる。そういうものをもたないまちは、根無草になっちゃうんだと永田さんに教わりました。

最初はケヤキを道に植える予定にしていました。公道でしたが、通り抜けができない道でその住宅地の車くらいしか通らないから大丈夫だろうと思ったんですが、市役所は許可してくれませんでした。葉が落ちていろんな文句を言われるからダメだと。道に植えたいなら、ここを私道にして自主管理にしてくれればいいと言うんです。でも私道にすると道の下の下水や水道管の管理もすべて団地の人たちがしないといけなくなります。

仕方なく、道に植えることは諦めて、隣の地主さんのところに植えさせて欲しいと頭を下げて植えさせてもらうことができました。

ここは出来てからいろんな取材が入っていますが、どのカメラマンも家を撮らずに子供ばかり撮るんです（笑）。ガキ大将もいるし、みんな道端で遊んでいます。まちにはお祭りがないとダメだと、お祭りもつくりました。ソーラータウン府中と同じように、1年目は僕らが全部仕切って、2年、3年とだんだんフェードアウトしていき5年以内で抜けるようにしています。初めにいろいろ教えておけば、2年目には半分くらいのことは住民たちでできるようになり、5年経てば住民だけでできるようになります。お餅つきをしたり、バーベキューをしたり、豚の丸焼きをしたりしたこともありましたが、これは保育園の園長先生に怒られてしまいました（笑）。お祭りの時には必ず背景にケヤキの木があります。

でもある日突然、そのケヤキが切られてしまいました。その土地を相続した人が土地を売ってしまい、土地を買った開発会社がこんな木は邪魔だと切ってしまったんです。風景がガラッと変わってしまいました。

ケヤキを植えさせてもらっていた土地の所有者が変わり、ケヤキが伐採されてしまった

野沢　人の土地だから仕方ないよね。やっぱり私道にしてでも道に植えるべきだったんですよ。我々が公に任せてしまうからダメなんだと思います。公に植えられている木が丸裸にされてしまうのは、落ち葉が困ると文句を言う人がいるからですよね。文句を言うのは公じゃない。そこを歩く人です。そういう人がいるから公が切ることになる。

それと、道路で遊ぶ子供というのはいいなという思いと同時にちょっと悲しい気持ちもあって、道が園路になっていたらどれだけいいだろうと思うんです。宮脇さんの関わった住宅地は公を説得できたのか、道路がアスファルトではないところが多いですよね。住宅に限らず、普通、敷地内はある舗装ができても、その先の歩道はアスファルトになってしまう。本当は歩道まで同じ舗装にできたらいいのにと思うんですよ。境界標を打っておけば問題ないはずなんですが、結局歩道は歩道の素材になってしまうんですよね。

迎川　日本の各行政庁は道路の標準図を持っていて、基本はそれに従わないといけないことになっていますね。僕は、歩道付きのような大きな道路は別として、住宅街にあるような道路は、真ん中を低くして、水を真ん中に集めるほうが絶対いいと思っています。今の日本の道路だと、車が通ると人にバシャンと水がかかって

しまいますよね。真ん中に水が跳ねても、車にかかるだけで人にはかからないで済みます。

野沢　ヨーロッパの街路は中央が低くなっているところが多いですよね。

10年後の風景を描く

迎川　永田さんからもう一つ言われたことは、造成段階で木を植えなさいということです。緑がないのに、ここは緑が豊かになりますと言っても誰も信用してくれません。また、相羽建設は売り建てという方式を採っています。プランは出来ていて、お客さんが購入を決めたら実際に建てていくという方式です。何も植わっていない更地を見せれば、駐車場が2台分欲しいから木は必要ないと言う人が出てきてしまいます。でもすでに植えてあれば、残念だけど車は1台しか停められないということになります。それで実際に先に植えてしまったのですが、みなさん1台分の駐車スペースで済んでいます。

　永田さんは、建築をデザインしても家だけだとカッコ悪い。僕らは10年後の風景を想像して家を設計しなくてはいけないと言われました。シンボルツリーは家の屋根の高さまで育ってきて初めて風景としてバランスが取れるから、そういう10年後の姿を描きながら設計をしなさいということで、この団地もそういうことを考えてつくっています。実際に木が徐々に育ち、軒の高さくらいまで大きくなっています。

「向こう三軒両隣り」

迎川　次につくったのが西所沢の「ソーラータウン西所沢」です。田中敏溥さんと一緒につくりました。東村山を田中さんが見に来て、永田さんがうらやましい、自分もつくりたいとおっしゃっていました。その後所沢で土地を入手できたので、田中さんに一緒にやりましょうとお願いしました。

田中敏溥 著「向こう三軒両隣り」
（復刊ドットコムより2019年に復刊）

　田中さんはまちづくりのことをずっと考えてこられて、まちとはどうあるべきかまとめた『向こう三軒両隣り』（2005年、インデックス・コミュニケーションズ）という本があります。この本を使って、こういうまちをつくりませんか、一緒に住みませんかと営業を兼ねて勉強会を開きました。本にはこうあります。

　「わずらわしさが顔を出す。昔とは違った形のさわやかな新しい形を見つけたいのです。特に少子高齢化と向き合う、日本のこれからの家づくりにはとても大切なことだと思っています。その思いを持って、お互いの心もようと利害が微妙にからまる中で、折り合いをつけながらさわかに感じる家、まちをつくり続けようと思う。自分だけでなく、みんなのことも考えながら。一軒だけでなく、まち並みのことも考えながら。今日だけではなく未来のことも考えながら家のことを考える。そういうまちをつくっていきます」。

　じゃあどうやってつくっていったらいいのか。たとえば道に対して家々を開いて道路を含めてまちのリビングにしていこうと田中さんは言われています。府中の園路もそうですよね。気持ちよく過ごせる場所を外部に求めていったらいいんじゃないか。それを実践したのがソーラータウン西所沢です。

　初めは、現在よりも小さい規模だったのですが、造成工事が始まると、奥に土地を持っている地主さんがやって来て、この土地を買ってくれないかと相談されました。そこでその土地を買い取り、そこは植木畑だったので植わっていた木をそれぞれの家に植えていくことにしました。田中さんと木を選び、大きなコブシの木を見つけました。コブシは桜よりも先に花が咲くので、プリマヴェーラと名付けてまちに春を届ける木ということで、団地の入口に植えました。この木が決まれば生垣も春を伝える木にしようとマンサクを選びました。マユミの木も見つけて、二人で大喜びしました。きっと宮脇さんが何か言いたいことがあるんだ、あれだけまちづくりを愛していた宮脇さんがこのまちにも生きてくるだろうと、もう一つの入口にマユミの木を植えました。ここも造成段階で植えました。

　ここもお祭りをつくって、道路の勾配を利用して素麺流しをしたり焼肉をしたりいろんなことをして楽しんでいます。やっぱりまちにこういう祭りがあるとみんな仲良くなります。

「快適さ」を仕組みとして理解する

迎川　7、8年前、大きな椅子が似合う家をテーマにしたコンペがありました。その案を見て、若い人たちから出てくる案がどれもまちに背を向けていたことに愕然としました。まちに対して閉じて、中庭をつくって内側へ開く、その中庭を椅子に座って眺める、それが気持ち

「ソーラータウン 西所沢」
設計＝田中敏溥　施工＝相羽建設（2017年）
上写真／シンボルツリーとしてコブシの木を植えた　下写真／模型

いいんだという案ばかりで、今の建築の人の価値観はそっちに向かっているのかと危機感をもちました。道に対して窓もないので、木が植わっていても、微気候も活用できず、風も通らないのでエアコンに頼るしかない。これっておかしいと思うんです。

沖縄も変化が起きているそうです。沖縄は台風が多いので、風を避けるためのフクギという木が家の庭に道路沿いに植えられてきました。道に対して木陰をつくってくれるので、歩く人が涼しく散歩ができます。ところが近年はコンクリートやブロックで家をつくるようになり屋根も瓦ではなく陸屋根になりました。建物が変わって台風の心配がなくなり、フクギが必要なくなって風景が変わってしまったそうです。

こういう事態は、現在日本各地で起きています。エアコンで簡単に温度調整できるようになって簡単に快適な温度をつくれるようになると、閉じた家が平気でまち並みに建つようになる。これがかっこいいんだと勘違いする人も出てきてしまいます。

環境技術はちゃんと伝えていかなければ伝わりません。府中のコンペに参加してくれた学生には、東村山のソーラータウンを見てもらったり、大学のキャンパスで自分の気持ちいいと感じている場所をサーモカメラで撮ってみようというワークショップもしたりしました。体育館に繋がる道が気持ちいいなと思っていて撮って確かめる。すると確かに快適な温度環境になっていました。学生はちゃんと体感していて、そういう感覚はもっているので、それをしっかり分析することが大事です。

まちづくりのプロジェクトが始まる時、いつも宮脇さんの団地と川崎の民家園に足を運びます。府中のプロジェクトの時は学生も連れて行きました。団地と道路のあり方や、エアコンがない時代の人たちの暮らし方、気候とどう繋がって生きてきたか、毎回行くと発見があります。これを見たことも園路への刺激になったのではないかと思います。

建築をやる人は、ZEHも大事ですが、まずは微気候という考え方を理解することが必要です。家の周りの温度を下げればエアコンをつけなくても済むし、微気候をつくって風が入ってきたほうが気持ちいい。

野沢　昔の家は開いていたでしょう。吉田兼好の「夏をもって旨とすべし」という言葉がありますが、じゃあ冬はどうするかというと我慢するしかない。それは辛いですよね。だから冬に我慢しなくても済むようにとアルミサッシが出来たり、断熱材を入れるようになったんだと思います。でも熱源の問題は永遠の問題で、閉めたら暖かくなるかというとそういうわけではない。いまだに局所暖房が多いのではないでしょうか。

家が閉じていったのは冬への恐怖があったからだと思います。でもその結果、夏も閉じることになってしまった。そうなるとエアコンを使う以外にない。エアコンを使えば夏も快適だということになって、外がいらなくなった。でもエアコンを使えば外に排熱するので外が暑くなる。外がアスファルトだとエアコンの排熱がなくても相当暑いので、耐えられないほどの暑さをつくってしまったわけです。安全のためと言って舗装してある道路は、考え直さないといけないと思います。

住み続けられること

野沢　家が建て替えられないためにどうしたらいいかということをずっと考えているんですが、実は緑化もすごく影響していて、周りにたくさん木が生えていることが大事だと思います。家が壊されないと緑化が進む。緑化が進むと家が壊されない、そういう応答関係があるんじゃないかなと。

でも先ほどお話ししたように、家の中は自由に変えていいんです。ヨーロッパの人は、80年、90年、100年の家に住んでいる。なぜ住めるかというと、家の中の設えがないからです。とくに公的な住宅は家の中をつくっていません。アトリエ5が設計した「ハーレン・ジードルンク」（スイス、1961年）や、ヨーン・ウッツォンの「キンゴーハウス」（デンマーク、1961年）もすごくきれいな建築ですが、中はひとつもつくっていなくて、住人たちが持ち込んだものを飾ったり造作したりして、個性豊かに住んでいます。日本の住宅は、住宅そのものが設えというのか、要はバラックに近いものです。たとえば町家のような民家は間取りそのものが設えで家具のようなもの。習慣として中も設えないといけないというのがあるんですね。でも、大きなシェルターの中で分けるという風に考えてつくらないと、設えがそのまま建っているみたいになってしまう。そうなると壊されてしまうということだと思います。

迎川さんが紹介されたような住宅地はすごくいい住宅地だと思うけど、一方で、60年前に先輩たちがつくった団地と同じで、住宅地も何十年後には子供たちも大きくなって高齢化していきます。そういう住宅地に次の人がちゃんと住んでくれるのかどうか。実は住宅地は坂道が多いところを開発していることもあるから、永田さんの言っていた10年先どころか、30年先、40年先に、次の人がそこに住んでいけ

居間・食堂

台所

湖畔沿いのやや起伏のある敷地に建つ

「キンゴーハウス」設計＝ヨーン・ウッツォン（1961年）
レンガと木を使った60戸の平屋建住宅。それぞれの住宅には中庭が設けられている。1787年に国の文化財に指定されたため外部の改変は基本的にできないが、内部の造作は可能で、住まい手それぞれの個性が現われている　写真＝藤本将弥

る住宅地でなければならないと思います。いずれ人口が半減するという時代が来ます。その頃にはもう僕らはいないでしょうけど。その時に、廃屋の町みたいなものが現われる可能性がありますよね。住宅は短命だから壊せる、ということになるのか。少なくとも、言い方はきついかもしれませんが、いわゆる商売で建てている家は今後どうなるんだろうと思いますよね。

一軒の家から変えてゆく

会場　私が住んでいるエリアは高齢化していて、1人や2人暮らしの人がすごく多いんです。その一方で壊された家の土地を3つくらいに分けて、そこに建売住宅が建って、入ってくる人もちょっといるという状況です。そういう状況で自分がこれから心地よく暮らしていけて、将来的に誰かに手渡して住んでもらえるようなエリアリフォームというのか、そういうことを考えていくべきではないかと思うんです。

野沢　今、基本的に住宅を個人のものとしてつくることが普通ですよね。建築家も工務店もそのほうが商売できるということもあるでしょう。だけどそれで生まれる無駄というか、辛さ、貧しさをみんなで考えていかないといけません。ある成熟がない限り、いわゆるパワービルダーは土地を細分化してまちを壊していく。シンボルツリーの話も、僕は一本のシンボルツリーではダメだと思うから、それをどう社会全体が理解していくかが大事ではないかと思います。たとえば道路を緑化してもいいんじゃないかという考えがあっても、公に道路の落ち葉を清掃しろ、落ち葉ですべって怪我したから責任をとれと言う人がいるわけですよ。その人たち、つまり僕ら自身、社会が何らかの成熟がないかぎり、そういうことは起きてしまう。

でも、勇気のある個人になって、その一軒の家だけでも何かを始めれば、それはメッセージになると思います。僕の知り合いの都市計画家は、自分の家の庭をほとんど開放して、小さなお店もつくっています。防犯のことを考えると普通は閉じるでしょうが、公園のように誰でも出入りしています。庭の木は外の道路に向かって大きく跳ね出して茂っています。最初は電力会社と電話会社が文句を言ってきたけど最近はあまり文句を言わなくなったそうです。

彼はその木のことを庭から生えて街路の方に向いているから街路樹じゃなくて「庭路樹」だと言っていました。その家の木の下の道路だけが涼しい。庭も公開して、自分で共を引き受けているわけです。今の社会から見れば変な人ですよね。だけどそうやって少しずつそれぞれが共を引き受けることができれば、実は相当な仲間を全員が手に入れていると言えるのかもしれません。そういう意味では自分の家を開く、自分の敷地で何ができるかを考える。もう一歩進んで、それがネットワークになってきたら公共にも働きかける。街路樹を切るな、と。あるいは道路らしくない道路をつくろうとか、そういうところまでたどり着くことを目標にしないと、管理はさせる、自分は閉じていく、だけど開いた社会がある、ということを言っている限り何も起きません。家は自分のものでないというところまで考え方を開くというか社会化する。そういうふうに少しずつ我々が考えを成熟させていかないとどんどん苦しくなっていくと思います。

その人がその家からいなくなったら別の人が入る。ドミノ住宅はそういうストックになり得るんじゃないかと思っています。東村山は定期借地権なので、なお可能性があります。70年はこの家が建ち続ける可能性があるし、定期借地権が永久になる可能性もあります。プロジェクトに関わった人たちは70年後はもうほとんどいないでしょうから、その時にどうしようかとなった時に、成熟した街になっていればこのままでいいじゃないかとなる可能性もありますよね。そうやってやっと始まるのかなと思います。

東村山や府中で新しい住宅地をつくるということを試みましたが、すでにある家の間に園路のようなものを入れていく、そういうことが次のプロジェクトとして動いていけば、その社会はすごく可能性のある社会だと思います。

迎川　埼玉県の新座市では、昔は農家の庭先を繋いだ人しか通れない道があって、その道が登下校の道になっていたそうです。そこを通ると、子供が危ないことをしないか、変な人が居ないか、農家の人たちの目があって守ってくれるし、登下校の時にお茶やおまんじゅうをくれることもある。そんなふうにまちが子供たちを育てていたそうです。新座を拠点に家づくりをしている増木工業さんは、そういうまちづくりを再生させようと今一生懸命取り組んでいます。そういうことを考えている人もいます。

野沢　建築の仕事も改修の仕事が多くなってきているし、誠実な工務店はそういう仕事の仕方を始めています。若い建築家たちも、リノベーションや、場合によっては減築したり、駐車場だったところを緑にしたり、そういう仕事をしている人もいます。変わってきていることもありますが、相変わらず何も考えずにつくっていく人たちがいて、その商売は衰えつつあるのかもしれないけど、とくに東京の郊外ではまだ続いています。

一人一人の人がどれだけ自分たちで引き受けるかにかかっています。国がCO_2削減を掲げて、実際に減ったかというとむしろ増えている。個人が突っ張っているうちは無理でしょうね。僕たち一人一人が動かないと、本当の「共」は生まれないと思います。

文責＝編集部

野沢正光（のざわ・まさみつ）
1944年　東京都に生まれる。1969年　東京藝術大学美術学部建築学科卒業。1970年　大高建築設計事務所入所。1974年　野沢正光建築工房設立。現在、横浜国立大学非常勤講師。「熊本県和水町立三加和小中学校」平成27年度第19回木材活用コンクール農林水産大臣賞、「愛農学園農業高等学校本館」平成26年度耐震改修優秀建築賞、「木造ドミノ住宅」2007年グッドデザイン賞、「立川市庁舎」2012年日本建築学会作品選賞ほか多数受賞。著書に『パッシブハウスはゼロエネルギー住宅』（農文協）、共著に『居住のための建築を考える』（建築資料研究社）など。

迎川利夫（むかえがわ・としお）
1952年　神奈川県に生まれる。1977年　武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業。マツモト建設、OM研究所を経て、2001年　相羽建設常務取締役。2008年　木造ドミノ研究会事務局長。「ソーラータウン久米川」「ソーラータウン西所沢、むさしの-iタウン」「ソーラータウン府中」「ソーラータウン多摩湖町」などをプロデュース。2002年「ソーラータウン久米川」で公共の色彩賞、2006年「東京町家」でエコビルド大賞、2007年「木造ドミノ住宅」でエコビルド大賞、グッドデザイン賞、地域住宅計画賞。

追悼　長谷川堯さん

昨年2019年4月17日、建築評論家・長谷川堯さんが逝去されました。「建築評論家」という肩書きはこの人のためにあるのではないかと思えるほど、言葉で建築を表現しつづけた生涯だったと思います。それらの著作を長谷川さんとともに生み出してきた編集者の方々に追悼の言葉をいただきました。また、最初の著書『神殿か獄舎か』と最後の著書『村野藤吾の建築　昭和・戦前』の書籍解題、そしてこれらの著書が今なお読まれる所以を、建築史家の方々に分析いただきました。

（伏見唯／編集協力者）

長谷川堯・著書目録

『神殿か獄舎か』（単著）　1972年、相模書房／2007年、鹿島出版会（SD選書）
『建築——雌の視角』（単著）　1973年、相模書房
『都市廻廊　あるいは建築の中世主義』（単著）　1975年、相模書房／1985年、中公文庫
『建築の現在』（単著）　1975年、鹿島出版会（SD選書）
『日本近代建築史再考——虚構の崩壊』（共著、村松貞次郎・近江栄・山口廣ほか）　1975年、新建築社
『建築をめぐる回想と思索　対談集』（単著）　1976年、新建築社
『洋館意匠』（単著）　1976年、鳳山社
『建築有情』（単著）　1977年、中公新書
『洋館装飾』（単著）　1977年、鳳山社
『建築光幻学　透光不透視の世界』（共著、黒川哲郎）　1977年、鹿島出版会
『建築旅愁』（単著）　1979年、中公新書
『生きものの建築学』（単著）　1981年、平凡社／1992年、講談社学術文庫
『日本の建築 明治大正昭和　4　議事堂への系譜』（共著、村松貞次郎企画編集）　1981年、三省堂
『チュビズム宣言　Vol.1』（共著、谷川俊太郎・前田愛）　1982年、PARCO出版
『建築逍遥——W・モリスと彼の後継者たち』（単著）　1990年、平凡社
『建築巡礼——ロンドン縦断　ナッシュとソーンが造った街』（単著）　1993年、丸善
『日本ホテル館物語』（単著）　1994年、プレジデント社

建築評論の道へ

加藤正博

若き編集長、長谷川堯に出会う

僕は大学を卒業する少し前の11月ごろから、就職先の『近代建築』の発行元に出入りしていました。そこでは「出社しなくていいから、東京にある設計事務所を全部まわってこい」と言われ、半年ちかくかけて、東京中の事務所を訪ねて進行中のプロジェクトを聞いてまわったんです。それで、4月に正式に入社するときに、これから建てられていく建築をまとめたノートを見せたら、「来月からおまえが雑誌をやれ」と言われ、入社してすぐに責任編集を担うことになったんです。ちょうど、それまでいた人が辞めるタイミングだったからなのですが、無茶苦茶な話だと思いましたよ。

そんな経緯で、新しい建築を誌面に載せていたのですが、しばらくして最初になにか特集記事を入れたほうがよいなと思っていた頃に、堯さんに出会いました。高瀬忠重、相田武文、渡辺武信などの1930年代生まれの人たちと、堯さんは「Space 30」というグループをつくっていたのですが、そういった人たちと一緒に飲んでいる時に知り合ったんです。

新人作家の巻頭論文

建築というのは技術やデザインだけでなく、バックボーンとしての思想や時代性から生み出されるものです。僕は、卒業論文で、建築運動におけるヒューマニズムについて書いたくらい、そういったことに関心をもっていました。ただ、建築家が建築を語ると、どうしてもテクノロジーに片寄りがちになることが多いと思います。たとえば、家庭向けの医学書を、医者が書いたのでは、分かりやすい本にはならない。ノーベル物理学賞をとった朝永振一郎が、物理学の内容を一般読者に向けて「光子の裁判」（1949年、『量子力学的世界像』所収）という小説で表現したように、専門的な内容を分野を超えて伝えることが大事だと思っていました。初めてそれらしき人に出会えたので、あるとき堯さんに、美術評論ではなく、建築評論をしないかと聞いたら、「やる」という返事でした。

新人ですから、最初は時間をかけて。こちらも堯さんをどう売り出すかを考えました。やるなら一か八か賭けてみようと思い、巻頭論文にしました。右側に写真、左側に原稿という構成で、テキストを誌面の上から下まで流す1段組。それを24頁。3カ月にわたっての巻頭論文でした。それが、「日本の表現派——大正建築への一つの視点」（『近代建築』1968年9月～11月号、『神殿か獄舎か』所収）です。

対象をつかんで、たどり着いた言葉

長谷川堯は建築評論家になり、大学教授（武蔵野美術大学）にもなっていきますが、斬新な作品があったからこそそのキャリアだと思います。その一つが「神殿か獄舎か」、名言ですよ。堯さんが大正の肝としてつかんだのが、大杉栄です。東京外国語学校を出て、『昆虫記』などを訳した

『田園住宅　近代におけるカントリー・コテージの系譜』（単著）1994年、学芸出版社
『建築の多感　長谷川堯建築家論考集』（単著）2008年、鹿島出版会
『建築の出自　長谷川堯建築家論考集』（単著）2008年、鹿島出版会
『村野藤吾の建築　昭和・戦前』（単著）2011年、鹿島出版会
「建築有情――長谷川堯先生を偲ぶ会」配布冊子を参照

長谷川堯氏　写真＝相原功（2006年撮影）

長谷川堯（はせがわ・たかし）
1937年 島根県に生まれる。1960年 早稲田大学第一文学部卒業。卒業論文「近代建築の空間性」を『国際建築』に発表。1977年 武蔵野美術大学助教授に着任。1982年 同教授を経て、2008年 同大学名誉教授。1975年『都市廻廊』を中心として毎日出版文化賞、1979年 『建築有情』でサントリー学芸賞、1986年 「日本近代建築史再考に関する評論活動」で日本建築学会賞（業績）受賞。2019年 逝去。

翻訳家ですが、アナキストでもある。彼を通して、堯さんは建築を見ようとした。大杉はとんでもない人間だと思いますよ。妻と一緒に処刑されるくらいのことをしたのですから。ただ、そこまでの人間だからこそ、究極的なところまで思考が進み、人間のものの考え方と建築物とが、どこかで合致してくる。そして、堯さんに「神殿か獄舎か」という言葉を生ませたのだと思いますね。

神谷五男の作品集をつくるときに、その題をどうするか、という話になりました。ある市民会館をつくる時に木がたくさん植わっていて、神谷は「雑木林」だと言う。それを受けて、堯さんが付けたのが、「樹草への恋慕」（『近代建築』1979年10月号）。堯さんには、対象をつかんで、言葉を突き詰めていく、物書きとしての上手さがありました。（談）

かとう・まさひろ／ギャラリー珈琲店古瀬戸代表
聞き手・文責＝伏見唯

建築雑誌の黄金時代に

小川格

彗星のように現れた論客

1960年代、日本の近代建築は空前の繁栄を謳歌し、それに歩調を合わせて建築雑誌も次々に創刊し部数を伸ばしていた。長谷川堯が彗星のように現れたのはちょうどそんな時代だった。

長谷川が建築雑誌に初めて登場したのは『国際建築』。卒業論文「近代建築の空間性――ミース・v・d・ローエとル・コルビュジエ」が1960年8月〜1961年2月号まで7回にわたって掲載された。その後小さな評論を執筆していたが、突然『近代建築』1968年9月〜11月の3回にわたって「日本の表現派――大正建築への一つの視点」という大作を発表する。若い編集長・加藤正博の強いすすめに応じて書かれたものだが、雑誌の巻頭に大きな活字で1段組で、しかも思いっきり大きな挿絵とともに掲載された。これに注目した近代建築の研究者・村松貞次郎（当時、東京大学生産技術研究所助教授）が未知の長谷川に激励の手紙を書いたのは有名な話だ。

興味深いのは、その1年後、1970年の1月にその村松が日本建築学会の『建築雑誌』を大正建築の特集号として、長谷川に寄稿を求めたことである。村松の要請に応えて長谷川は「大正建築の史的素描――建築におけるメス思想の開花を中心に」を執筆する。村松は1969年、1970年と『建築雑誌』の編集委員長を務めていたため、大正建築の特集号を長谷川のために企画したものにちがいない。長谷川はその勢

いをかって翌1971年『デザイン』11月、12月さらに1972年3月号にわたって「神殿か獄舎か」を寄稿する。

長谷川堯と相模書房

長谷川のこの充実した論攷群に目をつけたのが神子久忠であった。かれは、新建築社を退社し、相模書房に席を得たばかりであったが、すでに精力的に建築評論集の刊行を始めていた。佐々木宏『20世紀の建築家たちⅠ・Ⅱ』、小能林宏城『建築について』、そして長谷川堯の文章に着目していた。

相模書房は1936（昭和11）年に創業した建築専門書の老舗であったが、社屋は中央区入船の昔ながらの木造家屋で、神子の他には社長と経理のおばちゃんが一人いるだけという本当に小さな出版社だった。

神子は長谷川の大正建築の論攷を中心に編集し、『神殿か獄舎か』（1972年）として刊行すると、続いて、その他の短編をかき集めて『建築――雌の視角』（1973年）を刊行、さらに長谷川が『建築』誌に1973年1年間にわたって「日本の中世主義――あるいは〈都市〉における建築の光景」を連載すると、続いてこれに着手していた。

私は1960年代の最後の4年間、新建築社に在社したあと、1970年に退職したが、数年後神子に誘われて相模書房に入り、『都市廻廊』の編集から手伝うことになった。よく覚えているのは、この本の挿絵のために長谷川の家に本を借りに行った時のことである。

長谷川は今の地下鉄東新宿駅の近く、古い路地の残る一角、木造アパート2階の薄暗い室に大量の本に埋もれて住んでいた。それが、『神殿か獄舎か』のあとがきに書かれている「抜弁天のもるたるながや」であった。

『都市廻廊』（1975年7月）が出版されると、まもなく読売新聞に書評が掲載された（1975年9月15日）。評者は土方定一（神奈川県立美術館館長）。長谷川の著書が建築の枠をはみ出して羽ばたくきっかけの一つになった。さらに『都市廻廊』は、この年（1975年）、第29回毎日出版文化賞を受賞した。ラグビーに例えるなら、編集者たちの巧妙なパスが続いた後、ついにトライに成功した瞬間だ。

その後長谷川は、武蔵野美術大学美術史の講師（1970年）から助教授（1977年）、教授（1982年）と安定した地位につくことができ、出版は、印税もまともに払えない小さな相模書房の手から離れ、次第に大手の出版社へと移っていった。それを象徴するように『都市廻廊』が中央公論社から文庫版（1985年）で出版されたが、それは数年にして絶版となった。

一方、『神殿か獄舎か』は長らく絶版になっていたが、2007年、鹿島出版からSD選書に入れたいので編集を頼むという話が舞い込んで来た。初版の出版から35年たっていた。この再刊は神子と2人で編集にあたることができ、巻末に藤森照信から「長谷川堯の史的素描」という懇切丁寧な解題をいただき、花を添えることができた。相模書房は、2018年佐藤弘社長の逝去とともに店を閉じた。

長谷川の「あとがき」

長谷川は出版にさいして必ずあとがきを書いたが、その最後に自分の住まいを示唆することばを添えることが多かった。

『神殿か獄舎か』（1972年）
抜弁天のもるたるながやにて

『建築――雌の視角』（1973年）
若葉におう西向天神わきのもるたるながやで

『都市廻廊』（1975年）
筑土八幡わきの混苦利ながやで

『生きものの建築学』（1981年）
紅葉の高尾山下の巣にて

『村野藤吾の建築　昭和・戦前』（2011年）
ミシュランの三ツ星効果てきめん、今や老若男女の山女山男で年中混雑する高尾山の麓の、日々老朽化のすすむ我が家の小さな仕事部屋で

こうして「高尾山の麓の、日々老朽化のすすむ我が家」が終の住処となった。

おがわ・いたる／編集者

ある語り部の喪失

中村謙太郎

長谷川堯の思考の道程

私は1988〜1992年、武蔵野美術大学在学中に長谷川の薫陶を受け、その影響もあって卒業後、2010年まで本誌編集部にいた。

といっても、長谷川は造形文化・美学美術史研究室の教授で、私は建築学科の学生だったから、一般的な師弟関係ではない。ただ受講した講義が実に面白く、毎回最前列で聴いていたら顔を覚えてもらい、研究室にも出入りするようになったというわけだ。

当時、長谷川の代表作『神殿か獄舎か』（1972年）は絶版状態だったが、文庫版が入手可能な『都市廻廊』（1975年、相模書房、後に中公文庫より再刊）を通読することで、長谷川の思考の道程＝文脈を知ることができた。

ざっくりまとめると、

1 後藤慶二に代表される〝大正建築〟の豊饒な世界に触れ、それらが有する獄舎的思惟（Defence＝壁を立てる、Dimensions＝内に開く、Detail＝手仕事による装飾）を明らかにする。

2 中世主義者・ジョン・ラスキンの著作と、その影響下にあるウィリアム・モリスが主導したアーツ・アンド・クラフツ運動およびドイツを中心とした表現主義建築に、1のルーツを見出す。

3 2の流れでエベネザー・ハワードが提唱した田園都市と、そこに配置されヴァナキュラーな風景を形成するカントリーハウス群を、1の文脈で評価する。

4 1の後継者として、村野藤吾や今井兼次、浦辺鎮太郎といった手仕事の価値を重んじる現代建築家を位置づける。

このように分類できるのではないか。

そして、1〜4に通底するのは、新しいものが常に正しいという順進史観に対する異議申し立てである。

2000年、神楽坂建築塾という私塾の講義で、長谷川はこう語っている。

「それぞれの時代がモザイクのように組み合わさっている。それがまちの本当の姿であり、歴史の「断面の姿」ではないでしょうか」（『ふりかえれば未来がある』2017年、建築資料研究社に収録）。

この考え方を前提にしなければ、長谷川の発言を理解することはできないだろう。

前川國男のヴァナキュラリズム

私が出会った頃の長谷川は、『神殿か獄舎か』から20年近くが過ぎ、幾つかの記述について再検証する必要性を感じていたようだ。

たとえば、ル・コルビュジエを神殿派の代表格と位置づけ、その弟子にあたる前川國男について「昭和建築の申し子であり、また大正建築の鬼子でもあった」と評していたが、1991年のシンポジウム「現代史における前川國男の位置」においては、「前川國男の建築のつくり方は、一種のヴァナキュラリズムへの隠れた傾斜ではないか」と発言している（『建築文化』1991年9月号、彰国社に収録）。

なぜならば長谷川は、

1 前川はジョン・ラスキンの著書『建築の七灯』の第二章「真実の灯」を読んでヨーロッパ留学を決意。その後も自らの規範とした。

2 前川が師事したコルビュジエもまた、美術学校時代の師であるシャルル・レプラトゥニエを介して、ジョン・ラスキンの影響を受けている。

3 1942年に建てられた前川自邸の、信州の民家のようなシルエットとたたずまい。

といった事由に気づき、前川ならびにコルビュジエの内面にあるヴァナキュラリズム的側面を見出したのだ。

以後、講演がある度、この問題に言及し、2008年に上梓した『建築の出自』（鹿島出版会）で、考察をまとめている。

内井昭蔵の内面に宿る中世主義の精神

『神殿か獄舎か』ではまた、内井昭蔵が設計した集合住宅・桜台コートビレジ（1969年）について、「みごとなピロティの上にのった神々の家をつくりだしただけだった」と酷評している。

しかし2008年に新建築社が刊行した作品集『建築家 内井昭蔵 1933—2002』に寄稿した評文によれば、30数年ぶりに桜台コートビレジを再訪。3つの住戸棟と中央の通路が一つの〝有機体〟と化している様を目前にして、若かりし日の自分が内井の意図を読み取れていなかったことを痛感。次いで装飾を取り入れモダニズムからの脱却を果たした後年の建築群を訪ね回る過程で、内井の内面には、間違いなくラスキンやモリスから連なる中世主義の精神が宿っていたことを確信したという。

このように長谷川の批評活動は、ほとんどにおいて対象を自らの文脈にぐいっと引き寄せて語ることを常道とした。いやむしろ、批評対象を〝依り代〟とし、自らの理想とする建築像、都市像を語り続けてきたのではないか。

現代建築を〝依り代〟として理想像を語る

たとえば本誌1995年3月号に掲載された数寄屋建築家・大石治孝についての評文では、

1 静岡という地方都市に身を置き、地面から湧き上がったかのごとき屋根の稜線でスカイラインを描く、ヴァナキュラリズム的側面。

2 深い軒の出や土庇によって内と外の間に親密な〝グレイ・ゾーン〟を生じさせる空間手法。

この2点に注目することで、明言こそしていないが、大石の内面に獄舎的思惟を見出している。

また、2006年に開催された巡回展「伊東豊雄 建築|新しいリアル」の図録に寄稿した評文では、伊東建築における内部空間の連続性、流動性は、チューービズムの建築美学に通じると指摘している。

チューービズムとは、身体が器官の集合体であるように、空間もチューブの有機的な集合体とすることで、初めて身体的な親密さが獲得できるという、いわば獄舎的思惟から派生した主張である。

長谷川は『生きものの建築学』（1980年）と『チュビズム宣言』（1981年）において、チューービズムの魅力を語っている。

とくに『生きものの建築学』は、その名の通り昆虫や動物の巣を参照しつつ人間にとって相応しい空間を考察するエッセイ集で、今も現役の建築家が愛読書として取り上げているのを散見する。

語り部としての長谷川堯

長谷川は、2008年に大学を定年退職する前後から、単発の執筆依頼を断るようになった。本誌での執筆も2006年頃が最後で、以後は対談やインタビューを編集者が起こす場合のみ引き受けている。

とはいえ、先述の前川國男と内井昭蔵に関する新たな評文は2008年の書き下ろしで、その後も2011年に大著『村野藤吾の建築 昭和・戦前』を上梓。いずれも大ボリュームの労作である。その後も、未発表の長編都市小説に取り組んでいた。長谷川は終生、現役だったのだ。

一方、目黒区美術館のセミナーや神楽坂建築塾など、講演会に登壇する機会は多かった。

村野藤吾は建築行為への原罪意識を抱えていた、という独自の見解も、講演会で初めて披露されたものだ。

建築行為の原罪とは『神殿か獄舎か』以来のテーマで、建築行為自体が自然生態学と秩序に対する犯罪なのだから、建築はもっと謙虚な態度を示さなければいけない。そして、村野もまた、同じ考えの持ち主だったに違いない、と長谷川は主張するのだ。

最後に会った2017年の神楽坂建築塾・公開講座でも、長谷川はこの問題の重要性を、声を枯らし聴衆に訴えかけた。私はその姿に、初めて講義を聞き夢中になった学生時代を思い出した。建築と都市の現状を憂いつつも、いかに建築が芸術として素晴らしいかを、ソフトな語り口で、それでいて情熱的に説いてくれたのが長谷川だった。

長谷川の著作は残されているが、語り部としての長谷川を二度と見ることはできない。それが寂しくてならない。

なかむら・けんたろう／フリーランス編集者

連帯の宣伝へのカウンターパンチ

本橋仁

大正のはじめ。1914年のフランスでは、社会主義者の政治家ジャン・ジョレスが原理的な国家主義者の凶弾に倒れた。彼の棺は多くの坑夫たちの手で運ばれた。その翌年、1915（大正4）年の日本では豊多摩監獄が完成する。ここは後に思想犯として大杉栄、小林多喜二、三木清らが収監される。パリ、モンマルトルの裏側で、大正デモクラシーの華やかなカフェの裏側で起きたこれらの悲劇は、相容れない〈国家〉と〈自己〉の不都合な事実を示している。

獄舎のなかに、人間の「自己」を見出した

それから半世紀の70年代。第二次世界大戦の敗戦と、その後の目覚ましい高度経済成長によって再び日本は明るい時代に突入した。64年の東京オリンピック、70年の大阪万博、72年の札幌オリンピック。目覚ましい経済成長のなかで「日本」という共同体が再び認識されるようになる。田中角栄による国土改造は「建設」によって支えられ、長谷川堯の言葉を借りるなら「古典的体質（神殿をつくりたい！という欲望）」を、建築家は国家との共犯関係のなかで満たしつつあった。こうした「神殿」づくりの建築家の仕事を糾弾し、建築における「自己」を問うたのが長谷川の初期を代表する批評「神殿か獄舎か」であった。この論考の発明は、バラバラに論じられてきた都市と建築、さらに作家とを空間言語で架橋する難題を、思想家・大杉栄の「獄舎」空間体験を通して語ったこと。さらに大正時代の建築家、後藤慶二を通して70年代のカウンターとなる建築家像を提示したことにある。

獄舎と都市！　このセンセーショナルな対比により、長谷川は決して都市の品位を貶めようとしたのではなければ、戦後の建築家が事務所に「都市」を冠したことを侮辱したのでも当然ない。事態は逆だ。建築としての獄舎が、収監される囚人によって身体化される瞬間を発見し、獄舎のなかに「自己」を見つけたのである。さらに獄舎と都市との相似を指摘し、都市への希望を述べたのだ。獄舎に自己を見出した長谷川の高ぶりを、夜の静けさのなか思想犯同士が壁をつたう音を通して交流する様子を書いた次の一文に感じずにはいられない。

獄舎は夜、独房にとじこめられた囚人たちによって逆に占拠されている。建物は彼らの身体としてひろがり、闇の中でそれぞれ身体を結び、監獄を行刑者のものではなく、彼ら自身のものとして歌いあげてしまっている。そのこつ、こつ、という断絶的な音は重なりあって、石の教会堂の中を渦巻くパイプオルガンの音のように、獄舎の中を駆けめぐり、権力が分断した〈連帯〉そのものを回復させる。

思想犯が操る国家への凶器である「声」。国家が不都合なものとして奪った声は、国語としての「声」であり、赤ん坊の喃語（アウーの声）にも似た自己の存在を確認する「声」までは奪うことができなかったのだ。獄舎における声なき連帯により、身体化される空間を獄舎にみつけたのである。

そして、長谷川はこの獄舎の計画を行った「大正時代の建築家」に目を向ける。「神殿か獄舎か」は論考のタイトルであると同時に書籍名でもあり、歴史家としての重要な仕事は同書に所収される「日本の表現派」にある。彼は、未だ浮かばれない存在であった大正期の建築家たちの、伊東忠太以降の庇護者でもあったのだ。大正期の建築家の再評価は、モダニズムへの反省を基にしたポストモダニズムを牽引する木島安史、相田武文、渡辺武信ら同世代の建築家を大いに刺激する。彼らは以前から「Space 30」というサロン的な集いを催しており、長谷川は「神殿か獄舎か」の骨子をそこで初めて話している。彼の話す大正期の建築家の話に、最初耳を傾けた、彼ら若き建築家であった（椙山哲範氏によるインタビューより）。

ユーザー側に立つ建築批評の重要性

建築に「主体」という問題を設定するとすれば、建築家？　あるいは使い手？　であるか。神殿という建築家のイリュージョンと、獄舎という囚人の手の感覚を感じる、この文章の背後には、長谷川の師である美術史家・板垣鷹穂の影を見出せる。板垣も長谷川と同様、文学部の出身であり堀口捨己を始めとする建築家と交流をもつ一方、村山知義や堀野正雄らとも関係をもった。長谷川は後年、板垣に自らの像を重ね芸術表現として建築を批評することの重要性、さらに建築家の側でなく、ユーザー側に立つ建築批評の重要性について語っている。そうした視座は、サントリー学芸賞を受賞することになる『建築有情』（1977年）としても結実する。大杉栄を主役においたこの都市・建築論は長谷川の出自がゆえに成し得たと言ってよいだろう。

声小さき人に対して向けられた闘い

そして長谷川は「神殿か獄舎か」の締めくくりに、装飾あるいはディテールの復権を挙げる。これは後のライフワークともなる村野藤吾研究への補助線でもある。ディテールは、建築と人間との接点であり、建築の身体化において重要な課題でもあった。そこでアドルフ・ロースの「装飾と犯罪」は、分かりやすい装飾への仮想敵として引きずり出される。しかし、わたしはロースも擁護したい。冒頭ジョレスの葬儀の列には、ロースの姿があった。たまたま居合わせたと後述しているが真偽の程は定かではない。たしかなことは、その光景を美しいと綴ったことだけだ。ロースもまたウィーン市の住宅局で、低所得者層への住居設計に携わった。ロースをモダニズムの創始とするならば、モダニズムは社会改良という声小さき人に対して向けられた闘いであったのだから。

2020年、公共放送を除く民放各社が「一緒にやろう2020」と掲げて公共財の電波のメディアを占拠した。声高に「一緒に」と叫ぶ連帯の喧伝に、居心地の悪さを感じずにはいられない。この揺り返しは必ず来る。そのカウンターパンチとして、「神殿か獄舎か」は未だに有効である。

もとはし・じん／建築史家

「自己」の充実としての建築評論

笠原一人

長谷川堯の仕事のうち、『神殿か獄舎か』(1972年)や『建築——雌の視角』(1973年)、『都市廻廊』(1975年)といった衝撃的な初期の評論と並んで忘れてはならないのが、1970年代から2010年代まで、長谷川が文字通り半生をかけて取り組んだ村野藤吾論であろう。村野は生前、日本の建築界にあって、必ずしも高く評価されていたわけではない。それは村野が自らを「少数派」と呼んだように、村野自身が自覚していたことである。しかしその村野を、日本の近代建築史の中で極めて重要な存在だと捉え直したのが長谷川だった。ここでは、長谷川の村野論に着目しながら、建築評論家としての後半生の仕事の意味を考えてみたい。

村野藤吾への語り口が、変化していく

長谷川が村野を本格的に論じたのは『都市廻廊』が最初であろう。そこではベルグソンらの概念を援用しながら、村野が、「過去」や「未来」ではなく、「現在」と「自己」を立脚点としてその充実を求める「プレゼンチスト」であり、ラスキンやモリスら「中世主義者」らにも通じる、「大正」的な建築家であることを論じている。その語りは長谷川ならではの粘り強い文体に支えられている。しかし建築作品についての記述は少なく言説を中心とし、「神殿／獄舎」や「明治・昭和／大正」、「雄／雌」といった概念や評価の図式がやや強く透けて見える。

それに対して、最晩年に書かれた2段組みで800頁を超える大作『村野藤吾の建築 昭和・戦前』(2011年)では、冒頭で村野を改めて「自己」の充実を求める「プレゼンチスト」と位置づけ、村野に対する評価が変わらぬものであることを示しているが、それに続く語り方は『都市廻廊』と異なる。村野の生まれや境遇から、大学を経て渡辺節の事務所に入る経緯が丁寧に語られ、その渡辺など村野の周辺にいる人物についてさえ、境遇や教育、建築に向き合う姿勢や思想などが詳細に語られる。そこから村野の立ち位置が明らかにされるのだ。そしてさらに、村野の戦前の主な建築作品そのものが、経緯を含めて、外観から内部、そして細部の装飾に至るまで、驚くほど克明に語られていく。

こうした描写については、長谷川自身が「あとがき」の中で、「瑣末なことに拘り過ぎた」「独りよがりな徒事」だったと反省の弁を述べている。読者にとっては、大きな深い森の中を歩いているように、なかなか村野の全体像が見えてこないことにもどかしさを感じるのは確かである。しかし読み進めていくうちに、それらの記述が決して無駄なものでも寄り道でもなく、すべてが村野の建築に向き合う姿勢や思想、作品に結実していることを理解することになる。

それは長谷川の徹底してモノやコトに則した具体的な語りによってもたらされている。その語りを通じて、読者は一つ一つの事象の意味が徐々に身体化されるような深い理解を獲得していくことになる。加えて、半生をかけて村野を論じた評論家としての長谷川の覚悟や凄味をも感じることになるのである。当然のことながら、読者以前に長谷川自身が、そのような感覚をもちながら書いていたはずだ。それはもはや長谷川の評論そのものが「自己」の充実を実践し「現在」を生きている、そんな境地にあると言えるのではないか。

「神殿か獄舎か」
四六判・272頁
鹿島出版会
2007年12月
※初版は1972年に相模書房から刊行された。再構成し、SD選書247として再版されたもの

中期の具体的な語り口が、晩年に結実

晩年にこうした変化がもたらされたのは、長谷川の中期の著作に拠ると思われる。『建築をめぐる回想と思索』(1976年)と村野の著書として知られている『建築をつくる者の心』(1981年)において、長谷川はインタビューアーとして具体的に村野に問いかけ、建築に向き合う姿勢や思想を明らかにしている。また8冊におよび村野の作品集『村野藤吾のデザイン・エッセンス』(2000～01年)においては、すべての巻に村野の建築作品についての評論を収めている。

中期に書かれた『洋館意匠』(1976年)や『洋館装飾』(1977年)、『建築有情』(1977年)、そして『建築旅愁』(1979年)も同様である。駅舎や地下鉄、廻廊、出窓、装飾といった都市や建築における部分的なモノが、人間の内面性の発露の結果として存在すること、あるいはそこに暮らし、活動する人々が建築に対して感情を移入する糸口となるものであることを、具体的に描写している。続く『建築逍遙』(1990年)や『建築巡礼22　ロンドン縦断』(1993年)、『田園住宅』(1994年)でも、具体的な語り口は似ている。こうした中期の著作は、従来長谷川の仕事としては等閑視されてきたと言えるが、これらの著作があったからこそ、最晩年の村野論が可能になったように思われる。

晩年に刊行された『建築の出自』に収められた書下ろしの前川國男論では、こうした変化を長谷川が別の形で自覚的に論じている。長谷川は、初期の著作においては前川を「神殿」の建築家あるいは「昭和建築の申し子」として論じていたのだが、ここでは前川に「獄舎」的で「大正」的な特徴を読み取っているのである。初期の評論にあっては長谷川が建築家の姿勢やあり方を問うたのに対して、晩年はむしろ評論する側の見方や論じ方次第で建築家の捉え方が変わること、すなわち問題は建築家や建築に向き合う長谷川自身の側にあることを自ら問うているようにも見える。ここでもまた、建築評論の実践そのものが「自己」の充実となり、長谷川自身がそれを生きているように思われる。

最後の著作『村野藤吾の建築 昭和・戦前』は、文字通り、長谷川の建築評論の実践の集大成として存在していると言える。

かさはら・かずと／建築史家

「村野藤吾の建築 昭和・戦前」
A5判・874頁
鹿島出版会
2011年3月

『日本の住宅遺産 名作を住み継ぐ』

著＝伏見唯
写真＝藤塚光政
世界文化社／2019年
224頁／A5判／2,500円+税

生きている家

評者：和田菜穂子（建築史家）

いま私が住む部屋の窓から再開発の建設現場がのぞめる。ここ数カ月の間で戸建住宅や小さな町工場が次々と立ち退き、白い仮囲いで一帯が覆われるやいなや、あっという間に更地になった。いまはクレーンなどの重機が入り、2023年完成予定の大掛かりな建設現場と化した。東京は街全体が東京オリンピック2020の熱に冒され、それに便乗した建設ラッシュが起きている。その一方で、名建築がひっそりと姿を消している事実も見落としてはいけない。

私が主宰する一般社団法人東京建築アクセスポイントは地域に根付く建築を文化資源とみなし、その価値を共有するための建築ツアーを2016年より行っている。見学先には個人邸宅も含まれている。私たちにとって、人々が暮らす住宅も文化遺産になり得るからだ。今まで行った住宅ツアーの例を挙げると、建築家阿部勤の自邸（1974年）、遠藤新設計の「荻原邸」（1924年）、西荻窪の「一欅庵（いっきょあん）」（1933年）、山脇巌設計の「三岸アトリエ」（1934年）、本書でも紹介している清家清の「私の家」（1954年）などがある。私たちは内部の見学だけでなく、どのように家を受け継いできたのか、そこで暮らす住まい手に話を聞くことに重きを置いている。家の老朽化や相続に関する苦労話が多いが、「手がかかる子ほど可愛い」という我が家を愛する気持ちが彼らの言葉の端々から伝わってくる。

本書もまた、私たちのツアーと同様、「生きている家」を対象にそこで暮らす人々にインタビューを行っている。著者の伏見唯は建築を専門とする編集者で、雑誌『TOTO通信』で特集を組んだ「ヴィンテージ住宅の未来」という記事がきっかけで、一般社団法人住宅遺産トラストから書籍化の話をもちかけられたという。そこで伏見は『家庭画報』の編集部に相談し、「名作住宅の継承」という連載を組むことにした。毎号1軒の掲載で、合計26軒になった時点で書籍化に至った。住み継ぐことをテーマにしているため、取材対象を探すのは容易ではなかった、とはしがきに記している。『家庭画報』を連載先に選んだのは、さすが目利き凄腕の編集者だと思った。なぜならその読者層はお金と時間に余裕のある富裕層の40代から60代の女性で、豊かなライフスタイルや芸術文化に関心を寄せているからだ。彼女らに名作住宅で暮らす実例を示し、住み継ぐことの価値を共有するには最適な企画といえよう。まさにこの連載は住宅遺産トラストにとって、「名作住宅と住まい手のマッチング」の布石となったに違いない。

冒頭には静かな時を刻む詩情溢れる写真が掲載されている。写真家の藤塚光政が撮り下ろしたものだ。それが家の魅力を一層引き立て、文章へといざなう。内部を切り取ったカットのうち、1枚だけ住まい手がリビングで談笑したり、縁側に佇んだりする様子が写し出されている。空間に人がいるだけで、「生きている家」の日常がしんみりと伝わってくるのは不思議だ。その1枚から暮らしの断片や住まい手の息遣いが読み取れる。

書籍化にあたり、雑誌に連載された26軒は以下の3つの時代に区分され、竣工年順に並べられている。

1．戦前の邸宅は、現代住宅になりうるか
――1920～1940年代
2．制限と清貧の協奏は、時を超えて響く
――1950～1960年代
3．気鋭の観念と理想を、引き受ける
――1970～1980年代

1920年代といえば今から約100年前である。大正デモクラシーとよばれた時代で、世界各地で民主化の動きが起こり、女性の社会的地位向上が謳われた。家事労働の軽減を考慮し、台所の合理化が図られるようになる。

私個人の話になるが、私の博士論文はこの時代から考察を始め、戦前戦後の個人住宅の歴史を辿っている。ただし、台所、風呂場、洗濯場などの水廻り空間がどのように変容していったのかに焦点を当てたものであり、いわゆるミース・ファン・デル・ローエが言うところの「サーバントスペース」、主要室でない空間に着目している。本書を手にとったとき、羨望の眼差しで名だたる日本の名作住宅を目にし、頁をめくった。「コアのあるH氏の住まい」（1953年）を除き、通常はそれらが主役になることはないので、他の住宅の水廻りはどうなっているのかとても気になった。

話をもとに戻すが、1章はウィリアム・メレル・ヴォーリズ設計の「ダブルハウス」（1921年）から始まり、遠藤新設計の「加地邸」（1928年）、アントニン・レーモンド設計の「トレッドソン別邸」（1931年）、「土浦亀城邸」（1935年）などが掲載されている。

ヴォーリズは1905（明治38）年にキリスト教の普及を目的として来日したが、アメリカでの建築教育を下敷きに近江八幡に設計活動の拠点を置いた。そこに建てた両親とスタッフのための2世帯住宅が「ダブルハウス」である。また、遠藤新、アントニン・レーモンド、土浦亀城は1913年に帝国ホテル設計のために来日したフランク・ロイド・ライトのもとで従事した建築家である。明治期はお雇い外国人建築家ジョサイヤ・コンドルらの働きによって、

国策として建築の近代化が推し進められた。大正期になると次世代の建築家が活躍し始め、中産階級向け住宅の西洋化がある種のブームとなる。1930年代になると欧米で見聞を深め、帰国した建築家らによって、白い箱型の機能主義建築が提案されるようになる。「土浦亀城邸」はその一例である。本書では土浦夫妻の死後、遺言状によって住み込みで彼らの世話をしていた方に相続された経緯が記されている。

2章では戦後の小住宅を中心に、質素ながらも豊かで個性溢れる建築家の自邸が名を連ねている。清家清設計の「私の家」、林昌二＋林雅子設計の「私たちの家」(1955年)、菊竹清訓設計の「スカイハウス」(1958年)である。どれも家族の増減やライフスタイルの変化等によって手が加えられ、当初の姿から変容している。まさに「生きている家」の好事例といえよう。

3章のキーワードは「一目惚れ」である。宮脇檀設計の「ブルーボックス」(1971年)は「かっこよさ」に「一目惚れ」され、室伏次郎設計の「大和町の家」(1974年)も「玄関扉を開けるなり、すぐに気に入」られた。坂本一成設計の「代田の町家」(1976年)も「一目見るなり気に入り……美しい家だと感じ」られ、石井修設計の「目神山の家5」(1980年)では「眺望の良い家を見せようと空き家だったその家に連れて行ったら、ひと目で気に入り、築35年ほどのこの住宅を購入する決意をした」というエピソードが掲載されている。最初の建主と建築家が相談しながら建てた家であるにも関わらず、時を経て住まい手が変わっても、人の心を鷲掴みにする魅力が備わっているのだろう。若い頃の「一目惚れ」とは異なり、経験を積んでからの直感に間違いは少ない。3章は「運命の家」との出逢いのエピソードが盛りだくさんだ。その家の記憶や歴史を受け継いだ彼らは、自分たち家族の今を刻んでいる。

著者の伏見唯はあとがきの最後にこう記している。「筆者は賃貸アパートに住んでいる。持ち家はない。本書を書いた以上、いつか住宅遺産を購入して、継承したい。お金ができたら。」

同感である。今の私の経済力ではヴィンテージものの椅子を購入するのが精一杯だが、将来の夢はいつか「一目惚れ」の家に出逢ってそこで好きな人と一緒に暮らすこと。最愛の人の皺や白髪を愛でるように、その家の古き良さを一つずつ発見し、それを慈しみながら、ハッピーな人生を過ごしたいと願っている。

和田菜穂子(わだ・なほこ)
一般社団法人東京建築アクセスポイント代表。博士(学術)。慶應義塾大学非常勤講師・中央大学非常勤講師。慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修了。神奈川県立近代美術館、コペンハーゲン大学、東北芸術工科大学、東京藝術大学等を経て、2016年より現職。日本および北欧の近代住宅史が専門。主な著書に『近代ニッポンの水まわり』『北欧モダンハウス』(以上、学芸出版社)、『アルヴァ・アアルトもうひとつの自然』(国書刊行会)、『ヴッツォンの窓の家』(彰国社)など。

『菊竹清訓｜都城市民会館』

日本建築学会都城市民会館調査記録WG 編
建築資料研究社／2019年
64頁／A4判／2,500円+税

1966年に菊竹清訓によって設計された「都城市民会館」がこの3月に解体された。本書は、建物の価値を改めて考えようと企画され、写真や図面、インタビューなどで構成された記録集である。当時設計に関わった、仙田満氏や長谷川逸子氏らの回顧録も掲載されている。一度見たら忘れられない強烈なインパクトを与える造形は、町のシンボルにもなっていただろう。また、窓枠のデザインや階段、手摺りのディテールなど、細かな部分へのこだわりも感じられる。10年以上前から解体と活用の間で揺れ動いてきた都城市民会館は、2019年に都城市が解体を発表し、建築関係者を中心に反対の声も上がっていたが、市は「仮に文化財としての価値があったとしても、自らの負担によって保存活用することは困難」という見解を示した。これはこの市に限った話ではないだろう。建築を残していくためには、建築的な価値、歴史的な価値だけではなく、残すことの良さや建築の面白さが行政や市民に分かりやすく、希望のある明るい雰囲気で伝わることが必要ではないだろうか。「再生」「リノベーション」という言葉がようやく浸透しつつあるが、今後は、建築界に止まらず、他分野との繋がりをつくって協力し、新たな活用案を見出していくことがいっそう求められる。 (編)

『京都のモダニズム建築』

河野良平 著
美学出版／2019年
232頁／四六判／2,000円+税

京都に今も多数残るモダニズム建築を紹介する。本書には、山田守の「京都タワー」をはじめとする著名な建物だけではなく、あまり知られていないような建築も数多く登場する。たとえば「洛東アパート」は土浦亀城の実弟・土浦稲城の設計である。また、村野藤吾は晩年に「河原町スカイマンション」という集合住宅を設計している。村野がマンションを設計していたというのも意外だが、その佇まいはシンプルで装飾がなく、言われなければ村野の作品と気づかない人も多いのではないだろうか。本書を読むと、こんなモダニズム建築もあったのかと驚く。また、著者は京都という場所性に重点を置き、建物単体の特徴やその設計者としての特徴だけでなく、建物の周辺状況や当時の背景などから丁寧に分析を行っている。建築が京都の街とどのような関係性をもっているのか、モダニズム建築がどのように現代へと繋がっていったのか、まだ知られざる魅力的な建物もあるのではないか。そんな風に、モダニズム建築への視野を広げてくれる一冊。 (編)

『構築の人、ジャン・プルーヴェ』

ジャン・プルーヴェ 著
早間玲子 編訳
みすず書房／2020年
336頁／B5変形判／8,500円+税

プルーヴェが手掛けた家具や建築は、時を超えて今なお人々を魅了し続けている。本書は、プルーヴェ本人が語り、筆を執った2冊の記録を翻訳、編集したもので、一つはプルーヴェが晩年に自身の生涯を振り返り語った言葉、もう一つは作品やものづくりに対する姿勢について語った言葉である。アトリエ・ジャン・プルーヴェのチーフとして協働した早間玲子氏が編訳を手掛けた。早間氏の丁寧な資料収集と編集によって、豊富な作品資料と詳細な年表も収録されており、これまでにあまり知られてこなかったその生涯と作品、思想への理解を深めることができる一冊となっている。「一人では何もできない」。これは本書でたびたび登場するプルーヴェの言葉だ。幼い頃から、家には画家だった父のさまざまな分野の仲間が集まっていたことや、鋳鉄の職人としての歩みがその後の彼のものづくりに大きな影響を与えたことが分かる。そして「工業製品は本来改良されてゆくもの」とも記している。その時代にとって何が必要かを考えながら、職人と共により良いものを目指してつくってゆくプルーヴェの姿勢に学ぶことは多い。 (編)

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館

リニューアルオープン記念展「猪熊弦一郎展　アートはバイタミン」

画家の猪熊弦一郎は、美しいものには人の心を癒したり活性化したりする力があると信じ、自分がつくり出した美をより多くの人々の身近な場所に提供し、世の中や人の生活に役立てたいという思いを強くもっていた。また家に一ついい絵があれば、それを毎日ほんの少し見るだけで大きな効果があり、美術館を「病院」とするなら、家で見る絵は「ビタミン剤」のようなものだと考えていた。本展は、本館のリニューアルオープンを記念し、猪熊が考えるアートの役割と、猪熊作品が生活のなかにつくり出した美のあり方を紹介する。「猪熊自身の暮らし」「プライベート空間への美の提供」「パブリックアート」の3部構成とし、猪熊の終の住処となった田園調布の家(吉村順三設計)の台所と居間の再現や、猪熊作品のある暮らしの実例、猪熊がデザインした家具や包装紙、長く愛され続けている猪熊の代表的なパブリックアートの現在を紹介する。

猪熊弦一郎
JR東日本上野駅壁画《自由》1951年
©ホンマタカシ

■会期：4月18日(土)～6月28日(日)
■会場：丸亀市猪熊弦一郎現代美術館(香川県丸亀市浜町80-1)
■入館料：一般950円、大学生650円、高校生以下・18歳未満・丸亀市在住の65歳以上・障害者手帳等を提示の方は無料
※4月18日、19日はリオープン記念のため観覧無料
■開館時間：10:00～18:00
※4月18日は12:00開館　※入館は閉館の30分前まで
■休館日：月曜日(ただし5月4日は開館)、5月7日(木)
■問合せ：電話　0877-24-7755
▷Webサイト　http://www.mimoca.org/ja/

京都港区東新橋1-5-1 パナソニック東京汐留ビル4階)
■開館時間：10:00～18:00
※5月8日(金)、6月5日(金)は20:00まで開館
※入館は閉館の30分前まで
■休館日：水曜日(ただし4月29日、5月6日は開館)
■入館料：一般1,000円、65歳以上900円、大学生700円、中高生500円、小学生以下・障害者手帳を提示の方(付添い者1名含む)は無料
※5月18日(月)国際博物館の日は観覧無料
■問合せ：電話　03-5777-8600(ハローダイヤル)
▷Webサイト
https://panasonic.co.jp/ls/museum/

東京都美術館
ボストン美術館展　芸術×力(げいじゅつとちから)

幅広いジャンルと質の高いコレクションを誇るボストン美術館。同館の所蔵作品から「芸術と力」に焦点を当て、約60点を展示。エジプトのファラオやヨーロッパの王侯貴族が自らの権力を誇示するためにつくらせた彫像や肖像画、各国の宮廷を彩った装飾美術、日本の大名が自ら描いた花鳥図など、芸術作品が古来から担ってきた社会的役割に注目する。
■会期：5月中旬(予定)～7月5日(日)
※7月18日(土)～10月4日(日)福岡市美術館に巡回
※10月24日(土)～2021年1月17日(日)神戸市立博物館に巡回
■会場：東京都美術館(東京都台東区上野公園8-36)
■開室時間：9:30～17:30
※金曜日、5月20日(水)、6月17日(水)は20:00まで
※入場は閉館の30分前まで
■休室日：月曜日(ただし5月4日、6月29日は開館)
■入室料：一般1,600円、65歳以上1,000円、大学生1,300円、高校生800円、中学生以下・障害者手帳を提示の方(付添い者1名含む)は無料
※第3水曜日(シルバーデー)は65歳以上の方無料(要証明)
■問合せ：電話　03-5777-8600(ハローダイヤル)
▷Webサイト
https://www.ntv.co.jp/boston2020/
【招待券プレゼント】詳細は右下欄。

DIC川村記念美術館
開館30周年記念展
ふたつのまどか
―コレクション×5人の作家たち

本館の建物には、エントランスホールの天井照明をはじめ、「重なる二つの円」のデザインがちりばめられている。初代館長・川村勝巳と建築家・海老原一郎の絆、鑑賞者と作品が出会う場という意味が込められている。本展は、5名の作家と当館のコレクション作品との出会いの場として、現代作家がコレクションを読み解き生まれた新たなインスタレーションが一つの空間に展開する。
■会期：～7月26日(日)
■会場：DIC川村記念美術館(千葉県佐倉市坂戸631)
■開館時間：9:30～17:00
■休館日：月曜日(ただし5月4日は開館)、5月7日(木)
■入館料：一般1,300円、学生・65歳以上1,100円、小中学生・高校生600円、障害者手帳を提示の方(付添い者1名含む)は一般1,000円、大学生・65歳以上800円、小中高生400円
■問合せ：電話　050-5541-8600(ハローダイヤル)
▷Webサイト
https://kawamura-museum.dic.co.jp/

TOTOギャラリー・間
妹島和世＋西沢立衛／SANAA展「環境と建築」

建築を媒介として、人々の生活と周辺地域が緩やかにつながってひとつの風景となり、訪れた人たちに生き生きとした活動を促す建築の在り方を提案してきたSANAA。本館では2003年以来2回目の個展であり、その後のSANAAの設計思想を知ることができる機会となっている。
■会期:5月14日(木)～8月9日(日)
■会場：TOTOギャラリー・間(東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル3F)
■開館時間：11:00～18:00
■休館日：月曜日・祝日
■入館料：無料
■問合せ：電話　03-3402-1010
▷Webサイト
https://jp.toto.com/gallerma/

寺田倉庫G1ビル
Immersive Museum

プロジェクションマッピングによって絵画の世界に没入(＝Immersive)できる体験型ミュージアム。壁、床に投影される没入映像と音を組み合わせて名画の世界を再現する。日本初開催となる今回は、「印象派」がテーマで、モネの「睡蓮」やドガの「踊り子」などが倉庫を活用した大空間に展開する。
■会期：～8月12日(水)
■会場：寺田倉庫 G1ビル(東京都品川区東品川2-6-4)
■開館時間：10:00:～21:00
※入場は閉館の1時間前まで
■休館日：会期中無休
■入館料：18歳以上2,500円、中高生1,500円、小学生800円
■問合せ：
▷Webサイト
https://immersive-museum.jp/

展覧会招待券プレゼント

住所・氏名・希望展覧会名「国立西洋美術館／ロンドン・ナショナル・ギャラリー展」「東京都美術館／ボストン美術館展 芸術×力」(抽選で各5組10名)のいずれかを明記し、下記へご応募ください。当選発表は発送をもって代えさせていただきます。
メール：info@web-jyuken.com
FAX:03-3635-0045　(編集部宛)

展覧会

Gallery A4
マギーズセンターの建築と庭
―本来の自分を取り戻す居場所―

がんで亡くなったイギリスの造園家マギー・ジェンクスの願いから生まれた患者と家族、友人のための無料相談支援の場、マギーズセンター。マギーが入院していた病院敷地内に第1号が開設され、その後イギリスに21カ所、香港、東京、バルセロナにも開設された。本展では建築家たちによる空間とマギーの精神「安心できる庭」との関係性を考える。
■会期：～5月28日（木）
■会場：Gallery A4（東京都江東区新砂1-1-1 竹中工務店東京本店1F）
■開館時間：10:00～18:00
※土曜日、最終日は17:00まで
■休館日:日曜日、祝日、4月29日(水)～5月6日（水）
■入館料：無料
■問合せ：電話　03-6660-6011
▷Webサイト
http://www.a-quad.jp/

原美術館
光―呼吸　時をすくう5人

五輪に向かう慌しさと不穏な空気に翻弄され、日々の出来事や感情を記憶する間もなく過ぎ去ってしまう――。本展では、今井智己、城戸保、佐藤時啓らの写真と佐藤雅晴のアニメーション、リー・キットのインスタレーションを展示する。5人の作品を通して、意識されぬまま過ぎ去る時を掬（すく）い、見逃されてしまいそうな光景を救い、2020年のディテールを記憶に残す。
■会期:4月25日(土)～6月7日(日)
■会場：原美術館（東京都品川区北品川4-7-25）
■開館時間：11:00～17:00
※祝日を除く水曜日は20:00まで
※入館は閉館の30分前まで
■休館日：月曜日（ただし5月4日は開館）、5月7日(木)
■入館料：一般1,100円、70歳以上550円(要証明)、大高生700円、小中生500円、原美術館メンバー無料、障害者手帳を提示の方は半額（付添い者1名は無料）
※学期中の土曜日は小中高生無料
■問合せ：電話　03-3445-0651
▷Webサイト
https://www.haramuseum.or.jp

国立西洋美術館
ロンドン・ナショナル・ギャラリー展

1824年に設立された、西洋絵画に特化した世界屈指の美術館、ロンドン・ナショナル・ギャラリー。ルネサンスから19世紀ポスト印象派に至る同館所蔵の名品61点を展示し、イギリスにおけるヨーロッパ美術の受容と、ヨーロッパ大陸との美術交流の歴史を紐解く。クリヴェッリの《聖エミディウスを伴う受胎告知》やゴッホの《ひまわり》など、出品作すべてが日本初公開となる。
■会期：～6月14日（日）
※7月7日（火）～10月18日（日）に国立国際美術館に巡回
■会場：国立西洋美術館（東京都台東区上野公園7-7）
■開館時間：9:30～17:30
※金・土曜日は20:00まで
※入館は閉館の30分前まで
■休館日：月曜日（ただし5月4日は開館）
■入館料：一般1,700円、大学生1,100円、高校生700円、中学生以下・障害者手帳を提示の方(付添い者1名含む)は無料
■問合せ：電話　03-5777-8600（ハローダイヤル）
▷Webサイト
https://artexhibition.jp/london2020/
【招待券プレゼント】詳細は右下欄。

東京都現代美術館
オラファー・エリアソン
ときには川となる

アートを介したサステナブルな世界の実現に向けた試みとして、写真、彫刻、ドローイング、インスタレーション、デザイン、建築など、多岐にわたる表現活動を展開するエリアソン。本展はエリアソンの再生可能エネルギーへの関心と気候変動への働きかけを軸に構成する。代表作を含む国内初公開の作品が展示される。
■会期：～6月14日(日)
■会場：東京都現代美術館（東京都江東区三好4-1-1）
■開館時間：10:00～18:00
※入館は閉館の30分前まで
■休館日：月曜日（ただし5月4日は開館）、5月7日（木）
■入館料：一般1,400円、大学生・65歳以上1,000円、中高生500円、小学生以下・障害者手帳を提示の方（付添い者2名含む）は無料
※第3水曜日(シルバーデー)は65歳以上の方無料(要証明)
■問合せ：電話　03-5777-8600（ハローダイヤル）
▷Webサイト
https://www.mot-art-museum.jp/

宮城県美術館
ウィリアム・モリス
原風景でたどるデザインの軌跡

モリスの幼少期や学生時代にはじまり晩年に至るまで、デザイナーとしてのモリスの生涯を紐解く。モリスのデザインの軌跡を多数の室内装飾で紹介するほか、モリスが晩年に設立した印刷工房「ケルムスコット・プレス」で刊行された53書目66冊も前後期に分けて全巻展示される。
■会期：～6月14日(日)
■会場：宮城県美術館（宮城県仙台市青葉区川内元支倉34-1）
■開館時間：9:30～17:00
※入館は閉館の30分前まで
■休館日：月曜日（ただし5月4日は開館）
■入館料：一般1,300円、大学生1,100円、小中学生・高校生650円
■問合せ：電話　022-221-2111
▷Webサイト
https://www.khb-tv.co.jp/s001/010/williammorris/index.html

森美術館
ヘザウィック・スタジオ展
共感する建築

ロンドンを拠点に世界各地で革新的な建築などのプロジェクトを手掛けるデザイン集団、ヘザウィック・スタジオ。多様な素材を研究し、伝統的な技術と最新のエンジニアリングを用いた斬新なアイディアを実現してきた同スタジオの主要プロジェクトを6つの観点から紹介する。
■会期：～6月14日（日）
■会場：森美術館（東京都港区六本木6-10-1　六本木ヒルズ森タワー53F)
■開館時間：10:00～22:00
※ 火曜日は17:00まで
※入場は閉館の30分前まで
■休館日：会期中無休
■入館料：一般1,800円、65歳以上1,500円、大高生1,200円、4歳～中学生600円、障害者手帳を提示の方（付添い者1名含む）は無料
■問合せ：電話　03-5777-8600（ハローダイヤル）
▷Webサイト
https://www.mori.art.museum/jp/

パナソニック汐留美術館
ルオーと日本展
響き合う芸術と魂 – 交流の百年

フランスの画家ジョルジュ・ルオーは、梅原龍三郎をはじめ日本の画家に影響を与えた。ルオーも、錦絵を模写したりコレクター福島繁太郎のパリの家を訪問したりするなど、日本の芸術家らと親交を深めた。ルオーの作品と、梅原や松本竣介、三岸好太郎など日本の近代洋画を代表する画家たちの作品、約80点のと書簡などの関連資料を展示する。
■会期：～6月23日（火）
■会場:パナソニック汐留美術館（東

原美術館「光―呼吸 時をすくう５人」
佐藤時啓　光―呼吸　ピグメントプリント　2020
©Tokihiro Sato

左写真／国立西洋美術館「ロンドン・ナショナル・ギャラリー展」
フィンセント・ファン・ゴッホ
《ひまわり》1888年
油彩・カンヴァス　92.1×73cm
©The National Gallery, London. Bought, Courtauld Fund, 1924

右写真／東京都美術館「ボストン美術館展　芸術×力」
《ラメセス2世像上半身部分》
エジプト（ブバスティス出土）、新王国、第19王朝、ラメセス2世治世時、紀元前1279-紀元前1212年
Museum of Fine Arts, Boston, Egypt Exploration Fund by subscription
Photograph © Museum of Fine Arts, Boston

設計者・著者

木下光 (きのした・ひかる)

1968年 福岡県に生まれる。1992年 京都大学工学部建築学科卒業、1996年 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻博士課程中退。関西大学助手、専任講師、准教授を経て、2013年 シンガポール国立大学客員研究員。現在、関西大学環境都市工学部建築学科教授。

連絡先
関西大学環境都市工学部建築学科都市設計研究室
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35
電話 06-6368-0833 メール kinosita@kansai-u.ac.jp
https://www.urbandesignlab-kansaiuniv.com/

田中敏溥 (たなか・としひろ)

1944年 新潟県村上市に生まれる。1969年 東京藝術大学建築科卒業。1971年 東京芸術大学大学院修了。茂木計一郎氏のもとで環境計画及び建築設計活動に従事。1977年 田中敏溥建築設計事務所設立。

連絡先
田中敏溥建築設計事務所
〒151-0053 東京都渋谷区代々木2-26-10 風蓮人ビル102
電話 03-3320-5854 FAX 03-3320-3803
https://www.tanakaaa.com/

和田彬代 (わだ・あきよ)

1995年 大阪府に生まれる。2017年 関西大学環境都市工学部建築学科卒業、2019年 関西大学大学院理工学研究科環境都市工学専攻建築学分野修了。修士論文として「スリランカにおけるジェフリー・バワの住宅建築に用いられる装飾紋様の多様性」をまとめる。2019年～ 安井建築設計事務所勤務。

連絡先
安井建築設計事務所
〒540-0034 大阪府大阪市中央区島町2-4-7
https://www.yasui-archi.co.jp

山村健 (やまむら・たけし)

photo : Keito Masuda

一級建築士。博士(建築学)。1984年生まれ。2006年 早稲田大学理工学部建築学科卒業。2006年～07年 バルセロナ建築学留学。2009年 早稲田大学理工学研究科建築学専攻修了。2012年 早稲田大学創造理工学研究科建築学専攻博士後期課程修了、博士(建築学)。2012年 ～ 2015年 Dominique Perrault Architecture。2015年 早稲田大学建築学科講師、2020年4月～東京工芸大学工学部建築学科准教授。2017年 TKY-Lab開設。同年建築デザイン事務所YSLA ArchitectsをNatalia Sanz Laviñaと主宰。

連絡先
TKY-LAB.
https://www.tky-lab.com/
YSLA
https://www.yamamurasanzlavina.com/
メール yamamura@y-sl.com

写真家

Dominic Sansoni (ドミニク・サンソーニ)

写真家。ドキュメンタリーや旅をテーマに活動。Sebastian PosingisやRukshan Jayewardeneと共に、Three Blind Men Photographyとして幅広く活動する。近年、南インドのヴァナキュラー建築やコロンボ北部に見られる暮らしの記録、スリランカの聖地研究に精力的に取り組んでいる。作品に、Lunuganga (1990,Times Editions)、Sri Lanka: Resplendent Isle (1990,Times Editions) 、Bawa: The Sri Lanka Gardens (2008,Thames & Hudson)、The Architectural Heritage of Sri Lanka: Measured Drawings by the Anjalendran Studio(2016,Talisman Publishing)など。

連絡先
Three Blind Men Photography
www.threeblindmen.com

Sebastian Posingis (セバスチャン・ポジンギス)

イラン、ギリシャ、インド、スリランカで育つ、ドイツ人写真家。イギリス、ケント大学社会人類学の学位を持つ。Dominic Sansoni や Rukshan Jayewardeneと共に、Three Blind Men Photography (www.threeblindmen.com) として幅広く活動する。主な作品に、BAWA STAIRCASES (2019, Talisman Publishing)、IN SEARCH OF BAWA: Master Architect of Sri Lanka (2016, Talisman Publishing)、THE NEW SRI LANKAN HOUSE (2015 Talisman Publishing) など。2020年、SALT RIVER: Geoffrey Bawa's garden at Lunuganga (Gerhard Steidl,Germany) : Text by Michael Ondaatje.やTHE CURRENCY NOTE DESIGNS OF LAKI SENANAYAKEを出版予定。

連絡先 www.sebastianposingis.com

シリーズ

藤岡龍介 (ふじおか・りゅうすけ)

1952年 奈良県に生まれる。1975年 近畿大学理工学部建築学科卒業後、1975年～ 水澤工務店勤務。1980年～ 降幡建築設計事務所を経て、1985年 奈良に戻り藤岡建築研究室を設立。2009年～ 京都市文化財保存・活用マネージャー養成講座講師。地域に根ざした歴史的建物の保存修理・改修・再生などを行う。再生事例に「旧新川家住宅」(泉佐野市指定文化財)「旧河澄家住宅」(東大阪市指定文化財) など多数。2013年 木の建築大賞等受賞。著書に、『住み継ぐ-藤岡建築研究室の改修・再生と新築』(建築資料研究社)。

連絡先
藤岡建築研究室
〒630-8306 奈良県奈良市紀寺町687-9
電話 0742-27-0031 メール fujioka-@kcn.ne.jp
http://fujioka-architecture-labo.com/

落合悠斗 (おちあい・ゆうと)

奈良県文化財保存課・文化財保存事務所技師。2018年 早稲田大学建築学科卒業。同年 奈良県入庁。以後、有形文化財(建造物)の保護を担当。大学での専攻は日本近代建築史で、本人もそう信じているが、めぐり合う建物は古代から現代までさまざま。

連絡先
奈良県文化・教育・くらし創造部 文化財保存課・文化財保存事務所
〒630-8501 奈良県奈良市登大路町30
電話 0742-27-9865

写真家

垂見孔士（たるみ・こうし）

1953年生まれ。1971年 建築写真家、故・中村保氏に師事。1980年 垂見写真事務所設立。建築・住宅を中心に写真・動画撮影を行う。

連絡先
垂見写真事務所
〒169-0075
東京都新宿区高田馬場
4-27-15-208
メール
tarumiphoto@gmail.com
www.tarumi-photo.jp/

市川靖史（いちかわ・やすし）

1968年 東京都に生まれる。1993年 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科修了。現代美術、工芸、建築の分野を中心に、写真撮影を手がける。

連絡先
〒606-0806
京都府京都市左京区
下鴨蓼倉町29
メール
stickw@mediawars.ne.jp

高島未季（たかしま・みき）

神奈川県横浜市出身。桑沢デザイン研究所スペースデザイン専攻卒業。フリーランスフォトグラファーとして活動の他、人とスペースを対象にパーソナルプロジェクトも進める。

連絡先
メール
mikitakashim@gmail.com
www.mikitakashima.space

住宅建築　2020年8月号 | No.482 | 6月19日発売

特　集　**コンクリートの未来**

浅井裕雄「溶ける建築」
井上洋介「青葉の家」
宇野友明「幡豆の家」
能作文徳「ピアノ室のある長屋」
柳沢究「ほら貝のRC住宅改修」
木村松本建築設計事務所「本野精吾邸の継承」
寄稿・笠原一人「近現代のコンクリート住宅の保存再生」
寄稿・今本啓一「コンクリート造の寿命」
インタビュー・酒井雄也「コンクリートがれきから新しい材料をつくる」

シリーズ　**森と人と建築と**　第15回
登録有形文化財のこれから　第3回

連　載　INTERIOR　第13回

［編集室］　相談役：平良敬一
編集スタッフ：小泉淳子、戸谷知里
編集協力：伏見唯、帳章子
作図協力：木下正昭　　作図スタッフ：鈴木聡
編集所：東京都墨田区両国4-32-16 両国プラザビル1004号室
電話　03-3632-3236　　FAX　03-3635-0045
メール　info@web-jyuken.com
Web 住宅建築　https://jyuken.site/
Facebook　http://www.facebook.com/jyuuken.mag

●田中敏溥さんのつくる肩肘はらずにくつろげる家は、町に開かれ、風景のひとつとなり、家だけでなく人と人も連なっていきます。それが田中さんの目指す住宅づくりであり、町づくりです。すべてのものづくりに携わる方々が心を開放し、横の連携をもったなら、すばらしい町が生まれるように思います。
「町ゆけば足もとに咲くいぬふぐり」　　（小泉淳子）

●新型コロナの影響で家にいる時間が増えた。もともとテレビはないので、ラジオを以前より聴くようになって、思わず笑ってしまう投稿や、「こんな時はスカッとする音楽をかけましょう！」と明るいDJの声に、やっぱりまずは心が元気じゃなきゃダメだ！　と思った。暗いニュースばかり気にしないで、映画を楽しんだり、ちょっと凝った料理をつくってみたり、家にいるからこその時間を豊かに過ごしたい。　　（戸谷知里）

設計者・著者

加藤正博（かとう・まさひろ）

1943年 愛知県瀬戸市に生まれる。芝浦工業大学卒業後、近代建築社に入社。1973年 鹿島出版会に入社。退社後、フリーランスとして活動し、さまざまな企画に携わる。1980年 古瀬戸珈琲店を開業。1988年 ギャラリー珈琲店・古瀬戸を開業。

連絡先
ギャラリー珈琲店・古瀬戸
〒101-0051　東京都千代田区神田神保町1-7 NSEビル1階
電話　03-3294-7941

小川格（おがわ・いたる）

1940年 東京都に生まれる。1966年 法政大学建築学科卒業後、新建築社入社。1970年 エーアンドユー入社。1972年 明石建築設計事務所入社。1974年 相模書房入社。1984年 編集事務所・南風舎設立、2010年まで代表。建築関係の雑誌・書籍の編集に携わる。現在ブログ「近代建築の楽しみ」運営。

連絡先
南風舎
〒101-0051　東京都千代田区神田神保町1-46 斎藤ビル201
電話　03-3294-9341
メール　kak@nampoosha.co.jp

中村謙太郎（なかむら・けんたろう）

1969年 東京都に生まれる。1992年 武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業。1992～2010年 雑誌『住宅建築』編集部。2010～2013年 雑誌『チルチンびと』編集部。2014年～ フリーランス編集者として活動開始。2015年 高橋昌巳、遠野未来とともに「まちなかで土壁の家をふやす会」結成。2017年「神楽坂建築塾」事務局に加入。

連絡先
電話　090-8088-5295
メール　kenken@a04.itscom.net

本橋仁（もとはし・じん）

1986年 東京都に生まれる。博士（工学）。京都国立近代美術館特定研究員。早稲田大学卒業後、同大学院修士課程、博士後期課程、早稲田大学建築学科助手、メグロ建築研究所取締役を経て、現職。最近のおもな活動に、図面表現懇親会、家を渉る劇、感覚をひらく（新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業）など。

連絡先　メール　eriyori@gmail.com

笠原一人（かさはら・かずと）

1970年 兵庫県に生まれる。1998年 京都工芸繊維大学大学院博士課程修了。2010～2011年 オランダ・デルフト工科大学客員研究員。現在、京都工芸繊維大学助教。住宅遺産トラスト関西理事。DOCOMOMO Japan理事。共編著に『建築家浦辺鎮太郎の仕事』（学芸出版社）、『建築と都市の保存再生デザイン』（鹿島出版会）ほか。共著に『村野藤吾の住宅デザイン』（国書刊行会）ほか。

連絡先
京都工芸繊維大学　デザイン・建築学系
〒606-8585　京都府京都市左京区松ヶ崎橋上町1

伏見唯（ふしみ・ゆい）

1982年 東京都に生まれる。早稲田大学大学院修士課程修了後、新建築社、同大学大学院博士後期課程を経て、2014年 伏見編集室を設立。『TOTO通信』などの編集制作を手がける。博士（工学）。武蔵野大学、早稲田大学非常勤講師。